四聖姉妹の奮闘記

愛川蓮

もしも四聖勇者に姉や妹がいたら？
そして彼女たちが彼らを助けていたら……？
というコンセプトの『盾の勇者の成り上がり』の二次創作です。
色々と原作からかけ離れているところがありますが、どうか辛抱して読んでいただけるようのお願いします。

目次

番外編 1
番外～錬と凛のゲームの話～ …… 1
カルテットプロローグ 13
槍の妹のプロローグ …… 13
剣の姉のプロローグ …… 27
弓の姉のプロローグ …… 39
盾の妹のプロローグ …… 54
盾と投擲具の第１章～始まりの波～ 67
四星結集～再会も添えて～ …… 67
二度目の自己紹介、仲間分け …… 81
支度金と盾の現実 …… 96

裏切り～最初の絆～……115
奴隷～キール～……132
最初の一歩……154
波に備えて～土下座～……168
龍刻の砂時計～理由～……185
龍刻の砂時計～権力者～……197
波～村防衛戦～……210
宴会～家族の楔～……224
剣と爪の第２章～復活の探索者～ 239
論功式～たまごガチャ～……239
産まれる者～フィーロ、サクラ、ノワール、ブラン～……254
激闘～村防衛レース～……272
ぐだぐだ行進曲、そして……288

死闘の果て、神速と黄金……305
行商と陰謀と大立ち回り……324
合流及び偵察……341
戦闘開始～錬の怒り～……356
剣と探索者の目覚め……369

番外編

番外～錬と凛のゲームの話～

錬と凛のやって来たゲームの話です。

「そう言えば、錬と凛ちゃんの世界のゲームってどんなんだったの？」

あの話し合いから数十分後。兄さんが夕食の席で唐突にこんなことを訪ねました。

「どうしたんですか、急に？」

「いやさぁ、樹と凛ちゃんが話し合ってた時に樹が『凄いクソゲーの数々ですね……』って、戦慄してたのが聞こえてな。それでどんなゲームがあるか気になったんだ」

「……なるほどな。だが、『ちゃん』付けは止めてくれ」

兄さんの言葉に凛さんは頷くもの、恥ずかしさからか顔を赤らめて目をそらしま

した。
「……そうだな一言で言うなら『玉石混淆』だな」
「あ、そうなんだ」
「まあな……どっちかと言うと7割のクソゲーの泥のスープに2割の普通ゲーと良ゲーの石に1割の神ゲーという宝石の玉石混淆だったけどな……」
凛さんがそう言うと、錬さんが遠い目をしながらそう言いました。
「『鯖癌（サバガン）』……『サバイバル・ガンマン』事件と『ソードアート・オンライン』事件の通称『SS（ダブルエス）事件』で危うくVRその物が滅びそうになったときもあったな」
「特に姉さんが巻き込まれたSAO事件の時は大変だったな。日本中がてんやわんやの大騒ぎだった」
「その事では苦労をかけたな」
「待ってください、いきなりなんか凄いキーワードが飛び出したような……」
私が事件について聞くと、凛さんと錬さんは説明を始めてくれました。
「どっちもリアリティを『求めすぎた』奴等の作品だよ。鯖癌はVRが『脳に電流を流す』、『バーチャルなリアリティ』を悪い意味で知らしめて……」

「ＳＡＯは開発者……『茅場晶彦』が『自身の夢を叶える』為に作られたものだな。……本来は『デスゲーム』にするつもりだったらしいが鯖癌事件のせいで已む無くオミットしたらしい」

「逆だったらＶＲその物が滅んでたんですね……」

「その後で『須郷』のクソ野郎がＡＬＯ……『アルブヘイム・オンライン』でバカをやらかしたせいで本気で滅びそうになったけどな……」

「その人何をやらかしたんですか？」

私が錬さんが憎々しげな顔で言った事について聞くと、錬さんは「思い出したくもないがな、あんなクソ研究」と前置きを置いて答えてくれました。

「人の感情や意思をコントロールするっていう方法を作るための研究にＳＡＯに囚われた人達の一部をＡＬＯに移して『実験』したんだよ。姉さんは、その『試作１号』としてプレイヤーに立ち塞がる『ボスキャラ』をやらされてた。

……そのせいで、『キリト』や『サチ』さん……ＳＡＯでの戦友や俺と詩乃みたいな現実世界での知り合いと戦うなんて真似をやらされたんだ」

「なんて非人道な……！」

「許せねえ！人間をなんだと思ってやがる！」
「なるほど、確かにクソ野郎ですね」
「屑以外の何者でもないわね！」
「人間じゃねえな、そいつ！」
「許せない！」
私達がそのクソみたいなやり方に憤り、錬さんも「そうだな、今でも思い出す度に腸が煮えくり返るからな……」と暗い顔でそう言いました。
「……まぁ、最終的に色々と手助けがあって誰にも後遺症が残らずに帰れて、須郷も捕まったのだがな」
「見苦しく俺やキリトを殺そうとした須郷を『くたばれ外道！』とか言いながら後ろから蹴り飛ばした姉さんは今でも記憶に残ってるよ」
「そいつが捕まったのは良いんですけど、よくＶＲＭＭＯが潰れませんでしたね？」
私が疑問点を述べると、凛さん達は苦笑いをしながら答えてくれました。
「それは『ザ・シード』と呼ばれる『お手軽ＶＲＭＭＯ製造プログラム』が配布さ

れたからだな」
「その影響で更に混沌とした様子になったけどな……」
「そんなに混沌だったのか？」
「ああ、あえてザ・シードを使わないＶＲＭＭＯ……通称『チャレンジャー』もあったからな。『なんでザ・シードを使ったのにこうなるんだよ!?』なゲームや普通にクソゲーなチャレンジャー、ちゃんとしたゲームに神ゲーとも言えるようなチャレンジャー……まさにＶＲＭＭＯのごった煮だったな」
「その中でも面白いものはあったけどな」
「クソゲーもありましたけどね……」
樹さんが凛さんの言葉に苦笑いをすると、凛さんは「それじゃ、それらを紹介するか」と言いました。
「最初は『便秘』……『ベルセルク・オンライン・パッション』だな」
「略称からそこはかとなくクソゲーの臭いがする……」
「実際クソゲーだしな。通称が『超次元バグゲリラリズム格ゲー』だぞ？」
「凄い通称ですね!?」

「実際……腕が伸びるだの攻撃が三倍速になるだのの人外バグがＮＰＣにも適用されるせいでラスボスから放たれる６フレームでフィールド全域をカバーする攻撃を予備動作から予測してリズムゲーの如くカウンターしなければ勝てないからその通称なんだけどな。私をクソゲーの沼に半分引きずり込んだ奴ともこのゲームで出会った」

６フレーム……０．１秒!?　人間の動体視力超越してません!?

「次は『世紀末円卓』……『ユナイトラウンズ』だな」

「世紀末……略奪ゲーかな？」

「本来は『協力』だけどな。あまりにもドロップを絞りすぎたせいで攻略ｗｉｋｉに『ＮＰＣの露店から強盗するか、それをしたプレイヤーを攻撃して入手』がチュートリアルのクリア方法として真面目に書かれた代物だぞ？」

モラルもへったくれもないですね……

「挙げ句の果てに一人のプレイヤーがＮＰＣの王国を掌握してラスボスと化したからな……まあ、ＡＬＯの時に手助けしてくれた人の一人だからあんまり強くは言えないが……」

プレイヤーがラスボスと化した……って、どんな悪辣な事をしたんでしょうか？

「次は『ネフホロ』……『Ｎｅｐｈｉｌｉｍ（ネフィリム）Ｈｏｌｌｏｗ（ホロウ）』だな」

「どんなゲームなの？」

「要約すると、ネフィリムというマネキンみたいな巨人が落ちてきてなんやかんやあって文明が滅んだ世界で武装させたネフィリムに乗って戦うというロボゲーだな」

結構面白そうですね。

「結構面白そうだな」

「操作性がクソゲーレベルで難しくなければな……」

「？　どういうこと？」

「一言で言うなら操縦方法が『コックピットに乗り込むタイプ』じゃなくて『機体と融合するタイプ』だからこその難しさになったからだな。元康、お前一人でボーカル、ベース、ギター、ドラム、キーボードをやれって言ったら出来るか？」

「無理！」

「つまりそういう事だ」
……やることが多すぎて操作が複雑になりすぎたんですね。
「次は『ＧＧＯ』……『ガンゲイル・オンライン』だな」
「あ、これは分かりやすい！銃を持って戦うんでしょ！」
「世界的には『世紀末な未来世界で』が付くがな。……錬と詩乃が付き合う切っ掛けになった『死銃（デスガン）事件』の舞台にもなった」
「……どんな事件だったんですか？」
樹さんが聞くと凛さんはしかめっ面をして話始めました。
「事件としては銃で撃たれたプレイヤーが実際に死ぬというものだったんだが……トリックとしては単純なものでゲームでの実行犯がアバターを殺害後、現実世界での実行犯がそのプレイヤーの住居に侵入して殺害というものだった。……問題はその共犯者に詩乃と錬の共通の友人がいたことだな」
「それは……大変でしたね」
「ああ、あいつは詩乃に歪んだ恋心を向けていてな……詳細は省くが正当防衛で強盗犯を射殺してしまった詩乃を『悪を成敗した英雄（ヒーロー）』として見ていた。が、詩

乃のありたかった『自分』とあいつの見ていた『詩乃』と食い違っていた上に……その前のＧＧＯでの決勝戦で錬が詩乃に告白してそれが受け入れられたことで完全に狂気に染まって詩乃に無理心中を図ったんだよ」

「最終的に俺がぶっ飛ばしたけどな。……まあ、あいつの親がくそな奴等だったから同情できる部分もあったんだけどな」

あー……歪みやすい環境にあったんですね？

「だからといって昌一……あいつの兄の言葉にも耳を貸さないのはないだろ」

「そう、だな」

「……僕らって、恵まれてたんですね」

そうですね……

「気を取り直して次だ。次は『シャングリラ・フロンティア』……私の一番のお気に入りのゲームだ」

「どういうゲームなんだ？」

「端的に言うなら未来的な古代人が滅んでその後に魔法もある中世的な世界が出来たゲームと思ってくれ」

つまり、魔法も機械も出せる世界観って事ですね。
「どうしてお気に入りになったの？」
「ああ、やり始めてすぐは普通のＶＲＭＭＯと思っていたが……あるクエストの際に普通のゲームじゃないとわかってな。それで本格的にお気に入りになったんだ」
凛さんが照れたような顔でそう言いました。
「他には『天誅』を合言葉にログイン、ログボ果てはログアウト時にもＰＫを仕掛け、新人に根切りをする程の対人ゲーム『辻斬（つじぎり）・狂想曲（カプリッチオ）：オンライン』」
「倫理観やモラルは一体何処へ!?」
本当にそうですよね!?
「『災獣』と呼ばれる天災を巻き起こす怪物が迫る中でのんびり農業をしろと言う内容のクソゲー『スリリングファーム』」
「馬鹿なのか、それ!?」
一体どのようなゲームなんですかそれ？
「最後は良作だが、馬が無敵なんで少し不満が残る格ゲー『キャバリー・クライシス』だ」

「まぁ、動物愛護的にはいいんだけど……」
「不満が残るのは確かですね」
私がそう言うと、凛さんは「そうだな」と言った後でこう言いました。
「と、まあこんな感じだ。他にも色々あるんだが……長すぎない方が良いと思って、数を押さえた。で、参考になったか？」
「うん、まあそうだけど……」
「2、3程社会的にもとんでもない事件の連発で大変でしたね」
「しかも内3つも巻き込まれたしな……」
「まあ、な……」
「ああ……」
私は凛さんと錬さんの『まだあるんだよなー』的な苦笑いの顔が妙に印象に残りました。

次回『論功式～たまごガチャ～』

お楽しみに！

カルテットプロローグ

槍の妹のプロローグ

元康の妹のプロローグです

兄が死にました。死因は痴情の縺れによる刺殺だそうです。

「馬鹿です。馬鹿ですよ、兄さんは……」

私『北村香（きたむらかおる）』は雨に濡れながら、死んだ兄の『北村元康（きたむらもとやす）』の悪口を言いながら歩みます。

兄は、モテる人でした。幼い頃から両親の仕事の都合で引っ越しを繰り返していたせいで『幼馴染み』なんてそれこそ星の数ほどいたし、付き合っていた女の人（女装『男子』も含めて）もそれと同じくらいいました。

私はそんな兄を『異性』としては軽蔑してはいましたが、『家族』としては好き

だったので変な女に引っ掛かっては大変だと思い、兄の女性関係に口を出して地雷みたいな女性との関わりを避けさせていました。

でも……

『男をあげたいし……なにより香は俺にかかりっきりでろくに男と関われなかっただろ？　俺が帰って来るまでに恋人を作れよ？』

『大きなお世話ですよ！　兄さんこそ変な女に引っ掛かって、刺されないでくださいよ！』

『ははは、香の花嫁姿を見るまで死ねないさ』

『き、気が早すぎますよ！　それにそういうのはお父さんの台詞じゃないですか！』

そう言って独り暮らしをするのに不安だった私を説得した兄さんは、私の不安通り好意が思いっきり『病み』の領域になるまでになった女の人『三人』に滅多刺しにされて死んだそうです。

「なにが私の花嫁姿を見るまで死ねない……ですか。私を、置いていかないでくださいよ」

幼い頃から側にいた兄の死に私は予想以上の悲しみを抱きながら歩き……

ドン！

「……え？」

私はいきなり感じた衝撃と共に訪れた焼けるような痛みに体を崩しました。

「あんたさえ、あんたさえいなければ、私がお兄ちゃんの『妹』だったのに！　責任取りなさいよこの糞女！」

いつの間にか私の側にいた女の子が私に向けて血のついた包丁を降り下ろしながらそう言いました。

「ああ、貴女が、最後の……一人、ですか……」

三人の内二人は兄さんを慕う女性たちに二度と世間に出られないような私刑を受けたのですが……残りの一人には逃げられたと言っていました。

それが、この子ですか。

「お兄ちゃんが最後に言ったのはね、『香……悪い、お前の花嫁姿……見れそうにねえわ……』だったのよ!?　最後の最後で、なんで私たちの誰も見てくれないのよ！　可笑しいじゃない！」

「可笑しく……ありませんよ、自業……自得じゃ、ない……ですか。自分を磨こう

とせず、こんな、強引な手段に……頼るような、貴女達が、受け入れられる……あぐ!?」

私の言葉は直後の包丁の一撃で黙らされました。

「死ね！　死んで私とお兄ちゃんに詫びなさいよ！　死んで！　死んで！　死んでえええええええええ！」

「やめろ！」

「大丈夫ですか!?」

「早く、救急車を！」

「しっかり！　誰かお医者様はいらっしゃいませんか!?」

メンヘラ女は私に包丁を何度も降り下ろしますが、すぐに周囲の人に抑え込まれました。

「(……ああ、意識が……もう……どうにも、なりま……せん、ね)」

兄さん……ご免なさい……兄さんの墓前でも、私の花嫁姿を見せれそうに、ありません。お父さん、お母さん……兄妹揃って先に逝く親不孝を、許してください……でも、もしも、奇跡があるのなら……兄さんに、もう、一度……

会い、たかった、な……

『……その願い、叶えるよ。『投擲具』の勇者様』

……

「……は!?」

私は頬に水滴を感じて慌てて起き上がります。

……あれ？

「私、確かに死んだ筈なのに……なんで、生きて……」

何故か服は私が通っていた高校の制服になっていますが、これは一体……ん？

「これは……ナイフ？」

私の側には塚頭に綺麗な宝石が付けられたナイフが鞘に入った状態で置いてありました。

「……まあ、なんにせよ自衛の手段があるのはラッキーですね。護身術は嗜んでいるとはいえ、此所が何処かわかりませんから」

私はナイフをスカートのウエストの部分に挟むと、洞窟から出るために歩き出し

て……

「!?『ユータ』！いたわよ！」

「『リネル』、ありがとう！これで俺は……」

すぐに一組の男女と出会いました。なんと言うか……拍子抜けですね。

まあ、あの人達のお陰で此所が何処だか……

「俺は……『勇者』になれる！悪いけどその武器とその子はもらい受けるぞ、『悪魔の申し子』！」

そう言って男の人は剣を手に私に斬りかかって来ました。

「うぇぇぇぇ!?……あ、でも中途半端ですね」

私は多少は慌てたものの、素人臭い動きだったので横に動いて避けそのまま足払いを食らわせました。

「ぶげ!?く、くそ！卑怯だぞ！」

「いや、足払いをしただけなんですけど……」

「『ファスト・ファイアボール』！」

それで卑怯って……って、あぶな!?なんですか、あれ!?魔法!?魔法なんです

か!?

「リネル！ 連携していくぞ！」

「わかったわ、ユータ！」

そう言って二人は一斉に私に襲い掛かってきます。

「ちょっと、うひゃ!? 待って、うわ!? ください！ なにが、ひゃわ!? なにがどうなって……」

「お前の言うことを聞く覚えはないぞ、悪魔の申し子！ お前が操っているその子が持っている武器は勇者が持つ武具だって言うのは『女神様』からのお告げで知っているんだ！ 俺が勇者の武具もその子も救い出す！」

「いや、訳がわかりませんよ!?」

このナイフがそんなとんでもない物だとは思えないし、なにより『お告げ』で『操られている』って……

「!? ここ！」

私は二人の攻撃の隙間をスライディングで突破すると、そのまま突っ走り始めました。

「しまった!? 追いかけるぞ！」
「ええ！」
二人の声が背後から聞こえ、私はその言葉に足を早めます。
「は、速い!? 一体、何をしたらそんなに……!?」
そりゃまあ、私が口を出して兄さんと付き合えなくて逆恨みした地雷女達から殺意を込めて狙われたので……走って逃げる際に効率のいい腕の振り方や足の動かし方が自然と身に付いてしまったんですよね……
「逃がさないわよ！『力の根源たる私が命ずる！理を読み解き、彼の者を炎の弾丸で撃て』！ファスト・ファイアボール！」
「あぐ……!?」
私はいきなりの（多分）魔法が至近距離で命中した際の爆風で洞窟の外まで吹っ飛ばされました。
「ぐっ!? はぁ、はぁ……」
私はあちこちからくる痛みにふらつきながらも立ち上がり、逃げ続けます。
「え、う、嘘……!? 行き止まり……!?」

私が見たもの……そこは、進行方向が崖という絶望でした。
「もう逃げられないぞ、悪魔の申し子！　早くその子と、武器を解放しろ！」
私が後ろを振り向くと、そこには剣を構え複数の女の子と共に立つユータと言われた人がいました。
「っ……！」
後ろは崖、前方は凶器を構えた人間……絶望的ですね。でも、でも……！
「……理不尽に殺されて、理不尽に追いかけられて、訳の、わからないまま……、殺されて……たまるかぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
『カースシリーズ・憤怒の投槍が解放されました』
『グロウアップ！　憤怒の投槍はラース・ジャベリンに変化しました』
『カースシリーズ・憎悪の短剣が解放されました』
『グロウアップ！　憎悪の短剣はヘイト・ナイフに変化しました』
『ヘイトラース・ジャベリンが解放されました』
『ラースヘイト・ナイフが解放されました』
私はいきなり現れたインフォメーションを見ても驚かずに、禍々しく変化した短

剣を引き抜くと、頭の中に現れた詠唱を唱え始めます。

「正体を現したな！　悪魔の……」

「……『その憎悪と憤怒により変化せし雄々しくも禍々しき炎よ！　我が身、我が心を炉心、彼の者達の罪を燃料とし……一切合切を打ち払い、焼き払え！』『サタン・ジャッジメント』！」

波の尖兵（ユータ）の戯れ言を無視しながら詠唱した私は……？　今、見知らぬ単語を思い浮かべたような……？

「な、なんだそれは!?」

その叫びに私が後ろを振り向くと、そこには漆黒の縄の様なものが私の背中から背後の空間に繋がっており、そこから漆黒の焔を纏った巨大な龍が現れました。

「な、なんですか……これ、は……!?　う、うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

痛い痛い痛い痛い痛い痛い！　体が……体が、内側から……焼かれて、いくような……うあ、あ……痛い、痛い！　助けて……助けてください、兄さん！

「あ、ぐ……うぁ……あ……」

『ゴアァァァァァァ！』

私が痛みにのたうち回っていると龍がそれにつられるように吠え、ユータ達に向かってその腕を振るいます。

「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

その腕の軌跡から巨大なギロチンと虎ばさみが出現し一瞬で二人の女性の命を断ち切りました。

「な……!?」

「え……？　うぎ、うが……あ、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

私が呆けていると、また痛みが訪れ龍は再び今度はユータ達に向かって突撃をします。

「やめ、助け……いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

「あ、いや、死にたく……あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

今度は巨大な蝿の群れと漆黒の熊が現れ、リネルという人ともう一人の女性を食い殺しました。

「り、リネルぅぅぅぅぅぅぅぅぅ!?」

「あが、ううううう……うぎあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
そして龍はユータに向けて巨大なブレスを放ち……
「うあ、うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……」
一瞬で彼を消し炭に変えてしまいました。
「あ、あがう……あ……」
私は人を殺してしまったという罪悪感と強烈な痛みで完全に気を失いました。
……
それから数分後……
「おーおー……向こう側が完全に見えやがるぜ……」
そう言って黒いローブを見に纏った人間が倒れ伏した香の側に立った。
「にしても……どうなってやがるんだ？『この世界線』は？　四聖勇者に姉や妹がいて、全員が『七星勇者』になってやがるし、『ヴィッチ』はまともな淑女になっているわ、『子犬娘』が奴隷商の所にいるわ、『無知の勇者』がまともだわ……ま、今はカースシリーズに目覚めちまったこいつの治療……を……」
黒ローブは屈んで香に手を翳すと凍りついた。

「カースシリーズ『憎悪』!? なんだこりゃ……こんなの『正史』にねえぞ!? ま、まあ完全な封印はできねえが……『三勇教』との決戦で制御できる範囲で目覚めるようにはするか……」

そう言って黒ローブが立ち上がり一枚の紙を取り出すと途端に顔をしかめる。

「『元康』の妹は『谷子』と『臆病竜帝』の所に放り出すとして……『錬』の姉は『小手』の勇者として『白虎兄妹』と共に行動中、『樹』の姉は『狸娘と鼬娘』と共に『斧』に慣れるために『神鳥』のもとで修行中、『盾』の妹は『爪』の勇者になったけど種族の関係で『シルトヴェルト』から逃走中……っと、手助けの必要があるのは盾の妹の方か……」

黒ローブはそう言うと香をお姫様抱っこで抱き上げながらこう言った。

「……兄貴との再会は結構近いぜ、それまで修行を頑張れよ……勇者様？」

そう言った後、黒ローブはその場から消えた……

その数時間後、血塗れで倒れている香を一人の犬耳少女が見つけ慌てて親の竜帝のもとに運び込むのだが……それは別の話である。

いかがでしたか？
次回『剣の姉のプロローグ』
……お楽しみに

剣の姉のプロローグ

錬の姉のプロローグです

弟が、死んだ。連続通り魔から私達の幼馴染みを助けようとして、刺されて死んだようだ。

「……『錬』」

私『天木凛』は弟である『天木錬』の名を呟きながら歩く。

……錬は少々斜に構えた部分とどうしようもなく自分に甘える部分があったものの、責任感と正義感を兼揃えた良い弟だった。

……まあ、同時に自己防衛本能がでかすぎて少々コミュ障気味でもあるんだが。

だけど、少々欠点があっても私にとっては守るべき弟であり、家族であった。その家族が凶悪な通り魔から幼馴染みであるあいつを守ろうとしたのは誇るべき事である。

だけど、それでも……

「生きて、ほしかった。あいつを見捨ててでも、生きていて、ほしかった……」

不謹慎な事だろう。通り魔に襲われたあいつやあいつの家族にとってはたまったものではないだろうが、それでも、家族に生きていてほしいというのはわがままだろうか？

「いや、わがままだろうな」

私は人として最低な事を思い浮かべた自分に自嘲しながら歩き……

「きゃー!? 坊や！」

突如として聞こえた悲鳴に振り替えると、そこにはボールを追いかけたのかボールを持った幼い男の子が道路に飛び出していた。

「!? 車が……！」

しかも運転手がスマホを見ながら運転している車が速度を無視して接近していた。

「……っ、ええい！ ままよ！」

私は迷いはしたものの、幼い子供の命が失われるのを見ている訳にはいかない！

私は少年のもとまで走ると、彼を抱えて避難をしようとして……

「あが!?」

何故か足元にあった空き缶を踏んでひっくり返るはめになった。

「な、なんで空き缶が……!?」

私が咄嗟に周囲を見回すと、そこには焦った表情の自転車に乗った男が『何かを投げ捨てた様な格好』でいた。

「空き缶のポイ捨てを……するなぁ！」

「あ、危ない！」

「っ!? 間に合わないか……ならば！」

声に気付くと私は男の子を道路の近くにいた人に投げ飛ばし、せめてもの抵抗とばかりにポイ捨てされた空き缶を逃げ出そうとしたポイ捨て男に向けて全力で投げた。

響く空き缶がぶつかった音、轟くブレーキ音、巻き起こる悲鳴、そして私に伝わる衝撃と浮遊感……直後に道路に叩き付けられ、強烈な痛みに脳が悲鳴をあげ

る。

「大変だ！　女子高生が一人跳ねられたぞ！」

「誰か警察を！」

「それより先に救急車！　救急車を！」

「誰か、ＡＥＤを持ってきてください！」

「あ、車も自転車も逃げるぞ！」

「車は写真を撮れ！　自転車は逃がすな！」

私はかろうじて意思に応じる頭部を動かすと、慌てて逃げ出そうとしたポイ捨て男が周りから取り押さえられる光景が目に写った。

「……お姉ちゃん、だいじょうぶ？」

「ありがとうございます！　息子を助けてくれてありがとうございます！」

声の聴こえた方向に頭を向けると涙を流す女性と女性に抱き抱えられた何がなんだかわからなそうな男の子がそこにいた。

「……ああ、大、丈夫……だ。私は、少々頑丈だからな……こんな傷なんて、へっちゃら、だ」

私は男の子に大丈夫だと示すために微笑みかける。
「じゃあ、早く治ります様にっておまじないしてあげる」
そう言って男の子は「痛いの痛いの飛んでいけ～」と私の頭を撫でた。
「あり、がとう。お姉ちゃん、ちょっと眠くて目を閉じるから、な。離れていて、くれ、ないか……？」
「うん。おやすみなさい、お姉ちゃん」
そう言って男の子は私から離れていく。
「(……ああ、意識がぼやけて、きた)」
「目を閉じないでください！　お願いです、お礼をしたいんです！　生きてください！」
「ＡＥＤ、持ってきました！」
「応急措置、急いで！」
「救急車まだかよ！」
私は必死に目を開けようとしたが、だんだんと瞼が下がっていく。
「(もう、ダメ……だな。意識が、朦朧と、してるし……それに、体

も応えて、くれない……しな。……死ぬのか、私は）」

錬……今、そっちに行く。父さん、母さん……姉弟揃って、先立つ不孝を……許してください。

……ああ、でも

「（もしも、私の、わが……まま、が……叶うの、なら、ば……もう一度、錬に……会いたかった。それに……恋も、して……見たかった……な）」

私の意識は、ゆっくりと闇の中に、堕ちて……

『やーれやれ、死んでもらっちゃ困るんだよ！　『小手』の勇者様！』

……

「……もし、そこのお嬢さん」

「……うわあ!?」

私は声に気づき、目を開けると……目の前に眼鏡をかけたサーカス団長の様な怪しい男がいたので、つい悲鳴をあげて距離をとってしまった。

「……あ、す、すいません！　起こして……くれ、たの……に？　ど、何処だ此

処は!?」

　私が外を見ると、そこには中世をそのまま削り取ったような町並みが広がっていた。

「此処ですかな？　此処は傭兵の国『ゼルトブル』ですが……」

「……ゼルトブル？　なんだそれは？　私は日本にいた筈だぞ!?　そんな国は知らない……？　待てよ、確か錬と一緒にやったゲームの中でそんな国、が……？」

　そうだ、思い出した。『ブレイブスターオンライン』だ！　まあ、私は基本的に『シャンフロ』や『ＡＬＯ』がメインだったから嗜む程度だったが……

「って、意味ないじゃないか……」

　普通ならゲームの世界に来たと思うが、妙にリアリティーがありすぎる。いやまあ、シャンフロやＡＬＯっていう例外は存在するが……

「……どうかしましたかな？」

「……ああ、すいません。これからどうしようかと考えておりまして」

「それならばゼルトブルはうってつけですな。『コロシアム』がありますから無一

文でも、腕があれば一攫千金が狙えますぞ？」

「なるほど。だが、装備が……って、なんで『小手』だけあるんだ？」

私が男性から軍資金の獲得方法を聞いてすぐに装備がないことを言おうとしたが……私がふと腕を見るとそこには甲の部分に綺麗な宝石を嵌めた一対の小手が装備されていた。

「ふむ……では、『奴隷』を雇うのはどうですかな？　奴隷はコロシアムでは装備扱いですので」

「……奴隷、ですか」

人権を尊重する国から来たから胸糞の悪い話なのだが……背に腹は変えられんか……

「わかり、ました。あ、ですが代金はどうすれば……」

「ああ、それならばコロシアムの賞金でお支払いいただければ結構です」

「わかりました。しかし、さっき知り合った見ず知らずの私に何故そこまで……？」

「ふふふ、あなた様はこれから上客になるような予感がしましたので」

「……その予感が当たることを祈ります」
「では此方です」
そう言って奴隷商人にテントの奥に案内されると、そこには多数の檻とそこに跼ったり、私に向けてギラギラとした殺気を醸し出す人間……達？
「あの、あの白い髪の兄妹は耳の位置が違う様な……？」
「ああ、あれは『亜人種』の『ハクコ種』の獣人で昨日仕入れた活きの良い奴隷で兄の方の値段は金貨二十枚でございます」
「（金貨一枚辺りの値段がわからんが高そうだな）……妹の方は？」
「妹の方は銀貨三枚でございます」
「安いな!?」
兄と妹で値段が違いすぎやしないか!?
「っ……！『アトラ』は病気なんだ！だからそいつはアトラが死ぬのを待って俺を売るつもりなんだよ！だから……！」
……この人がそこまで性悪だとは思えんが、確かに彼女には火傷の様な傷が全身中にあるな。

……さてと、私が取るべき手段はただ一つだな。
「……なあ、君は二人とも出すと言ったらどうする？」
「「……は!?」」
私の言葉に奴隷商も兄も同時に驚く。
「何も驚くことはないだろう。君は妹……アトラを助けたい、奴隷商の貴方の方は奴隷を私に売りたい……ならばこれでＷＩＮＷＩＮだろう？」
「それはそうですが……」
「お前、バカだろ……」
二人揃って呆れたような表情でそう言う。
「錬……弟にも良く言われる。……で、どうする？」
「……本当にアトラも出してくれるんだろうな？」
「ああ、二言はない。……貴方の方は？」
「……やれやれ、とんでもない客の様ですな貴女は」
「すまないな、こんな客で。……絶対に損はさせんさ」
私は『やれやれ』と言った表情の奴隷商に苦笑いをしながら答える。

……

それから数日後

「いやはや……『損はさせない』と言われましたが……此処までとは」

奴隷商が苦笑いをしながらそう呟く。

そこには……

『け、決着ぅぅぅぅぅぅぅ!? 数日前に彗星の如く現れたルーキー『リン・アマキ』選手、奴隷として登録された『フォウル』選手と共にこのコロシアムのチャンピオンまでも瞬殺ぅぅぅぅぅぅぅぅ！ この二人の強さは本物だぁぁぁぁぁ！』

奴隷として（予約）購入したハクコ族の青年『フォウル』と共にコロシアムのチャンピオンをも瞬殺する凛の姿があった。

「ちっくしょー！ 初めて来た日はあの二人のお陰でおけらだぜ！」

「でも、今はあの二人のお陰で大儲けしてるだろうが！ 俺なんてチャンピオンに今月の給料全額を賭けてたんだぞ！」

「そりゃ自業自得だろうが！」

そう言って奴隷商の側にいた男達が苦笑いをしながら話し合っていた。
「やれやれ……この勢いだと本当に二人分の代金を稼いでしまいそうですな……」
奴隷商は手を掲げた凛にぶっきらぼうな表情でハイタッチをするフォウルを見ながらそう呟いた……
彼女……眷属器『小手』の勇者である『天木凛』が弟の『天木錬』と再開するのは一ヶ月後……彼が聖武器『剣』の勇者に選ばれて『メルロマルク』に召喚され、彼女が『フォーブレイ』のとある王子から調査を依頼された時である。

いかがでしたか？
次回『弓の姉のプロローグ』
お楽しみに

弓の姉のプロローグ

樹の姉のプロローグです

「姉さん！」

「え……？　いつ、き……？」

私、『川澄理奈』は弟の『川澄樹』に押され、道路から歩道に押し戻された。

私が押されたすぐ後で激突するトラック、トラックに吹き飛ばされ動かなくなる樹。

巻き起こる悲鳴、樹から流れる血で赤く染まる道路。

私はふらふらと動かない樹に近づく……

「樹……？　ねえ、樹……嘘、よね……？　ねえ、起きてよ、ねえ……い、や……いや……いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

目の前で血塗れになって倒れる樹に私はすがりつく。

そして、その向こうではにやにやと笑う……

……

「……は!?」

私はそこで目を覚まし、がばりと起き上がる。

「……此処、何処？」

そこは冷たい牢屋が並ぶ石畳の廊下だった。

「えっと……確か、樹の葬式をして……それから、それから……あれ？どうして思い出せないの……？」

確か、何かを確かめるために学校に行ったはずだけど……それからどうしたんだっけ……？

「……あれ？これは……『斧』？」

何故か私の手の中には綺麗な宝石が刃の真ん中についた斧があった。

「まずは此処から出ること……かな？」

私は立ち上がるとそのまま歩き出した……

『あんなの覚えさせるわけないだろう。あんな憎悪にまみれた『大量虐殺』の記憶

なんて……』

……

「ひ、ひどい……」

この牢屋には多数の人間の骨と思われるものや既に腐乱している死体に拷問でもされたのかボロボロの死体が至るところに散乱してる。

これが牢屋なんだとしたらかなり悪趣味なやつか、最低なやつが看守って事ね…

……！

「一体、どういう所なの……？」

私は斧を持って警戒をしながら進む。

そうしていると……

「だ……れ……？」

声が聴こえたので慌てて近くの牢屋を見るとそこには顔色の悪い鼬の耳を着けた女の子とその子を介抱する狸の耳を着けた女の子がそこに居た。

「良かった……二人とも息があるんだよね!? 今、だしてあげるから！」

「……っ、だ、だめ！ そんな事をしたらお姉さんまで捕まっちゃう！」

私が牢屋を壊すために斧を振り上げると、狸の耳の女の子が慌てた様子でそれを止めた。

「でも、急いでその子を治療しないと死んじゃうのよ!? だから……」

「わかってる、わかってるよ……このままじゃ、『リファナ』ちゃんが死んじゃうってことは……でも、そのせいでお姉さんが死んじゃう事になったら、私もリファナちゃんもきっと……」

狸の耳の女の子がポツポツと話すのを聞いて、私はもう一回斧を思いっきり振り上げる。

「!? ど、どうして……」

「……決まってる。私の事を心配してるのは、わかる。それについてはありがとうって言うよ。でも……そうやって私が死ぬ前提で話すのは、ネガティブな考えで決めつけるのは、やめて」

私はそう言いながら、確りと斧を降り下ろすために狙いを定める。

「ねえ、貴方の名前を教えて」

「え……？ ら、『ラフタリア』……」

ラフタリア……ね。うん、可愛い名前。
「ラフタリアちゃん、その子……リファナちゃんだっけ？　貴方も、その子も……私が絶対に助ける！　どっちがなんて選択はしない。絶対にどっちも助けてみせる！　だから……私を、信じて！　」
そのまま気合と共に斧を降り下ろして牢屋を破壊する。
「お姉……さん」
「理奈」
「え……？」
「私の名前。川澄理奈、それが私の名前よ」
「リナ……さん」
「さ、一緒に逃げよ？　リファナちゃんも一緒にね？」
「……はい！」
私はリファナちゃんを背中に背負い、ラフタリアちゃんと手を繋いで歩き始める。
「し、侵入……「邪魔ぁ！」びゃあ!?」
牢屋を破壊した音に気付いたのか、中世の兵士みたいな格好をした人が慌てて声

をあげようとしたけど私はそれをものともせずにぶっ飛ばす。
「あいた!?」
兵士の持っていたハルバードを踏んだら『バチッ！』と音が鳴って『スティールハルバードをウェポンコピーしました。すぐに切り替えますか？』というウィンドウがでたから『はい』の部分に視線を向けると、私の手の中には兵士の持っていたハルバードがそこにあった。
「そ、それって……七星勇者の……？」
「え、これってそんなに凄いものなんだ!?」
私は手の中の斧に驚きながら進むと……
「いたぞ、侵入者だ！」
「お、意外と可愛いじゃねえか！」
「殺す前に楽しんでやろうじゃねえか……へへへ」
下卑た表情の兵士が三人ほど出てきた。わかりやすすぎるほどの下衆野郎どもね……！
「ん？『スキル』……？」

私は接近してくる三人を見ながら頭の中に浮かんだスキルを使用する。
「『槍斧一閃（そうふいっせん）』！」
「「あごば!?」」
私はハルバードを横凪ぎに放つと、兵士達は軌跡の先にあった壁に叩きつけられてノックアウトされた。
「へぇ……中々使えるじゃない……このままどんどん進むわよ！」
私は群がる兵士達を右に左に時には背後にぶっ飛ばしながら出口を探して突き進んでいった……

……

「な、何事だ！　この騒ぎは！」
理奈がリファナとラフタリアを連れて地下牢の出口を捜してから十数分後、地下牢の上の屋敷の中では屋敷の主人が突如として起きた爆音に慌てふためいた様子で悲鳴をあげた。
「イドル様、侵入者です！　地下牢で捕らえていた亜人達を脱出させようとしているもようです！」

「なんだと!?　わざわざ薄汚い亜人どもを助けようとするとは……すぐに引っ捕らえろ！」

「そ、それが鬼神のごとき強さでして……しかも『斧』の眷属器を持っておりまして……」

「なんと、斧の七星勇者だとでも言うのか……ええい！　私も出る！　誘き寄せろ！」

「はは！」

イドルと呼ばれた男はそう兵士に命令をすると、愛用の鞭を取りだし走り始めた。

彼らは知らない。その様子を見ているアホ毛の生えた鳥の様な生物が窓に居たことを……

……

「邪魔！『大斧旋風』！」

「「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」」

私が周囲にいた兵士を斧のスキルで凪ぎ払うと、私達は足早に走り始める。

「ちっくしょ……数が多いったらありゃしない……」
「り、リナさ……ん。だ、大丈夫ですか……？」
「あんがと。こんぐらい楽勝よ、楽勝。それからまた様付けしようとしたでしょ？」
「ご、ごめんなさい……」
「良いの。でも、様付けなんてされたらちょっとこそば痒いからやめて？」
「ど、努力します……」
「あはは……さ、もうひと踏ん張りしますか」
地下牢から脱出して一時間くらいたったけど……全然屋敷の出口に近づけないのよね～……
おまけに……
「なーんか誘き寄せられてるような気がするのよねぇ……」
「ど、どうすれば良いんでしょうか……」
「ま、分厚い包囲網を突破しようとしてラフタリア達を人質に取られたら不味いから……罠でも包囲の薄いところにいくしかないのよねぇ……ま、虎穴に入

りますか！」
私は立ち上がると、再び兵士を相手に激闘を開始する。
「踏ん張れ、みんな！　もう少しだぞ！」
「本当に邪魔！」
「あべげ!?」
私が立ち塞がっていた重騎士を斧でぶっ飛ばすと、そこには中庭と……!?
なんか来る!?
「きゃあ!?」
私が一本の鞭で腕を打たれて怯んでいるうちにもう一本の鞭で斧が取り上げられてしまった。
「しま……！」
「ぐふふふ……どうかね？　薄汚い亜人を助けようとした斧の偽勇者よ。これでも我が兵士を相手に戦えるかね？」
私が武器を無くして呻いていると、斧を巻き付けた鞭を引きずるように太った体にハゲをカツラで隠したおっさんが出てきた。

「……ヅラ、ずれてるわよ」
「は!? そ、そんな筈は……あ」
私は周囲の兵士がおっさんがヅラを慌てて確認して呆然としている隙に斧を取り返そうと走り出して……
「きゃあ!?」
「!? ら、ラフタリアちゃん！ リファナちゃん！」
悲鳴に後ろを振り向くと、そこには此処に来る前に隠れさせたラフタリアちゃん達が兵士に拘束されていた。
「ふ、ふん！ 流石は偽勇者だ。虚言で隙を作らせようとするとはな……」
「いや、自分でヅラだって証明してるじゃない」
「やかましい！ おほん！ 貴様には二つの道がある。亜人どもを見捨て大人しく立ち去るか。それとも亜人どもを見捨てずにこのまま無惨に死ぬかのどっちかだ」
「後者」
「……は？」
「後者に決まってんでしょ、ハゲ。ラフタリアちゃん達を見捨ててのうのうと生き

るくらいなら、諦めずに抵抗してあんたをぶち殺す精神で行くわよ」
「こ、この小娘が……！　もういい！　望み通り……」
私が覚悟を決めてハゲに飛びかかろうとすると……
ドッガァァァァァァァァァァァァァァン！
轟音と共に塀の壁が消し飛んだ。
「な、なんだぁ!?」
「な、なんなのよ、一体……って、何あれ!?」
私が塀の方を見ると、そこには超巨大な可愛い鳥のような生き物がそこにいた。
「な、なんだあれは……衛兵！　早くあれを……」
「『ドライファ・トルネードキャノン』」
鳥のような生き物が声を発すると同時に放たれた竜巻の砲弾が一瞬で屋敷の屋根を粉砕した。
「「「「……に、逃げろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!?」」」」
「き、貴様ら！　ワシに先んじて逃げるな！　ワシを先に逃がさんかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

！」

そう言ってハゲとその配下の兵達はあっと言う間にいなくなってしまった。

「……なにこれ？」

「斧の勇者。助けに来た」

私が呆然としていると、巨大鳥が私に話しかけてきた。

「えっと……助けてくれて、ありがとう。私の名前は川澄理奈。貴方の名前はなんなの？」

「『フィトリア』。私はそう呼ばれている。因みに斧の勇者を助けに来たのは私の眷属が知らせてくれたから」

「グアグア！」

「そっか……あんがと」

私はそう言っていきなり現れた鳥の頭を撫でてあげる。

「それじゃあ、私はこれで……」

「待って！　この子が治るまで治療できる場所ない!?　それから、私修行をしたい！　ラフタリアちゃん達を軽く守れるくらいの力が欲しい！」

私は慌ててさっさと立ち去りそうなフィトリアに慌てて交渉をする。
すると、フィトリアが何やら考えた後に光と共に姿を変え……て？
「……え？　えぇぇエぇ絵ぇエぇぇエ江ぇエぇ得ェえエぇ絵エ江ぇエぇ
え――――っっっっ！？！？！？！？」
「……じゃあ、私達の聖域で修行をすると良い。ただし、私の修行は厳しいから死なないように。『ポータルキャリッジ』」
いきなり小さい女の子に変わったフィトリアに馬車に押し込まれて、私達はこの場所を離れていった……
彼女『川澄理奈』が弟の『川澄樹』と再開するのは、それから一ヶ月後の話である……

如何でしたか？
次回『盾の妹のプロローグ』

お楽しみに

盾の妹のプロローグ

尚文の妹のプロローグです

「ああ、痛い……痛いなぁ……」

あたし『岩谷文香（いわたにふみか）』は襲い来る連中から奪った服を繕って作ったマントとフードを被り、ボロボロの体を引きずりながら歩いていた。

「なんで、こうなったのかなぁ……？」

あたしはこうなる切っ掛けになった出来事を思い出しながら呟いた……

……

「尚兄……遅いなぁ……」

あの日、あたしは長兄である尚兄こと『岩谷尚文（いわたになおふみ）』と一緒に図書館に来たんだが……待ち合わせの時間になっても来ないってどういうことだよ……

「たく……あのオタクは本当に世話が焼けるんだから……」

あたしはブツクサ言いながら尚兄を探し始める。
尚兄はオタクである。それも頭の先までオタク文化に染まった生粋の。
そのせいで親父達からは半ば見放される形で甘やかしという名の放任を受けていた。
まあ、そのお陰で料理はそんじゃそこらの『自称』料理人なんて歯が立たないレベルのものを作れるんだけどな……正直、あたしが不良に堕ちても周りに『正義の不良』なんて言われんのも尚兄に『説得（餌付け＆オタク文化の布教）』されたからだし。
「そーいや、矢鱈と尚兄に絡んでいじめようとした連中がいたな」
全員揃ってあたしがぶちのめしたけど……あいつら全員が『岩谷尚文（原作主人公）』だの『ご都合主義（主人公補整）やマッチポンプ女王が無ければ生きれない奴になんでこんな馬鹿強い妹がいるんだよ!?』なんだの訳のわからない事をぬかしてたな……
「尚兄～～何処だよ～～」
あたしが尚兄が座っていた辺りに来ると、尚兄の名前を呼びながら歩く。
「ん？　なんだこりゃ……？」

ふと、机を見るとそこには読みかけの本が置いてあった。
「タイトルは……『四聖勇者と四星の祈り』？」
作者は、竪藍阿寅……どっちも聞いたことねえな。
「……ま、トイレかもしんないからこれでも読んで待っとくか」
あたしは椅子に座ると、最初から本を捲り始める。
章ごとのタイトルは……『槍と斧の章～本当の愛～』、『弓と籠手の章～真の正義～』、『盾と投擲具～信頼と絆～』、『剣と爪の章～孤独の果て～』、ねぇ。
「さーて、地雷臭さが漂うわけだが……気になる本編は……あん？」
なん、だ……？　急に……眠、く……ぐぅ。
……

「は!?」
あたしは地面特有の冷たさに気付くと、慌ててがばりと起き上がる。
そこには……
「なんで……？　あたし、さっきまで図書館にいたよな!?」

なんで……見渡す限り草しか生えていない草原にいるんだよぉぉぉ

『コンプレッションボックス』！」

「しま……ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

「え……？　あ、ああ……あ……？」

あたしの見ている前でおっさんが何処からともなく出現した巨大な箱に閉じ込められたかと思うと、そのまま縮んだ箱に圧縮されるように潰された。

箱の隙間から流れるのは血、血だよ、な……あれ？

「ん……？　ち、人が見てたのか……まぁ、良いか！　顔は可愛いから俺のハーレムにしちまえば……」

「う、うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

あたしは人を殺しておきながら訳のわからない事を言っている男から慌てて逃げ出す。

「あ、こら！　待ちやが……な、なんであのモブが持ってた武器があの女に!?……ハーレムにしちまえば俺が手に入れたのと同じか！　とにかく待ちやがれ！」

『逃げろ、勇者様！　俺とあんたの……って、基本的に人が冷遇されるこの国

じゃダメじゃねえか俺の馬鹿ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?』

「はぁ……はぁ……な、なんなんだよ……あいつ、此処は……何処なんだよぉ!?」

あたしが倒けつ転びつあいつから逃げ回っていると……

矢があたしの足に突き刺さった。

「……え？　う……あ、うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?　痛い……痛いいいいいいいいいいい!?」

あたしが矢を引き抜こうと必死になっていると、更に大量の矢が降ってきてあたしの腕や足に刺さりまくる。

「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

「ルハバートの痛み、思い知ったか！　簒奪者め！」

あたしがのたうち周りながら矢が飛んできた方向を見ると、そこには弓やボウガンを構えた兵士を引き連れたライオン顔のおっさんが吠えていた。

「ち、違う……あたしじゃ、ない……！　あのおっさんを殺したのはあたしじゃないんだ！」

「黙れ！　貴様が腕に着けているその武器が何よりの証拠！　大人しく我らに殺されろ！」

あたしが呻きながら腕を見ると、確かに殺されたおっさんが着けていた爪があたしの腕に着いていた。

「な、なんで……!?」

「全隊……構え！　射てぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

『あ、危ねぇ!?　ランダム転移！』

矢があたしに降り注ぐその瞬間……あたしの意識は闇に堕ちた……

……

「生きてたのが、不思議なくらいだよなぁ……」

それからのあたしの毎日は地獄だった。

冤罪を被ったあたしは、兵士に賞金目当ての獣人、あたしを引っ立てて奴隷の立場から引き上げてもらおうとする人間、果ては魔物……様々なやつがあたしを殺そうと押し寄せてきた。

あたしは必死に戦い、時には生きるために相手や怪物（人間　魔物）を殺しながら、必死に逃げ

回った。
　でも、限界だった。
「正直……眠い。身体も、痛い……死にたい」
　寝ようとすれば何時襲われるかわからない恐怖の中でまるで眠れず、眠っても殺した人間があたしの首を絞めて殺そうとする悪夢で悲鳴をあげながら飛び起きるという事を繰り返してきたし、何よりも身体中の傷が痛んでろくに動けなくなっていた。
「尚兄……親父、お袋……みんな……ごめん、せめて……一目でも……見たかった……なぁ……」
　あたしはみんなの顔が走馬灯の様に映る事に嘆きながら、歩こうとして……
「ようやく見つけたぜ！」
　聞き覚えのある声に首をゆっくりと回すと、そこには複数の女を引き連れた手にデカイハンマーを持ったあの男が立っていた。
「もう大丈夫だ！　この『タクヤ・アルサホルン・フォブレイ』様が来たからには……「……前が、」？　何だって？」

お前が、あたしをこんな目にあわせる切っ掛けになった、お前が……！

「正義の味方面をして……出てくんじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

『グロウアップ！　憤怒の爪Ⅱはラース・ネイルXに変化しました』

「シネェェェェェェェェ！『ヴァーンズィンクロー』ォォォォォォォォォォ！」

「タクヤ、危な……ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

「る、ルイーザぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?　て、てめえ！　いくら可愛いからって許さねえ……」

『ドラゴンクローを解放しました』

『龍魂の爪を解放しました』

『龍髭の連接爪を解放しました』

『龍帝の翼爪を解放しました』

「……ツヨソウナブキダナ、ソザイヲツレテキテ……ア・リ・ガ・ト・ヨ！」

「て、てんめぇえええええええええ！『ネイルノックハンマー』！」

ゴミガワメキナガラオソッテクルケド、アタシはソレヲヨケテモウイチド……

「はい、そこまで」

「グペ!?」

あたしの意識はそこでいきなり途絶えた。

『……ふん、あのゴミクズ（カス野郎）よりはマシか。強くなれよ、爪の勇者？』

……

「て、てめぇ……なにもんだ！」

「あーあ……ここまで『憤怒』のカースを溜め込みやがって……どうしてくれんだよ、シルトヴェルト」

俺『タクヤ・アルサホルン・フォブレイ』は『タクト（くそ野郎）』のハーレムメンバーの『レールディア（腐れドラゴン）』に勝るとも劣らない俺のハーレムメンバーである龍の『ルイーザ』を殺した上にその亡骸を爪に吸わせて嘲笑った女を抱き抱えてやれやれと呟く黒フードに吠えた。

「たく、取り敢えず『メルロマルク』に匿わせるとして……そこからどうする

「聴いてんのか！　おい！」……うるせえよ、タクトの代役ごときが」

な……あの野郎の、代役……だと!?『槌』の勇者にして将来全ての勇者の武器を揃えて最強の勇者になる俺を、代役だと!?

「ふざけんじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇ！　コンプレッション……」

「……自分の運命を知らねえとは憐れだな」

俺がスキルを射とうとすると、黒フードは哀れむような目で消えていった。

「……くそがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

黒フードも女もぜってぇに許さねえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！

……

次の日、黒フードが放り込んだメルロマルク城のフィロリアルの厩舎でボロボロの状態の怯えきった文香が第２王女を人質に取って一騒動を巻き起こすことになり、黒フードが頭を抱えるはめになるのだが……それは関係ないので置いておく。

ここに、役者は揃った。この四人の少女達が兄や弟、そして共に旅する者達に運ぶ運命は……まだ、わからない。

遅れてすいません……
次回『四星結集～再会も添えて～』
お楽しみに

盾と投擲具の第１章～始まりの波～

四星結集～再会も添えて～

四人がそれぞれの家族と再会します。
遅れてすいませんでした！

一ヶ月後、メルロマルク某所
「うおらぁ！ヴァーンズィン、クローぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」
あたしが放ったあたしの必殺技とも言えるスキルを諸に受けたくそデカイ象みたいな魔物にデカイ穴が空き、そのまま地響きと共に倒れ伏す。
「……依頼、完了っと」
あたしは痛む身体を無視しながら象の一部分を連れてきた兵士に切り取らせ、残りを爪に取り込む。

『ビッグエレファントクローを解放しました』
「スキルは……弱、ゴミスキルじゃん」
『落ち着けよ、文香。どんなスキルにも……』
「おめえが言うな役立たず（転生者）」
『ぐふ!?　確かに原作知識が全く役に立たない世界だからそう言われても仕方ないんだけどさぁ……』
あたしは爪から聞こえてきた声……爪の眷属器の精霊にため息をつきながら答える。
ま、話し相手ぐらいには役に立ってるんだけどな。もう一人は気紛れで物臭だし……
『我は物臭ではない』
「うるせえよ、つーか気紛れなのは認めるのかよ……」
あたしは爪から聞こえてきた、居候とも言える存在に突っ込みを決める。
精霊の方は『転生者』の『クロー（あたし命名）』、居候は曰く『竜帝』の『ヴァレリア』という名前らしい。

クローの方はこの世界について知ってるらしく、アドバイスしようとしたのだが……最も警戒させようとした第一王女が好い人だった為に混乱したうえにあたし自身が攻略本を見ながらの戦いが嫌いであった為にそれを禁止している。

ヴァレリアの方は『龍脈法』って言う魔法と対になる力と、この世界版の『咸卦法』とも言える『リベレイション』っていう力を教わった。

……ま、どっちも修行を始めたばっかだからまだまだなんだけどな。

「そういや、今日が勇者を召喚する日だっけ……」

確かあたしの装備している爪の上位装備を使える四聖勇者ってのを召喚するんだったよな……ま、関係ないか。

「次の依頼に行くか、次の……ぐぇ!?」

あたしが次の依頼を確認してそこに向けて移動しようとすると、襟を掴まれてむせるはめになった。

「誰、だ……げ!? め、『メルティ』……」

「フミカ！　また『あのスキル』を使ったでしょ！」

「いや、あの……あれ使い勝手が良くて……」

「ダメだよ！　あれ使うとフミカの身体がボロボロになるんだから！」
「いやでも、手早く片付くんだから……」
「それでもダメ！」
「……はい」
あたしに『ぷんぷん』という単語が付きそうな言葉を言いながら怒ったのは『メルティ・メルロマルク』。
この国の第２王女で、あたしが何故かこの国にいたさいに疑心暗鬼の塊になっていたあたしが人質に取ったやつなんだけど……あたしがあの国……『シルトヴェルト』で受けた仕打ちを話したら泣いて慰めてくれたうえに、あたしのリハビリまで手伝ってくれたものだから頭があがらないんだよなぁ……
あたしは結局、メルティからの言葉込みで四聖勇者の召喚に立ち会うことになった。
……
「フォウル！　そろそろ王都に到着するから、『偽装』の奴隷紋を塗っておけ。アトラは私がやるから」

「わかった」

あれから一ヶ月。私は世話になった奴隷商にフォウルとアトラの代金である金貨20枚と銀貨３枚、それに加えて私やフォウル、アトラの食費や払って貰ったアトラの治療費等も込みの銀貨（金貨は両替などが厳しいことから銀貨での取引が一般的らしい）４０００枚を払い、コロシアムの闘士達や休日に受けた依頼であった人々に惜しまれながらゼルトブルを出てメルロマルクに向かっていた。

「アトラ、くすぐったいかもしれないが我慢してくれ」

「はい、義姉様」

「アトラ、姉として慕ってくれるのは嬉しいが……」

私は今回の依頼を受けた時に前払いで貰った貴重な霊薬に籠手のスキルを加えて漸く完治した（目は手遅れだったが……）アトラに水ですぐに落ちる塗料で簡易的な奴隷紋を書き込む。

私がアトラに『姉様』と慕われているのは熱心に看病をしてくれていたのと同性の家族が欲しかったからしい。（フォウルはアトラが歩けるようになった事に喜びすぎて『ルコル』の実を誤って食ってしまいひっくり返っていた）

……何故かその事を話したら一緒に旅をすることになった二人に微妙な顔をされた。

曰く「いや、嬢ちゃんの外堀を埋めようとしてるだけだと思うんだが……」と「このままだと何時の間にか凛がフォウル君の妻って事になりかねないわよ」らしいのだが……なんでそんな事を言ったのかはよくわからん。

「嬢ちゃん、終わったかい」

「『ラルク』さん、今終わりました」

私がアトラのお腹に奴隷紋を描き終わったのを見計らって入って来たのは『ラルク・ベルク』さん。私とフォウルがコロシアムで荒稼ぎをしていたせいで恥を掻かされたと思い込んだ一部の闘士や有り金を失った人間達が徒党を組んで誘拐され掛けたアトラを相棒である『テリス=アレキサンドライト』さんと助けてくれたうえに、護衛まで買って出てくれた人で今回の依頼を受ける際にもパーティーの仲間入りを今は馬車（引いているのは奴隷商から買った卵から産まれたフィロリアルの『ルージュ』だが）を運転しているテリスさんとともにしてくれた人だ。

「にしても……確か嬢ちゃんが引き受けた依頼は、召喚された四聖勇者の人柄

の見極めと護衛だったか？」

「ええ、依頼人の話では本来はフォーブレイで行う筈だったのですが……偽物にすり替えられてメルロマルクに運び込まれていたみたいなんです。ですが、最近矢鱈とレベルが高くて妙な事を言う連中がフォーブレイを彷徨いていたので四聖勇者の身の安全を優先した依頼人はメルロマルクに召喚をさせてレベルアップを済ませてから改めてフォーブレイに来させるみたいなんです」

「ふーん……」

私は依頼人……フォーブレイの末席の王子である『タクト・アルサホルン・フォブレイ』の事を言わないようにしながらラルクさんに依頼を説明する。

まあ、同時にしくじれない依頼でもある。なんせアトラの治療のために本当に希少でくそ高い霊薬を前払いで貰ったからなぁ……

私はメルロマルクの王城を見上げながら溜め息を吐いたのだった。

……

「ここまで送ってくれてありがとう、フィトリアちゃん。後は歩きで行くから」

「そう」

あれから一ヶ月。私はフィロリアルの聖域でラフタリアちゃんとリファナちゃんの看病をしながらフィトリアちゃんの地獄（すら生温い程苛烈な）スパルタ特訓を途中から「「リナさんの為にも強くなりたいんです！」」って言って特訓に参加した二人や色々あってなつかれたフィロリアル達と一緒に特訓を潜り抜けたんだ。

で、私の持ってる斧の眷属器よりも高位の武器の勇者が召喚されるみたいだからその人柄を見極めてほしいって頼まれて、召喚される国まで送られたの。

「でも、二人が私と同じくらいに成長したのと……『フィオ』と『リコ』の二人が人間になったのは驚いたなぁ……」

「「？」」

「あ、あはは……」

「す、すいません……」

因みにフィオとリコって言うのはなついたフィロリアルの名前でフィオは藍色の毛並みに深紅の瞳の男の子でリコは薄緑色の毛並みに水色の瞳の女の子なの。

人間になったのはフィトリア曰く勇者である私になついて育てられた事で特別なフィロリアルであるフィロリアルキングとフィロリアルクイーンになったからなん

だって。

あ、人間での姿はフィオが黒髪に深紅の瞳のクールな感じの男の子、リコが紺色の髪に水色の瞳の気配り上手な女の子なんだ。

「うん、フィトリアに聴いたお陰であなた達が急激にレベルアップをしたら成長するって知ったから大混乱しないですんだけど……先に言うのも大事よ」

「はい！」

「わかりました」

私は美人に成長したラフタリアちゃんとリファナちゃんの頭を撫でる。

因みに身長は二人とも私より頭一つ分低い。……胸はほぼペッタンコの私よりあるんだけどさ……ぐすん。

「あ、そうだ。フィトリアちゃん、ちょっと聞きたい事があるんだけど！」

「……なに？」

私はフィトリアちゃんに振り向きながら疑問に思ったことを聞く。

「あの時の事なんだけど……どうして一勇者でしかない私を助けてくれたの？普通はそんな依怙贔屓はしないと思うんだけど……」

「……昔、あなたみたいな勇者がいた。それから……頼まれたの、昔の盾の勇者に『貴女の様な人を助けてほしいって』」

「ふーん……じゃ、またね！今度は四聖の人やうまく出会えたら他の七星の人も連れてくるから！」

そう言って私達はフィオとリコが引く馬車をメルロマルクのお城に向かって走らせた。

「……頑張って、『リナ』。昔の盾の勇者……『マモル』もあなた達の事を待ってるから」

フィトリアちゃんがその向こうで小声で呟いた事も知らずに……

……

「やれやれ……やっと着きましたよ……」

あれから一ヶ月。私はあれから矢鱈とビビりな『竜帝』の『ガエリオン』と彼の義理の娘の『ウィンディア』に介抱をされながらこの世界の事や、私の武器の事を教えられ動けるようになったら一緒に訓練をして……それが終わったので風の噂で聴いた四聖を召喚する国に旅に出ることにしました。理由ですか？四聖の仲

間になって世界を救いたいというのもありますけど……兄さんに会えるかもしれないっていうのもあるんですよね。

……まあ、その際に『ウィンディアと娘の世界を広げるために彼女を連れていってほしい』とガエリオンに頼まれたのは予想外でしたけど。因みに娘っていうのは、私になついたガエリオンの娘のドラゴンの事です。

「『リオン』、そろそろ街が見えたので騒がれないようにちょっと遠目に降りてください。ウィンディア、降りますので準備してください」

『はーいなの！』

「……わかったわ」

……まだ拗ねているんですか。あ、リオンって言うのはガエリオンの娘の名前です。ウィンディアが拗ねているのは親に旅立つように言われたからでしょうね。

「よっと」

私は軟着陸したリオンから降りると、降りようとしているウィンディアをひょいと抱き上げそのまま地面に降ろします。

「……あんたより背が高くなったら同じことしてやるんだから」
「楽しみにしてますよ」
私は苦笑いをしながらウィンディアと共に立派なお城のある街に向かって歩きだしました。
……
それにしても……
「まさか四人もいるとは思いませんでしたよ」
「それについては同感だ」
「私もまさか他にもいるとは思わなかったな」
「……あたしもそう思う」
私は同じように宝石が埋め込まれている武器……七星の眷属器を持った人達に呆れ半分、嬉しさ半分で案内された広間でそう言いました。
因みに自己紹介は済んでいて、名前呼びの許可ももらっています。
「……そう言えば王様、アトラちゃんの顔を見た瞬間凍りついてましたけどどうしたんでしょうか？」

「……小声だからあたしにしか聞こえなかっただろうけど『る、ルシア……!?　い、いや……他人の空似、か』って言ってたぜ」
「ふむ……家族か昔の友人にアトラの様な人間がいたのかもしれないな」
「言葉からすると家族かもしれないわね……」
私達が色々言っていると、王様との対面が終わったのか、四聖の人達、が……え？
「か、香……!?」
「に、兄さん……？」
「ね、姉さん!?」
「れ、錬……？」
「樹？　樹なの……？」
「姉さん!?」
「な、尚兄ぃいいい

た……

次回『二度目の自己紹介と仲間分け』
お楽しみに

二度目の自己紹介、仲間分け

自己紹介と勇者達の編成が決まります。（物語の進行で変わる事もある）

「……（顔真っ赤）」
「時々信じられないような事をするよね、文香って」
「う、うるせぇ！　あたしは、あたし、は……」
そう言って言葉を詰まらせると、文香は微妙に岩谷さんから距離を取りました。
「文香、どうし……」
「ごめん。理由は今は言えないけど……あたし、尚兄の側にはもういれないから」
「え？　それってどういう……」
「尚文、ストップ。お前の妹さんが言いたくないんだからそれを無理矢理聞き出すような真似はやめようぜ？」

「兄さん、ややこしい事になるだけだと思うので兄妹間の問題に口を出すのはやめませんか？　というか、文香に相談という名のアプローチをかけたいだけですよね？」

「バレたか……」

「……北村君、文香に手を出したら承知しないよ？」

い、岩谷さんからおっかない気配が……

「え、えっと……そ、そうだ！　お互いの兄弟姉妹を知らないだろうし、もう一度自己紹介をしようよ！　自分達が来た状況も含めてさ！」

嫌な雰囲気を察したのか、理奈さんが慌てたようにそう言いました。

「……それもそうだな」

「確かに、互いの事は知っとくべきですよね」

「んじゃ、まず俺と香からだな。俺は北村元康、年は21歳で槍の勇者として召喚されたんだ。あ、死因は……俺ってさ、モテるんだよね……」

「……二股でもして刺されたか？」

「二股どころか故郷の人達も含めれば何股になることやら……あ、兄さんはバ

イセクシャルですよ？」

　茶化すように言った天木さんの発言に補足を入れると、兄さんを除いた男性陣が全員尻を隠して兄さんから距離を取りました。

「……露骨だなぁ。ま、香の言う通りだからしょうがないけど。いやぁ、女の子って怖いねぇ」

「地雷みたいな女を引っ掛けるからですよ」

「香の言う通りだな」

「それだよなぁ……」

　私の言葉に凛さんと文香さんがすごい蔑んだ目で兄さんを見ながらそう言いました。

「じゃ、次は私ですね。私は北村香です。年は18歳で投擲具の勇者をしています。死因は……兄さんを殺した地雷女の一人に殺されました」

「……悪い、香！」

「気にしてませんよ、寧ろ兄さんが私の花嫁姿を見てくれなかったのが心残りです」

「……こっちでは見れるように努力するよ」

「器が大きいのか、単に馴れてるだけなのか……どっちなんだろ？」

私が自己紹介をすると、兄さんが私に向かって土下座しました。ま、昔の事でグチグチと文句を言うのは性に合わないから気にしてないんですけどね。

「次は俺だな。俺は天木錬、年は16歳で剣の勇者として召喚された。死因は当時世間で騒がれていた通り魔に幼馴染みと一緒に襲われてそれを取り押さえたのはいいんだが……」

天木さんが脇腹を擦りながら言い淀みました。……あそこを刃物か何かで刺されたんでしょうか？

「私としてはアイツを、『詩乃』を見捨ててでも生きてほしかったんだけどな……」

「それは無しだろ。大体、姉さんも遭遇したらおんなじことをしてただろ」

「否定できない自分がいる……」

そう言われてｏｒｚの体勢になる凛さん。……正義感強そうですもんね、二人とも。

「ごほん、見苦しいところを見せたな。私は天木凛。年は18歳で小手の勇者として召喚された。死因は車に轢かれそうな子供を助けようとして……ポイ捨てさ

れた空き缶を踏んで逃げ遅れて車に轢かれたことだ」
「姉さんって、本当に運が絶妙なところで悪いよな……高校受験の時も受験票を忘れて第一志望の高校に入れなかったし……」
「そ、それとこれとは関係ないだろう！　つ、次だ！　次の奴、頼む！」
「あ、ごまかした」
「うるさい！」
顔を真っ赤にしながら凛さんは理奈さんの茶化しに対しに怒鳴るとそのまま黙り混みました。
……小手って武器なんでしょうか？　あ、殴りかかるとか？
「次は僕ですね。僕の名前は川澄樹。年は17歳で弓の勇者として召喚されました。死因は……」
「私が話すよ。樹の死因はいきなり突っ込んできたトラックから私を庇って死んだんだ。ただ……不審な点が、凄く……痛!?」
「姉さん!?」
「理奈、どうした!?」

理奈さんが川澄さんの死因を言っていると、急に頭を抑えて踞りました。ど、どうしたんでしょうか。

「……だ、大丈夫！　ちょっと頭痛がしただけだから」

「いや、それ大丈夫じゃないと思うんですけど!?」

「ううん、もう治まったから」

「本当ですか？」

「うん。アタシは大丈夫だから、自己紹介をするネ。アタシは川澄理奈。年は19歳で斧の勇者として召喚されたンダ。死因は……なんでか記憶に霞がかかったみたいに思い出せないんだよネ……」

「ふむ……限定的な記憶喪失か？」

……？　理奈さんの言葉のイントネーションが所々おかしいような……？　なんか無理をして文香さんみたいな喋り方を抑えているような声のような気が……

「次は俺だね。俺の名前は岩谷尚文。年は20歳で盾の勇者として召喚されたんだ。俺の場合は図書館で『四聖武器書』って言う本を読んでいたらいつの間にかって感

じかな？」
「ふむ……随分毛色が違うんですね」
「ある意味羨ましいな」
「確かに……」
岩谷さんの紹介で全員が羨ましそうな顔をします。まあ、気持ちはわかりますけどね。私達全員が元の世界では死んだわけですし。
「あたしの名前は岩谷文香。年は16歳で爪の勇者として召喚された。ま、尚兄と同じように『四聖勇者と四星の祈り』っていう本を読もうとしたら召喚されてた」
「ふーん……」
「岩谷さんと同じ理由か……」
「全員、状況が違いますね……」
嫌な状況の違いが多数ですけどね。

「相変わらずゲームみてぇな機能だよな、これ」
自己紹介を終えた後、兄さん達が武器に備えられた武器の選択機能及び説明機能

である『ウェポンブック』を読み込んでいると、文香さんがそう言いました。
「っていうかゲームじゃね？　俺は知ってるぞ、こんな感じのゲーム」
「『エメラルドオンライン』ですよね？　でも……」
「は？　なんだそりゃ？」
私が兄さんにこの世界が現実であると言おうとすると、錬さん（姉や妹が名前呼びなのに、男性陣がこれでは何か嫌だっていう理由で兄さんが名前で呼ぶように言ったのを皮切りに全員が名前呼びに成りました）が疑問を言いました。
「俺が知ってるのは『ＶＲＭＭＯ』の『ブレイブスターオンライン』だけど……」
「僕が知ってるのは『コンシューマー』の『ディメンジョンウェーブ』ですね」
「「……は？」」
あれ？　何か雲行きが怪しいような……？
「ちょっと待てよ、なんだよそのゲーム!?　つかVRってまだＭＭＯまで行けるようなレベルじゃないぞ!?」
「そうですよ、まだ小説とかの領域ですよ!?」
「はぁ!?　そっちはまだクリックやコントローラーを使ってるってのか!?　そもそ

も二人が言ったゲームなんて……「ストップ」ぐぇ!?」

３人がヒートアップしそうになったところで文香さんが錬さんの襟首をひいて押さえ込みました。

「取り敢えず情報を整理しようぜ？　まずは首相の名前だ、せーの」

私達は文香さんの言葉に応じて名前を言います。

「「湯田正人」」↑私と兄さん

「「谷和原剛太郎」」↑凛さんと錬さん

「「小高縁一」」↑理奈さんと樹さん

「「安部孝夫」」↑文香さんと尚文さん

……あり？

「……あいませんでしたね」

「つ、次は有名な企業とかはどうですか!?　私は『九楼(くろう)財閥』を提案しますけど……」

「ああ、『撫子(なでしこ)』ちゃんのところだろ？　まだ交流あるんだな」

「ええ、今のところは手紙だとかメールですけど……何れみんなで会おうって計画は建ててるんですよ。……どうですか？」

……本当に撫子ちゃん達に、会いたかったです。
「……すまない、聞いたことないな。私はＵＥＡ……『ユートピアエンターテイメントソフトウェア』を提案する」
「姉さんって、本当に生粋の『シャングリラ・フロンティア』のファンだよな」
「あれはエンドコンテンツ兼キラーコンテンツだよ。きっと『ルスト』の『ネフホロ』、『シノン』……詩乃の『ＧＧＯ』と同じく死ぬ時に思い出す作品だな」
そう、ですか……
「ゲームの会社でしょうか？　僕は『神城（かみしろ）グループ』を提案します」
「あー、『早月（さつき）』ちゃんの所の？」
「い、良いじゃないですか！　告白して撃沈したとはいえ、初恋の人の会社なんですから！」
「ほほう……」
理奈さんの言葉に全員が樹さんを見てにやにやと笑っています。
「ぼ、墓穴を掘ってしまった……な、尚文さん！　お願いします！」
「はいはい……じゃあ、俺は『集英社』かな？」

「あたしは『フォーチュンホールディングス』かなぁ……」
「ああ、カラオケボックスとかのアミューズメント会社でしょ」
「ま、そう……かな？」
微妙に歯切れが悪いような……

あれから十数分後、私達は色々な事を言いましたがどうしても合うのが見つかりませんでした。
が……
「へー、そんなことがあったんだ」
「はい、小学校６年生の頃は私にとっての一番の宝物です」
「す、凄いクソゲーの数々ですね……」
「うむ。正直言ってそいつに引き摺られてクソゲーの沼に腰が半分ほど浸かってしまった……」
「ほー、樹と早月ちゃんってデートとかしてたんだ」
「うん。仲も悪くなかったし、告白の確率は姉のフィルター込みで８割はいって

たと思うんだけどね……なんでふられたんだろ？」
「「……ちょっと待てこら！」」
「うぉう!?　一体どうしたんですか!?」
尚文さんに話ながらあの頃の事を思い返し……あれ？
「……いつの間にか趣旨からずれてます!?」
「そうだよ、なんで話し合いから興味のある相手に話を聞いてんだよ!?」
「いくらなんでもずれすぎだろ!?　かく言う俺と文香もさっきまでそうだったけどな！」
錬さんもですか……ですが、はっきりはしましたね。
「平行世界（パラレルワールド）かぁ……」
「ですね、此処まで噛み合わないとそうとしか思えません……」
うーん……本や漫画でしか聞いたことがない展開が本当にあるとは……
「はぁ、兄さん……提案があるんですけど」
「どうした？」
「いえ……さっきまで話していたメンバーで組みませんか？」

「「「「「……は!?」」」」」

綺麗にハモりましたね……

「唐突になんだよ。可か不可かで言えばありの方だけど」

「いえ、何となくです。でも、兄妹で組むと文香さんが尚文さんとの間でギクシャクしそうですし……尚文さんと話してて楽しかったから……ですかね？」

「……あんがと」

私が理由を言うと文香さんが顔を赤くしながらお礼を言いました。

「ふむ……そういう理由なら歓迎だ。私も樹に不安な所があるからな」

「……え？　僕の何が不安なんですか？」

「いや……何となくだ（話してわかったがこいつは正義を『盲信』するところがある。誰かが信じることと盲信をすることは違うと伝えないといけないなら……理奈よりも他人が伝えた方がまだ増しだ）」

「？？？」

……含みがありそうな言葉ですね。

「……俺も歓迎する。正直、文香と話してると気楽に話せたからな」

「あたしもための錬とは気楽に話せるから良いよ」
　文香さんと錬さんからの了承の返事も来ました。
「私も……ありかな？　恋が多そうな性格だけど、元康君って、以外と頼りがいがありそうだし」
「樹の視線が怖いから、手取り足取りは出来ないけどね」
「？　なんで一緒に戦うのに樹の視線が怖いの？」
　兄さん……すぐに肉体関係を持とうとしないでください……
「……そう、だね。文香が話してくれるまで、別行動をするのも手……かな？　俺も賛成だよ」
　尚文さんからも了承を貰えましたし、決定ですね。
「そう言えば仲間ってどうするんでしょうか？　私、一緒に旅をする仲間がいるんですけど……」
「私も自前の仲間がいるんだけど……」
「む？　私もだ」
「「「「……仲間が出来るの早くない？」」」」

……また、ハモりましたね。

私達は苦笑いをしながらウィンディアや凛さん、理奈さんの仲間が待っているだろう部屋に向かって歩き出しました。

因みに、兄さん達は王様が明日冒険者とかを集め仲間を募集するそうです。楽しみですね。

次回『支度金と盾の現実』

お楽しみに

支度金と盾の現実

前話の翌日のお話です。

翌日。私達は全員（既に仲間になっているメンバーも含めて）が広間に集められていました。

因みに四聖勇者の仲間になる人達は騎士や冒険者が合計十三人ほどいます。

……何故か最後に来た一人を見て文香が凍り付いている上に、王様と王女様が深く溜め息を吐いていますがどういうことなんでしょうか？

「前日の件で勇者の同行者として共に進もうという者を募った。どうやら皆の者も、同行したい勇者が居るようじゃ」

……昨日の今日でなんで集められるたのか気になります。

……まあ、進んで兄さん達の仲間になろうという人達ですから腕は確かなんでしょうね……多分、ですけど。

「さあ、未来の英雄達よ。仕えたい勇者と共に旅立つのだ」
あり？　勇者本人が選ぶんじゃないんですか？　まあ、異世界から来た訳のわからん人間に選ばせるよりも国民の方に選ばせるのは当然ですよね。
で、結果……
兄さん↓四人
錬さん↓五人
樹さん↓三人
尚文さん↓０
文香さん↓一人
「いや、なんでだよ!?　ちょっと王様!?」
「おいこらオッサン！　こいつら絶対『三勇教（さんゆうきょう）』の信徒だろ!?　どう考えても作為的な組み合わせだよな、これ!?」
「文香、落ち着いて！」
文香さん……いくら此処で一ヶ月間も勇者していたといっても、王様に対して『オッサン』って……後、三勇教ってなんですか？

「う、うぬ。さすがにワシもこのような事態が起こるとは思いもせんかった」
「人望がありませんな」
「すっげー棒読みな口調だなぁ、あんたらぁ……！」
「文香、ラース・クローダメだからね！」
文香さんが慌てたような王様と冷静すぎる大臣さんの言葉に苛ついたような表情で禍々しい爪を構えますが、文香さんの仲間になった女の子が文香に抱きついて押し止めました。
ぐだぐだになりかけたところで、ローブを着た男が王様に内緒話をしました。
「ふむ、そんな噂が広まっておるのか……」
「何かあったのですか？」
「どうせ、くっだんねぇ噂だろうよ……」
王様の言葉に兄さんが反応し、文香が苛立つように言いました。
「ふむ、実はの……勇者殿の中で盾の勇者はこの世界の理に疎いという噂が城内で囁かれているのだそうだ」
「はぁ!?」

「伝承で、勇者とはこの世界の理を理解していると記されている。その条件を満たしていないのではないかとな」
「ち、本当にくっだんねぇ噂だったぜ……！」
どうして昨日の今日でそんな噂が……？　というか、誰ですかそんな噂を流したのは？
「……昨日の雑談を盗み聞きされたんじゃないのか？」
兄さんが私にそう言います。……可能性としてはありそうですね。
「つーか錬！　お前５人も居るなら分けてくれよ」
尚文さんがそう言うと、何か怯える羊みたいな目で錬さんに同行したい冒険者（男性も含みます）が錬さんの後ろに隠れました。
錬さんもなんだかなぁとボリボリと頭を掻きながら彼らを見て。
「俺はつるむのが『苦手』なんだ。付いてこれない奴は置いていくぞ」
「錬、それは彼らに失礼だろう！」
と、突き放す口調で話して凛さんに注意されましたが、彼らは動く気配がありません。

「元康、香ちゃんもどう思うよ！　これって酷くないか!?」
「まあ……」
「と言うか最早軽い差別ですね、これ。あと、ちゃん付けは止めてください」
なんか下に見られている感じがするんですよね。
「偏るとは……なんとも」
「流石に此処までとは予想出来なかったわ……」
樹さんと理奈さんも困った顔をしつつ、慕ってくれる仲間を拒絶できないと態度で表してます。
ちなみに兄さんの仲間はみんな女です。何処までも女性を引き寄せる体質ですね、本当に。
「均等に3人ずつ分けたほうが良いのでしょうけど……無理矢理では士気に関わりそうですね」
「そりゃそうだけどよ……」
樹さんの最もな言葉に文香さん以外の全員が頷きます。
「だからって、俺は一人で旅立ってか!?」

「いや、香がいるだろ」
「寄生プレイみたいで嫌なんだよ！」
尚文さんがそう言いました。確かに、尚文さんの盾って防御主体ですからね……
「あ、勇者様、私は盾の勇者様の下へ行っても良いでしょうか？」
兄さんの仲間になろうとしていた女性の一人が手を挙げながらそう言いました。
「お？　良いのか？」
「はい」
因みに女性は水色のショートの可愛い女性です。
ただ……何故でしょうか？私の中の危機管理のセンサーが物凄い警告音を鳴らしています。
「他にナオフミ殿の下に行っても良い者はおらんのか？」
……誰も手を挙げる気配がありませんね。
王様は嘆くように溜息を吐きました。
「しょうがあるまい。ナオフミ殿はこれから自身で気に入った仲間をスカウトして人員を補充せよ、月々の援助金を配布するが代価として他の勇者よりも今回の援助

金を増やすとしよう」
「は、はい！」
「ぐるるるる……！」
「……」カチャカチャ
まあ、妥当な線でしょうね。……文香さんが今にも全員に襲い掛かりそうな表情で唸ってますが、文香さんの側にいる冒険者が首に首輪を……って、ちょっと待ってください!?
「何故に文香に首輪を!?」
「あたしは犬か何かか!?」
「だって、文香は今にも飛び掛かりそうだし……勇者達が仲間の人数で喧嘩なんて示しがつかないでしょ？」
「ぐぅ……！」
文香さんが唸りながらもぐうの音も出ない表情で黙りました。
「それでは支度金である。勇者達よ、しっかりと受け取るのだ」
私達の前に八つの金袋が配られます。……ジャラジャラと重そうですね、鈍器と

しても使えそうです。
その中で少しだけ大き目の金袋が尚文さんに渡されます。
「ナオフミ殿には銀貨８００枚、他の勇者殿には６００枚用意した。これで装備を整え、旅立つが良い」
「「「は！」」」
「……了解」
私達と仲間達はそれぞれ（一部は不満そうに）敬礼して、謁見を終えました。
それから謁見の間を出ると、それぞれの自己紹介を始めます。
「盾の勇者様、投擲具の勇者様。私の名前は『フレンディーナ・フォイア』です。名前が少々言いにくいので気軽に『フレン』とお呼びください」
「よ、よろしく……」
「……よろしくお願いします」
私はフレンさんの腰の低い態度に更に警戒心が上がるのを感じました。
正直言って、彼女の雰囲気がこれまで兄さんとの交際を阻止してきた地雷女達みたいな感じなんですよね……まあ、何か不審な態度をとればそれ相応のお返し

をするまでです。
「……昨日も紹介されたと思うけど、ウィンディアよ。これからよろしく」
「……亜人、ですか」
「何よ、文句ある？」
「ウィンディア、いきなりの喧嘩腰はダメですよ！」
「……ふん！」
私がウィンディアに注意をすると、ウィンディアは鼻を鳴らして私の側に寄ります。
……はあ、完全に拗ねてへそを曲げてますねこりゃ。
「……まあ、良いでしょう。勇者様方……先ずは装備を整えるために、私の知っている限りで一番良い店に行きましょう」
「わ、わかった」
「……わかりました」
私はナップザックに入れていた『ガエリオンの鱗』を制服の内ポケットに入れると、二人の後を着いて歩きました。

「ここがオススメの店ですよ」
「おお……」
「わぁ……！」
そこには如何にもな感じの店があり、扉から覗き見ると剣や鎧など『これぞ武器屋！』と言わんばかりの物が置いてありました。
「まさか本当にゼルトブルでないところで『流星（りゅうせい）シリーズ』が手に入るなんて……」
「さて、と。『エルハルト』さんへの伝言は済んだから……次は樹の希望通り狩りに行こう」
「じゃあ、僕の今のレベルに合った狩り場を知ってるので行きましょう」
「わかった」
そんな会話をしながら凛さんと樹さんが店を出て歩いていきました。
……流星シリーズって、なんでしょうか？
「いらっしゃい」
改めて店に入ると店主さんに元気良く話しかけられました。筋骨隆々の、まさし

く絵に描いた武器屋の店主って感じの人がカウンターに立っています。……まあ、これでぶよぶよの脂肪の塊みたいな店主だったらそれはそれで嫌なのでこの人が良いですね。

まあ、ドラゴンがいるので実感はありましたが……本当に異世界に来たんですね。

「へー……これが武器屋かぁ……」

「お、お客さん達初めてだね。当店に入るたぁ目の付け所が違うね」

「ええ、まあ……彼女に紹介されて」

私はフレンさんを指差すと、フレンさんは頭を下げます。

「ありがとうよお嬢ちゃん」

「いえ、この辺りでは貴方の店は有名ですから」

「嬉しいこと言ってくれるねぇ。所でその変わった服装の彼氏達は何者だい？」

……そう言えば私達って異世界の服を着てましたね。

「最近の話から、貴方も分かるでしょう？」

「となるとアンタ達は勇者様か！　へー！」

まじまじと親父さんは私達を凝視します。

「あんまり頼りになりそうに無いな……」
がく!?……まあ、肉体的にひょろいですからしょうがないっちゃしょうがないんですけどね。
「はっきり言いますねぇ」
「良いものを装備しなきゃ舐められるぜ」
「でしょうね……」
私は店主さんの言葉に溜め息を吐きます。ですが……裏表のない気持ちの良い人のようですね。
「見たところ……はずれ？」
あ、尚文さんが凍り付きました。まあ、言っちゃ悪いですけどエメオンでの盾って最弱職筆頭でしたしね。
「盾の勇者である岩谷尚文と申します。今後も厄介になるかもしれないのでよろしくお願いしますね」
「同じく投擲具の勇者の北村香と言います。これからお世話になると思うのでよろしくお願いします」

私達は今後の事を考えて自己紹介をします。
「ナオフミとカオルねえ。まあお得意様になってくれるなら良い話しだ。よろしく！」
元気な店主さんですねぇ……
「それで店主さん、何か良い装備はないでしょうか？」
フレンさんが店主さんに色目を使うように伺います。
「そうだなぁ……予算はどのくらいだ？」
「ウ～ン……」
フレンさんが尚文さんを値踏みするように見ます。
「銀貨２５０枚の範囲でしょうか？」
尚文さんの予算８００枚で２５０枚……宿代や仲間を雇う代金も込みだとしたらその位でしょうか？
「あ、私はウィンディア……この子用にナイフを2本ほど欲しいのですが……
あ、予算は銀貨１５０枚程です」
「お？　それくらいとなると、この辺りか」

店主さんはカウンターから乗り出して、店に飾られている武器を数本、持って来ました。
「あんちゃん達。得意な武器はあるかい？」
「いえ、今のところ無いんですよ」
「あたしも無い」
「となると初心者でも扱いやすい剣辺りがオススメだね。嬢ちゃんはここら辺かな？」
そう言って店主さんは剣を数本と、ナイフを数本をカウンターに置きました。
「どれもブラッドクリーンコーティングが掛かってるからこの辺りがオススメかな」
「ブラッドクリーン？」
「血糊で切れ味が落ちないコーティングが掛かっているんです」
「へぇ……」
便利なコーティングですね。
「左から鉄、魔法鉄、魔法鋼鉄、銀鉄と高価になっていくが性能はお墨付きだよ」
これは使用している鉱石による硬度でしょうか？

鉄のカテゴリー武器のですね。
「まだまだ上の武器があるけど総予算銀貨２５０枚だとこの辺りだ」
「あ、そう言えば流星シリーズって武器の事を言ってた人がいたんですけど……」
「ああ、そいつは『隕鉄シリーズ』の事だな」
隕鉄……ああ、だから流星シリーズですか。
「流石にあれはゼルトブルから仕入れた試作品だからな、あの二人には師匠からの紹介だから持たせたがそれ以外となると俺が信用できなきゃダメだね」
「そりゃそうですよね」
つまり樹さんは四分の一の幸運を手に入れたと……
バチン！
「イッ!?」
音に気付いて振り向くと、そこには剣が尚文さんの手から弾かれる所でした。
あー、これは……
「『勇者の武器以外持つなこのやろー（俺以外の武器に浮気すんなこのやろー）』って、感じでしょうか？」
「盾以外使うなってか!?」

「だったらそれ以外の部分を充実させれば良いんじゃないですか？この鎧なんて予算以内なのに要所要所に魔法鋼鉄を利用してるお陰で防御力は高いみたいですよ？」

私は銀貨１００枚なのに以外と防御力が高いプレートメイルを指し示します。

「た、確かに……でも動きにくいやつはなぁ」

「なら、最初は鎖帷子とかはどうですか？それからプレートメイル等を採用すれば良いのではないかと」

「……それもそうですね。ですが、それとウィンディアが選んだナイフ以外は買いませんよ」

「え、なんで……」

「節約です」

これから何が起こるかわからない以上、節約してお金を残すのは鉄則です。

武器と防具を買った私達は食料や薬を多少買い込んだ後、門を出て草原に出ました。

『あ、お帰りなの！』
「リオン……私が王様に許可を貰ったからって、門のすぐ側で待ち構えないでください」
「ほ、本物のドラゴンだ……！」
リオンが私に頬擦りをすると、尚文さんがリオンを見て目をキラキラさせます。
まあ、ドラゴンは誰しもが憧れる生き物ですしね。
「あ、尚文さん。これ、渡しておきますね」
私は尚文さんにリオンの鱗を手渡します。
「これは？」
「リオンの鱗です。結構強力な武器になりますよ？」
尚文さんが首を傾げながらリオンの鱗を武器に吸収させると、目をぱちくりさせた後で『竜鱗シリーズ』らしき盾を出しました。
「本当に強力な物になったよ……」
「まあ、ドラゴンの鱗ですしね。さあ、行きましょうか」
私はフレンさんの先導に従って歩いていると……

「勇者様方、居ました。あそこに居るのはオレンジバルーン……とても弱い魔物ですが好戦的です」
　おおう……ストレートなネーミングですね……
『がぁ！』
「勇者様方！　頑張ってください！」
「……はいはい」
　私は一歩引いて戦う私達を見ているフレンさんに溜め息を吐きますが、実力を見るという点では正しいんでしょう。……多分。
「『エアストスロー』！」
　私は『竜鱗の投剣（りゅうりんのとうけん）』に変化させると、投擲具の基本的なスキルで攻撃して……一撃で10匹も貫通しちゃいましたね。
「す、凄い……！　でも、俺だって……やあ！」
　ボカ！↑ショボいエフェクトと共に１ダメージの表記が浮かぶ。
「……え、うわ!?」
　ガリ！↑０ダメージの表記が浮かぶ。

……わお、凄い防御力ですね。
「……あれ？　もしかして俺って防御力全振り？」
「……タンク、頼みますね」
「気遣うような視線なのが俺を痛め付ける……！」
その日、尚文さんは盾の現実を味わいました……

次回『裏切り～最初の絆～』
お楽しみに

裏切り～最初の絆～

あれから数時間後、私達はオレンジバルーンを皮切りにブルーバルーン、イエローバルーン、レッドバルーンなどのバルーンシリーズや『ウサピル』というウサギみたいな魔物など序盤に出てくる雑魚敵みたいな魔物を蹴散らして素材を確保し街に帰還していました。

「え、香って今の段階でレベルが15なのか!?」

「そうですよ。因みに文香のレベルは何故か52、凛さんは27、理奈さんは41でしたね」

因みに現在の尚文さんのレベルは６です。

「文香が異様に荒んだ雰囲気を持ってるのと何か関係があるのかなぁ……あんな雰囲気『万色学園（ばんしきがくえん）』の中等部２年のある時期以来なんだよなぁ……」

「何かあったんですか？」

「いや、特には……でも高等部でも有名な人達との付き合いはあったかな？……ああ、不良みたいな行動をするようになったのもあの頃からだな……荒んだ雰囲気

が和らいだ時と同じ位の時に過剰な暴力は止んだんだ……売られた喧嘩は買う姿勢はそのままだったけど」

……本当に何があったんでしょうか？

「お、盾のあんちゃんと投擲具の嬢ちゃんじゃないか。他の勇者たちも顔を出してたぜ……なんか、『その行為は万引きだ！』だのどうだのの言い争いもしてたけどな」

まあ、樹さんと凛さんを見ていたから予想はしていましたが全員来てたんですか……けど、万引きって一体……？

「そうだ。これって何処で買い取ってくれる？」

バルーン風船シリーズやウサピルの毛皮をを親父に見せると親父さんは店の外の方を指差しました。

「魔物の素材買取の店がある。そこへ持ち込めば大抵の物は買い取ってくれるぜ」

「ありがとう」

親切な親父さんですね……

「で、次は何の用で来たんだ？」

「ああ、ウィンディア……仲間の防具を買おうって決まってさ」
「一緒に狩りをしている時に危ない場面が多々見られたので……あ、お金は私が出しますね」
　因みにフレンさんも買いたいと言っていましたが、ウィンディアの方が武器しか装備していないのとフレンさん自身の装備も結構良かったので節約の意味で却下しました。
「……予算は？」
「ウィンディアは私の命の恩人なので金に糸目は……あまり着けません」
「あまりかよ……」
　残りの予算は尚文さんと私を合わせて銀貨１１００枚程、宿屋の滞在費や仲間を雇う代金も残すとするとあまりにも高いのは却下です。
「ウィンディア、どんな防具が……既に集中して選んでるみたいですね」
　下手に話しかけたら怒られそうです。
「……割りと長引きそうだから、雑談しながら今のうちに値引きしてやる」
「ふ、同意見です」

「お、面白いことを抜かす勇者様方だ」
「８割引！」
「幾らなんでも酷すぎる！　２割増！」
「それ逆に増えてますよね!?　７割引！」
「商品を見せてねぇで値切る野郎達には倍額でも惜しいぜ！」
そりゃそうですが……
「ふ、抜かせ！　９割引！」
「チッ！　２割１分増！」
「だから増やさないでください！　９割９分！」
「それはほぼタダってんだ勇者様！　しょうがねえ５分引き！」
「少ない！　９割２分――」
それから数分後……ウィンディアが選んだのは比較的に高めながらも性能、重さ、防御部位全てがウィンディアの現在の戦闘スタイルにあった防具を持ってきました。
「……これにするわ」

「親父さん、幾らですか？　６割５分！」
「おまけして銀貨２８０枚だね。これ以上は負けられねぇ、５割９分だ」
……考えていた予算（銀貨２００枚）よりは割高ですが、ウィンディアの命を守れる事を考えると安い買い物ですね。
「わかりました、その値段で買います」
「やれやれ、とんでもねぇ勇者様達が来たものだぜ……毎度あり！」
ふう……凄まじい激戦（値切り）でしたね。

「男性用の小部屋と女性用の大部屋の二部屋でお願いします」
「はや!?」
私は宿屋に着くと、フレンさんが何かを言う前に部屋を取ります。
「尚文さん、男女別に別けた理由は……わかりますよね？」
「……うん、元康に殺されたくないからね。気を付けるよ」
わかればいいんです、わかれば。……まあ、下着を見た位ではぶん殴る程度だと思いますけどね。それ以上は保証しませんけど。

宿屋に並列している酒場で料理を注文すると、尚文さんが途中で買った地図を広げました。
「えっと、今日行ったのがこの平原だよな？」
「はい、そうですよ」
「で、その先が昼間に話していて錬さんと文香さんが行ったのがこの森ですよね？」
「ええ、この地図には載っていませんが私達が行こうとしているのは森を抜けたラファン村です」
……地図に乗らない位小さな村って事でしょうか？
「ふむ……そうか」
「ラファン村を抜けた先あたりが初心者用ダンジョンがあるんですよ」
「ダンジョン……！」
「ふむ、ダンジョンですか」
尚文さんがリオンを見ていたときの様に目をキラキラとさせています。まあ、こういう物語（ファンタジー）ではダンジョンなんて定番ですしね。

「そう言えば尚文さん、昨日もそうなんですけどお酒飲めないんですか？」
「いや、飲めるんだけどさ……ちょっと苦手なんだよね」
そうなんですか……兄さんも父さんもお酒に強いんで男性は全員そうなのかと思ってました。
「まあ、料理が美味しいからそれいいんですけどね」
……フレンさんが料理に調味料を入れるふりをして『睡眠薬』を入れてさえいなければ、ですがね。
「さて……と。お腹一杯になりましたし、今日はもう寝ましょうか」
「うん、また明日ね」
「はい、また明日」
……明日には一人減っていると思いますが、ね。

「……やはり動きましたね」
私は夜遅くに着替えて何処かに行こうとしているフレンさん……いや、地雷女の気配を察して動き始めました。

……まあ、睡眠薬を入れた段階で察していたんですけどね。こういう人だって。私が小学３年生、兄さんが小学６年生の頃に病んで睡眠薬入りの弁当を食べさせて、兄さんを食べようとした人の気配がしたんですもの。

「さて、と。そろそろ止めますか」

私は部屋を出ると、尚文さんの部屋に入ろうとする地雷女を止めようとして……

……

「……っ!?」

私は手にした投擲具のナイフで後ろから振るわれた刀を受け止めました。

「っ、何者ですか！」

「……腕は落ちていないようだな、北村香」

「……!? その、声……は!?」

私は刀を構えている相手を察して愕然とします。だって、この人は……！

「なんで、死人である貴方がここにいるんですか……！ 御剣（みつるぎ）……！」

「……無駄話をしている暇はない」

そう言ってその人は刀でナイフを弾き飛ばして私に蹴りを決めて宿屋の外に蹴り

飛ばしました。
「えん……じゅ！」
私は私を見下ろす男……中学２年生の頃に私と兄さんが住んでいた『久代市（ひさひろ）』で巻き込まれた騒動で死んだ筈の『御剣槐（えんじゅ）』を睨みます。
「待っていなさい、すぐに……「えい」ぐぺ!?」
私は御剣槐に集中しすぎていたせいで後ろから殴られたのだと気付いた時には、既に私の意識はなくなっていました……

「本当にいいのかな？アイツの行動を止めた方が良いような気がするんだけど……？」
「さあな、しかし俺達はあの黒ローブの男に蘇らされた身だ。今は従うしかない」
「まあ、そうだけどさ……」
倒れ伏した香を見下ろしながら御剣槐と10代半ばの不満そうな少女はこれからの事を話し合う。
「そういえば『真宮寺（しんぐうじ）』さんは？」

「岩谷尚文の妹の監視をしている。ローブの男曰く『下手に奇跡を起こされると困る』だそうだ」
「ふーん……まあ、錬と会うと気まずいしね。僕じゃなくて良かったよ」
「お前が生きていた世界の人間だったな『ユウキ』」
「まあね、真宮寺さんや御剣さんはこの子とその兄がいた世界だっけ？」
「……『真宮寺一馬』は『太正』、俺が生きていた時代は『平政』と時代は違うがな。……行くぞ」
「わかったよ、『カイン』と合流だよね」
「ああ」
そう言って御剣槐とユウキと呼ばれた少女は闇夜に消えた……

「香、しっかりしろ！」
「香、大丈夫!?」
「い……痛ぅ……！」
私は兄さんとウィンディアの声と共に目が覚めます。あー……頭が殴られた後遺

症でガンガンする……

「って、そうです！　兄さん、大変です！　御剣槻がいました！」

「んな!?　確か死んだはずだよな!?」

「ええ、私達の記憶を媒介に『帝国華劇団（ていこくかげきだん）』の皆さんを召喚したのと引き換えに死んだはずなんですよね……ひょっとして私達の様に……」

「……って、今はそんな場合じゃない！　尚文がフレンディーナを『強姦』しかけたって罪で放り出された！」

……え？

「えぇぇぇ

「兄さん……まさか信じたんじゃないでしょうね？」
「白よりの灰色！　フレンディーナの話の内容は真に迫ってたんだけど……昨日、尚文と一緒にいた香がいなかったし、何故か女性陣が誰も呼ばれていなかったから黒と決めつけるのは止めたんだ」
　ほ……まあ、兄さん単体だったら間違いなく騙されたんでしょうけどね……
「因みに他のお二人は？」
「錬は中立。文香との会話の様子と、フレンディーナの話の内容の真実っぽさからどっち付かずになったみたいだな。樹は……完全な黒。理奈ちゃんとかを呼ばなかったのは女性にはデリケートな問題だからって決めつけてた」
　私達は出会って間もないですから信頼だのなんだのがないのが響きましたね……
……！
「ただ、その後で文香ちゃんが飛び込んできて……」
「……映像が目に浮かびます」
　暴れまわる文香さん、ぶっ飛ばされる王様と樹さん、倒れ伏す兵士達、血祭りにされる地雷女……地獄絵図が容易に想像できます。

「いや、お前が想像する事態になる前に尚文が止めて……そのまま尚文は王城から追放されたんだ」

マジですか……

「香、昨日の夜に何があったの？」

「……あの地雷女が夜中に起きて尚文さんの部屋に入った位しかわかりません」

「多分……尚文から装備を剥いで金貨袋を強奪、王城に向かったんだろうな」

く……！　あの時止められていれば……！

「香、お前はこれからどうするんだ？」

どうする……とは？

「尚文にこのまま着いていくのか、それとも他の皆と行動を共にするか……だな」

……愚問ですよ、それ。

「尚文さんに着いていきますよ。……あの時、私があの地雷女を止められていればこんな事態にはならなかったんです。だからこそ……私は尚文さんを助けたいんです」

「……だろーな」

兄さんは笑顔で私の頭を撫でます。
「……子供扱いしないでくださいよ！　行きますよ、ウィンディア！」
「わかったわよ！」
私達は尚文さんを捜すために表通りに向かいました……

「親父さん！　尚文さんが来ません……な、尚文さん!?」
「ああ!?　……香か」
あれから一週間。私は尚文さんに関する情報を集めるために親父さんの所に来ましたが……まさか、見つかるとは……
「何の用だよ、裏切者め……！」
……裏切者、ですか。そうですね、助ける時に助けられず、来るべき時に来れなかった……これでは裏切者扱いされて当然でしょう。
……でも、
「それでも……あの時、尚文さんの仲間になりたいって言ったのは私ですから。だから、私は尚文さんを追いかけて来たんです。もう2度とこんな理不尽な目に尚

文さんをあわせないために、今ここにいるんです」
「……信用できるか！　お前も、お前の側にいる女も俺が用済みに為ったら……「盾のあんちゃん」あだぁ!?」
　私の言葉を尚文さんは声を荒げて否定しようとして……親父さんの拳骨が尚文さんの頭に直撃しました。
「何すんだよ!?」
「女に騙されたからって理由で女を信用できなくなるのは、そりゃあわかるぜ？　でもよ……探しに来てくれた投擲具の嬢ちゃんの事を頭ごなしに否定するのは筋が違うんじゃねえのか？　……無条件で信じろってんじゃねぇぜ？　だけどよ……1回ぐらいは信じてやってもいいんじゃねえのか？」
　……親父さん。
「……報酬は、出来高払い。後、裏切ったら……絶対に殺す……！」
「……構いません。そこまでしないと信用されないって言うなら……そこからまた、信用されるようになるだけです」

「……ふん」
「っと、それから……ほらよ」
そう言って親父さんは麻の服と煤けたマントを尚文さんに手渡しました。
「……これは？」
「そんなカッコじゃ舐められるぜ。せめてもの餞別だ」
……そう言えば、下着でしたね。
「……ちなみに幾らだ？」
「銅貨5枚って所だな。在庫処分品だ」
「……分かった。後で返しに来る」
「ちゃんと帰って来いよ。俺は金だけは信じているんでな」
……本当に良い親父さんです。
「あーはいはい……行くぞ」
「わかりました」
「はいはい……」
私は目付きが鋭くなった尚文さん、ウィンディアと一緒に歩みだしました……

次回『奴隷～キール～』
お楽しみに

奴隷～キール～

あけましておめでとうございます。
新年一発目行ってみよー！

「オラオラオラオラオラオラ！」
「『スパイラルエッジ』！」
「しっ！」
親父さんの店を出た私達は草原を拠点にしてバルーン系統を中心に狩りをしていました。
ですが……
「尚文さんって本当に攻撃力がありませんよね」
「言うな、自覚はしている」
なんせバルーンを一匹倒すのに5分もかかりますからね……

「……お腹空いた」
「……あ、もう夕方みたいですね」
「……んじゃあ、帰るか」
……ん？　ちょっと待ってください!?
「なんでバルーンを噛み付かせたまま帰ろうとしているんですか!?」
「いや、いざという時の為と……有効活用するためだ」
「有効活用……？」
私は尚文さんの言う有効活用がなんなのかわからずに、尚文さんの後を着いていきました。
城下町に戻ると、魔物の素材を買い取る商人の店に顔を出しました。
小太りの商人が尚文さんの顔を見るなりへらへらと笑います。
……思いっきり足元を見るつもりですね。
先客が居て、色々な素材を売っていきますが……その中に私達が売ろうと思っているバルーン風船がありました。
「そうですねぇ……こちらの品は２個で銅貨１枚でどうでしょう」

バルーン風船を指差して買い取り額を査定しています。
2個で銅貨1枚ですか……まあ、最弱の魔物ですし妥当な値段なんでしょうね。
「頼む」
「ありがとうございました」
次は私達の番なのですが……ニヤニヤと笑って私達を見ている辺り、買い叩く気満々でしょうね。
「おう。魔物の素材を持ってきたんだが買い取ってくれ」
「ようこそいらっしゃいました」
……尚文さんが探りを入れていて、笑っているのに私達が気が付いていないと思っているんでしょうか？
「そうですねぇ。バルーン風船ですねぇ。10個で銅貨1枚ではどうでしょうか？」
「……さっきの人の5分の1じゃないですか!? どんだけ足下を見ているんですか！」
「そうでしたかね？　記憶にありませんが？」
何分、うちも商売でしてねぇ……等と商人は言い訳を続けます。

「ふーん。じゃあさ」
尚文さんは商人の胸ぐらを掴み……
「コイツも買い取ってくれよ。生きが良いから……さ！」
ガブ！↑尚文さんがマントに隠していたバルーンが商人の鼻先に噛みついた音。
「ギャアアアアアアアアアア!?」
「何やってんですか!?『スナイプスロー』！」
私はバルーンをナイフで粉砕します。……店の壁に突き刺さりましたが、そこら辺は後で話し合うとしましょう。
「このままお前を草原まで引きずって、買い取って貰おうか？」
尚文さんはそう言ってマントの下に隠していたバルーン５匹を鼻を押さえる店主に見せつけます。
でも……これってただの脅迫ですよね!?
「高額で買えとは言わんよ。でも相場で買取してもらわないと話しにならないからさ」
「こんな事をして国が――」

「底値更新するような値で冒険者に吹っかけた商人の末路はどうなんだ？」
……殴られた挙げ句、信用を失って客が来なくなり最終的に廃業を余儀無くされますね。
「ぐ……」
睨み殺さんとばかりに尚文さんを恨みがましい目で見ていた商人でしたが、諦めたのか力を抜きます。
「……分かりました」
「ああ、下手に吹っかけたりせず、俺のお得意様になってくれるのなら相場より少しなら差し引いても良い」
「正直な所だと断りたい所ですが、買取品と金に罪はありません。良いでしょう」
……まあ、確かにお金と物に罪はありませんよね。
それでも相場より少し低め（3個で銅貨1枚）で買い取りました。
「ああ、俺の噂を広めておけよ。ふざけたことを抜かす商人にはバルーンの刑だ」
「だから、それ脅迫ですよね!? あ、これ壁の弁償代です」
「はいはい。まったく、とんだ客だよコンチクショウ！」

私は「な？　有効活用しただろ？」とでも言いたげな尚文さんに一抹の不安を覚えながらもそれでも支えていこうと改めて決意しました。

親父さんにマントと衣服の代金を払った後、私達はご飯を食べていたんですが……

「尚文さん、どうしたんですか？　何か首を傾げていますけど……？」

「……いや、なんでもない」

ふむ……怪しいですね、それじゃあ……

「はい、あーん……」

「？　むぐ!?」

私はフォークに刺していた照り焼きを尚文さんの口の中に押し込みました。

「……何すんだよ!?」

「今の料理はなに味でしたか？」

「はぁ……？　……しょっぱかったぞ？」

……味覚障害ですか。

「外れです。これ、結構甘いんですよね……味覚がないんですね？」
「……っち、まぁな」
……地雷女、マジ許すまじです。
「盾の勇者様ー仲間にしてくださいよー」
「ええ、お役に立ちますよ～？」
そんな事を思っていると、ニヤニヤと笑いながら冒険者と見られる男女が近寄って来ました。
……目付きが地雷女そのものです。本気で気に食わないですね。
「じゃあ先に契約内容の確認だ」
「「はぁい」」
今、イラッと来ましたよ……！
「まず雇用形態は完全出来高制、意味は分かるな？」
「「わかりませーん」」
……ブッ飛ばしてしまいましょうか？
「冒険で得た収入の中でお前等に分配する方式だ。例えば銀貨１００枚の収入が

あった場合、俺と香が大本を取るので最低４割頂く、後はお前らと女……ウィンディアの活躍によって分配するんだ。お前らだけなら俺達とお前らで分ける。お前らが見ているだけとかならやらない。俺の裁量で渡す金額が変わる」
「なんだよソレ、あんた達が全部独り占めも出来るって話じゃねえか！」
「って、言うかなんで亜人とも分け合わないといけないんですか～？」
「ちゃんと活躍すれば分けるぞ？　活躍出来たらな。ああ、ウィンディアとも分け合うのはウィンディアが香の仲間だからだ」
「そもそも見ているだけの寄生虫なんぞ養う義理もくそもないですしね」
「じゃあその話で良いで～す、装備買って行きましょうよ～」
「……自腹で買え、俺はお前達に装備を買ってまで育てる義理は無い」
「そもそも自前の武器がありますよね？　なのに装備を買わせるなんて……『それを持ち逃げします！』って言ってるようなものですよね？」
「チッ！」
「下手に出てれば犯罪者とその仲間風情がいい気になって……！」
……何処が下手に出てたんですか、何処が。

「じゃあ良いよ。金寄越せ」
「あ、こんな所にバルーンが！」
ガブウ！↑バルーンが男の方に噛みつく音。
「足が滑りました」
「手も滑ったわ」
ドゲシ！↑私の爪先が女の方に炸裂した音。
ガス！↑ウィンディアの拳が同じく女の方に炸裂した音。
「おげぇぇぇぇぇぇぇぇ!?」
「いでー！　いでーよ！」
お店が騒ぎになりますが、尚文さんは素早くバルーンを回収して食事代を払って酒場を出ました。

――――――――――――――――

……火力が足んねぇ。
俺『岩谷尚文』はレッドバルーンを殴りながらそう思った。なんせ香達がいないとレッドバルーンも一人で倒せないんだからな。

香……北村香は変な奴だ。俺が殆ど勇者を首にされたんだからさっさと兄貴の元康の下にでも行けば良いのに、最初に着いていくって言ったからと言って着いてくるんだからな……まあ、だからこそ信頼はしているんだが。

因みに香は今のところ食料の買い出し中で現在別行動だ。

「お困りのご様子ですな？」

「ん？」

シルクハットに似た帽子、燕尾服を着た、奇妙な奴が裏路地で俺を呼び止める。

なんていうかメチャクチャ肥満体のサングラスを着けた変な紳士。

そんな奇妙な奴だ。

中世な世界観から逸脱しており、こいつだけ浮いている印象を受ける。

ここは無視するのが良いだろう。

「人手が足りない」

……ち、俺の痛いところを的確に突く言葉だ。

「魔物に勝てない」

……イラっとする言葉を続ける奴だ。

「そんなアナタにお話が」
「仲間の斡旋なら間に合ってるぞ？」
香達がいるし、何より金しか見てねぇような連中を仲間にする気はない。
「仲間？　いえいえ、私が提供するのはそんな不便な代物ではありませんよ」
「ほう……じゃあ何だよ？」
ズイっとその男は俺に擦り寄ってきて声を出す。
「お気になります？」
「近寄るな気持ち悪い」
「ふふふ、あなたは私の好きな目をしていますね。良いでしょう。お教えします！」
胡散臭い奴の好きな目って事は……かなり鋭い目付きって事だろうな。
俺がそんな事を思っていると、男はシャウトしながらこう言った。
「奴隷ですよ！」
「奴隷？」
「ええ、奴隷です」

奴隷とは、人間でありながら所有の客体即ち所有物とされる者を言う。人間としての名誉、権利・自由を認められず、他人の所有物として取り扱われる人。所有者の全的支配に服し、労働を強制され、譲渡・売買の対象とされた。

確かウィキペディアにそんな記事が書いてあった覚えがある。

この世界は奴隷の販売もあるのか。

「なんで俺が奴隷を欲していると？」

「裏切らない人材」

……っ！　こいつは……!?

「奴隷には重度の呪いを施せるのですよ。主に逆らったら、それこそ命を代価にするような強力な呪いをね」

「ほう……」

中々面白い話をするじゃないか。

逆らったら死ぬ。下手に人を利用しようとか馬鹿な考えをしない人材とはまさしく俺が欲している物なのは確かだな。

俺には攻撃力が欠けている。だから仲間が欲しい。けど仲間は裏切るから金を掛

ける訳にもいかない。
だから仲間は増やせない。
だけど奴隷は裏切れない。裏切りは死を意味するから。
「どうです？」
「話を聞こうじゃないか」
「……無茶苦茶怪しいんですけど？」
おっと、香が帰って来たか。
「尚文さん、この人服装的にものすっっっっっごく怪しいんですけど？」
「言うな、俺も思ってる。だけどな……裏切らない戦力が手に入るのは良いことだと思わないか？」
「それは、そうですが……」
香が躊躇をしているのは日本から来たからだろうし、凛の仲間であるフォウルとアトラがなんちゃって奴隷だからだろう。
「……わかりました。ただし、私も着いていきます。粗悪な奴隷を押し付けられちゃ堪りませんからね」

「そういう訳だ、構わないか？」
「ええ、構いませんよ」
そう言って、奴隷商はニヤリと笑った。

裏路地を歩くことしばらく。
この国の闇も相当に深いようだ。
昼間だというのに日が当たらない道を進み、まるでサーカスのテントのような小屋が路地の一角に現れる。
「こちらですよ勇者様方」
「へいへい」
「……なんかサーカスのテントみたいな所ですね」
俺も思ったことをあっさりと言ったなこいつ……
「さて、ここで一応尋ねておくが、もしも騙したら……」
「巷で有名なバルーン解放でしょうね。そのドサクサに逃げるおつもりでしょう？」

「もうそんなに噂になっているんですか……」
ほう……そんな呼び名がつけられているのか。
まあ、たわけた連中に制裁を加えるのに便利な手段だからな。有名にもなるだろう。
香、頭を抱えても噂になっているんだからしょうがないと思うぞ。
「勇者を奴隷として欲しいと言うお客様はおりましたし、私も可能性の一つとして勇者様にお近付きしましたが、考えを改めましたよ。はい」
「……今、すんごく不吉な事を言いませんでしたか？」
「ん？」
「あなたは良いお客になる資質をお持ちだ。良い意味でも悪い意味でも」
「どういう意味だ？」
「さてね。どういう意味でしょう？」
「……もしや、誰かに頼まれた？　」
香はぼそりと何かを言ったが聞こえなかった。

あれから俺達は金貨15枚という大金を必要とする奴隷と奴隷紋の効果を見せられた後、安い奴隷を見せてもらうために歩いていた。
「ここが勇者様達に提供できる最低ラインの奴隷ですな」
そうして指差したのは三つの檻だった。
一つ目は片腕が変な方向に曲がっているウサギのような耳を生やした男。見た限りの年齢は20歳前後。
二つ目はガリガリにやせ細り、反抗的な目で見る犬耳を生やした10歳位の男の子。
三つ目は妙に殺気を放つ、目が逝っているリザードマンだ。ただ、なんかリザードマンにしては人に近い気がする。
「左から遺伝病のラビット種、反抗的なヌイ種、雑種のリザードマンです」
「耳からしてヌイ種はシベリアンハスキーでしょうか？」
……確かに、昔図鑑で見たシベリアンハスキーの耳だな。
「どれも問題を抱えている奴ばかりだな」
「ご指名のボーダーを満たせる範囲だと、ここが限界ですな。これより低くなると、

正直……」

「……死にかけだの、既に死んでるのばかりなんですね？」

香のうんざりとした問い掛けに首を縦に振る奴隷商。

……確かに、奥からなんとなく腐敗臭もしてきている。

あそこは目に入れると心が病みそうだな。

「ちなみに値段は？」

「左から銀貨25枚、30枚、40枚となっております」

「Lvはどれくらいですか？」

「5、1、8ですね」

……値段はラビット種、戦力的にはリザードマンか。

「……ヌイ種の子にしませんか？」

「……なんでだ？」

俺はレベルも値段も他の二人に劣るヌイ種を選ぶのかを香に聴く。

「ラビット種の人は他は大丈夫ですけど、片腕が使えないのでその分出来ないことがあります。リザードマンは言わずもがな、目が逝っているからですね。……

正直、何があるのかわからないという恐怖もあります」
　香は他二人を雇えない理由を言うと、今度はヌイ種を雇うメリットを言う。
「一方、ヌイ種の子は反抗的ですがラビット種の人と違って五体満足ですし……リザードマンの人と比べて逝ってないと思うんですよね。だから、この子を選ぶんです」
「……レベルが低いぞ」
「そこら辺は鍛え方次第でどうにでもなります。何より、私がこの子に同情しちゃったから……ですかね？」
　そう言って、照れる香を見ながら俺は熟考をする。
　……香の考察や話には一理ある。片腕が使えないのはその方向からの攻撃とかに対応できない可能性があると言うことだ。リザードマンの方は目からの考察も入っているが、心配なのは確かだ。
　……ふむ。
「決めた、ヌイ種を買おう」
「ええ、毎度ありがとうございます」

「……」

反抗的な目だが、香の話から誉められたのがわかるのか尻尾がピコピコと動いているのがわかる。

それから、元来た道を戻り、少し開けたサーカステント内の場所で奴隷商は人を呼び、インクの入った壷を持ってこさせる。

そして小皿にインクを移したかと思うと俺に向けて差し出す。

「さあ勇者様、少量の血をお分けください。そうすれば奴隷登録は終了し、この奴隷は勇者様の物です」

「なるほどね」

「ファンタジーでは定番のやり方ですね」

俺は作業用のナイフを自分の指に軽く突き立てる。

誰かに刃物を突きつけられると盾は反応するが自分の攻撃には意味が無いらしい。

そして戦闘での使用では無い場合。盾は反応しない。

血が滲むのを待ち、小皿にあるインクに数滴落とす。

奴隷商はインクを筆で吸い取り、男の子が羽織っていた布を部下に引き剥がさせて、胸に刻まれている奴隷の文様に塗りたくる。

「う、うあああああああああ!?」

「っ……！　大丈夫、大丈夫ですから……！」

悲鳴をあげる男の子を心配してか香が痛みにのたうち回る男の子の手を握る。

……あれは、信頼を得るための演技じゃないな。本心だ。

そのうち奴隷の文様は光り輝き、俺のステータス魔法にアイコンが点灯する。

『奴隷を獲得しました』

『使役による条件設定を開示します』

メニューにはズラーっと色々と条件が載っている。

俺はざっと目を通し、『寝込みに襲い掛かる』や、『主の命令を拒否する』などの違反をした場合、激痛で苦しむように設定する。

ついでに同行者設定というアイコンが奴隷項目以外の所で目に入ったのでチェックを入れる。

『奴隷Ａ』、名前が分からないからこう書かれている。

どうやら任意で条件を変更できるようだから、後で細かく指示するとしよう。
「これでこの奴隷は勇者様の物です。では料金を」
「ああ」
俺は奴隷商に銀貨31枚渡す。
「1枚、多いですよ？」
「この手続きに対する手数料だ。搾り取るつもりだったんだろう？」
「……よくお分かりで」
「……クズな商売をしているだけあってガメツイんですね」
香が奴隷商に殺意の篭った視線を向けるが、奴隷商は「おおっと、これは失礼いたしました」とおどけたように言う。
……これはガキの扱いを気を付けないと、俺もブッ飛ばされかねんな。
「ガキ、お前の名前はなんて言うんだ？」
「誰が教え……「教えてください、これから一緒に戦うんですから」……『キール』、俺の名前はキールだ」
男の子はそう言った。これは……キールの世話は香に任せるのもありか？

俺は香にちょっとした信頼の目を向けているキールを見ながらそう思った。

次回『最初の一歩』
お楽しみに

最初の一歩

遅れて本当に申し訳ありません！

「アンタ達……」
「……何も聞かないでください」
「親父、こいつに合う武器を寄越せ。予算は銀貨10枚だ」
私達がキールを連れて親父さんの店に来ると、親父さんが呆然とした様子で声を絞り出しました。
……まあ、奴隷を引き連れていたらこうもなりますよね。ウィンディアも尚文さんの事を心底から蔑んだような目で見ましたし。
「……はぁ。国が悪いのか、それともアンタ達が汚れちまったのか……まあ、いいや。銀貨10枚だったな？」
「国も悪いが、俺が汚れただけで香は汚れていない。それから在庫処分のマントと

服、まだ残ってるか？」
「……良いよ、オマケしてやる」
親父さんは嘆かわしいと呟きながら数本のナイフを持ってきます。
「銀貨10枚だと、この範囲だな」
グリップとかでも値段が変わるものなんですね……
キールは全部のナイフを数回ほど振るうと、手にしっくりきたのかその内の一本を尚文さんに差し出しました。
「……これで良い」
「ホラ、オマケのマントと服」
親父さんから服とマントを受け取った私はキールを試着室に押し込むと、今後どうするかを尚文さんに話しかけます。
「尚文さん、これからどうするんですか？」
「先ずはキールに魔物を刺させる。魔物を殺すのに慣れさせないと雇った意味がないからな」
「それもそうですね……それからどうするんですか？」

「そこからはキールを引き連れてレベル上げだな。そっから先はどうすっかな……」
私達が今後について話していると、着替え終えたキールが出てきました。
……やっぱり、小汚ない印象が強く出ちゃいますね。
「さて、キール。これはお前の武器だ。そして俺はお前に魔物を殺すことを強要するわけだ。分かるな？」
「……！」
……『魔物を殺す』の部分で耳を嬉しそうにピクピクと動かすのは何故でしょうか？
「じゃ、ナイフを渡すから……」
そう言って尚文さんはマントの下に噛ませたオレンジバルーンを見せて……
「これを刺して、割れ」
「わかった」
尚文さんの言葉が終わった瞬間にキールはオレンジバルーンを刺しました。
「やった、俺が魔物を、村のみんなの……仇を……！」
……魔物に大切な人を奪われたんでしょうか？

「……案外、良い買い物をしたのかもな」
ぼそりと尚文さんがそう呟きました。
「確かにそうかもしれませんが……」
なんか釈然としない感じがします。

「キール、ウィンディア！　左にグリーンバルーンが３体いるので任せます！」
「わかったぜ、姉ちゃん！」
「わかったわ！」
「リオン！　上から魔法をぶちかませ！」
『はーい！』
あれから二日後、今日も私達は草原に出てキールのレベリングを開始していました。
ウィンディアは最初こそキールを訝しげな目で見ていましたが、キールの元気っ子的な性格から（キールが多少の強引さはあれど）仲良くなったお陰で短時間で２人で連携が出来るレベルにまでなりました。

なお、キールの姉ちゃん呼びは昨日のお昼ご飯にお子さまランチまんまなお昼を食べさせてあげた時から始まりました。（尚文さんは兄ちゃん呼びです……最初こそ「ご主人様と呼べ」と言っておりましたが、不満そうな顔をされたので渋々許可した次第です）

「やった！　またレベルが上がった！」

「……尚文さんよりレベルの上がりが早くありませんか？」

「……言うな、自覚はしている」

尚文さんのレベルは現時点で10、キールのレベルは5です。レベルの差による経験値の差もあると思いますけどね。

因みに私のレベルは現時点で18、ウィンディアのレベルは9です。

ぐぅ～……

「「……あ」」

……キールとウィンディアのお腹がなったので午前中はこれまでですね。

「そういうわけでご飯にしましょうよ」

「なんでだよ……」

尚文さんが私の発言に呆れたような顔をしますが、私とリオンとウィンディアの期待したような顔に説得は無理だと判断したのか「やれやれ……」と言いながらお店から買い取った安物の料理道具で料理を始めました。

キールが「???」と私達の反応に疑問符を大量に浮かべましたが、すぐに判ると思いますよ？

「……旨い！　兄ちゃんのご飯、すごい旨い！」

「そうか……」

それから十数分後、キールは出来上がった尚文さんの料理を大絶賛していました。

本当に尚文さんの料理って美味しいんですよね。私もそれなりに出来るつもりでしたが、あまりの美味しさにｏｒｚの体勢のまま二、三時間程固まってしまいました。

味覚障害があるのになんで料理できるかと言うと……尚文さんの料理に対する勘と、調味料や食材を私が味わって分けるっていう役割分担をして、尚文さんは気分転換代わりに料理をしているんです。

「食い終わったらレベリングをしつつ城下町に行くぞ、午前中とその途中で得た素

材を売るからな」
「わかりました」
「はぐはぐ……わかった！」
「キール、口に食べ残し付いてるわよ」
そう言ってウィンディアがキールの頬っぺたについていた麦（の様なもの）を取ってあげました。
「（……なんか、ウィンディアがキールのお姉さんみたいですね）」
私はそんな様子を微笑ましく思いながらご飯を食べ続けました。

私達は城下町に着き、真っ直ぐ素材屋の前に行くと……子供が複数人でバルーン風船をボール状にしたような物で遊んでいるのが見えました。
「……」
キールはそれを見て物欲しそうな顔をしていました。
「……欲しいんですか？」
「……！」

私が聞くと、キールは顔を赤くしてそのまま歩いていってしまいました。……素直じゃないですねぇ。

「尚文さん、キールに買ってあげたいので買取り代から引いてもらっても良いですか？」

「別に良いぞ」

尚文さんはぶっきらぼうながらもボールを見て尻尾をフリフリと動かしているキールを見て即答しました。

「はい、キール」

「え……」

私がバルーンボール（私命名）を差し出すと、キールは目を見開いて私と尚文さん、ボールの間に目を行き来させます。

「……いらねぇのか？」

「う、ううん……ありが、とうな。兄ちゃん、姉ちゃん」

キールが私達に辿々しくお礼を言うと、私はキールの頭を撫で回します。

「どういたしまして、これからも困ったことや欲しいものがあったら言ってくださ

いね？」
「うん……あ、姉ちゃん！ ボール、投げてくんねぇ！」
「はいはい……それ！」
私がボールを投げると、キールはダッシュでそれを取りにいきました。
「……やっぱり、犬の亜人なだけありますね」
「まあ、ヌイ種って基本的にああなんだけどね」
私はウィンディアの言葉に苦笑いをしながらボールで遊ぶキールを微笑ましく見つめました。
……その後、ガキ大将みたいな男の子とその取り巻き達と大喧嘩をして泥んこになりながらも友情を築く事になるのですが、私はそれを知りませんでした。

「見事に泥んこですね……」
「ああ……キール、服脱いで体を拭け」
「うー……兄ちゃん、姉ちゃん。俺、汚くねぇよ……」
いやいや……そんな泥んこになって汚くないなんて言えるわけないでしょ

う。それに……

「それでベッドに寝たらベッドが汚くなりますよ。ほら、私が拭きますから」

「うー……姉ちゃんがそう言うなら……」

そう言ってキールが服を脱ぎ……え？

「……？　香、どう、し……た？」

「香、どうしたの……え？」

まさか……キールの性別って……私と同じ（女の子）？

「まぁ、こうなりますよねぇ……」

あの後、キレた尚文さんにキールは部屋から叩き出され私とウィンディアの部屋で何が何だかわからないような表情でベッドに座っていました。

「姉ちゃん……俺、なんで追い出されたんだ？　俺……盾の兄ちゃんになんかしちゃったのかなぁ……？」

私は捨てられた子犬のような目で説明を求めてくるキールに耐えきれず、尚文さんがキレた理由を暈しながら説明しました。

因みにキールが男の子だと奴隷商から説明されたのはキールの顔が中性的だった

のと……キールの両親が男だと教育したのが原因みたいです。
「……そっか。俺にも、原因があるんだ」
「うん、まぁそうなんですけど……」
私はしょんぼりとするキールを見て、頭を掻きます。さて……どうしましょうか……まあ、今は尚文さんの怒りが収まるのを待つしか……って、夜に私が説得するしかありませんよね。
「……尚文さん、起きてますか？」
夜、私が部屋の扉を開けて、尚文さんの名を呼ぶとそこには不貞寝をしている尚文さんがそこにいました。
「……不貞寝ですか？」
「……まあな」
「キールの事は、私達もわかってなかったんですから多目に見ましょうよ」
「……俺もさ、大人気ないとは思ったよ。だけどな、『あいつみたいに騙された！』って頭の中で考えちまってな」
あ～……まぁ、そうなるのもわかりますけどね……

「でも、許してあげましょうよ。キールも捨てられた子犬のような目で私を見るんですよ？」

「……頭も冷えたし、部屋にはいれてやるけどな」

それなら良かったです。

「キール……って、もう寝てる!?」

私はすーすーと寝ているキールに苦笑しながら抱き上げると、尚文さんのベッドに入れます。

「……なんで、俺のベッドなんだよ？」

「その方がキールも『許してくれたんだ』、って喜びそうですしね。私なりの気遣いです」

「まぁ、良いけどさ……」

私は尚文さんの部屋から出ようとして……キールに服の裾を掴まれているのがわかりました。

因みにもう片方の手は尚文さんの服の裾を握っています。

「……流石に私は不味いので、失礼します」

「……ああ。此処までこいつが信用してくれてるんだ。無下にするのも悪い……か」

私は、キールを起こさないように慎重に服の裾を剥がしながら尚文さんの言ったことに微笑みながら部屋を出ました。

部屋に戻ると、ウィンディアがベッドで寝ていました。

「ウィンディアもですか。まぁ、寝る子は育つって言いますし……」

私は苦笑いをしながらベッドに入ろうとして……

「……お父さん」

ウィンディアが少し、涙を流しながら呟いた言葉に少し考えるとウィンディアのいるベッドに座って添い寝をしました。

「ホームシック……ですかね」

一回目の波が終わったら里帰りをするのも考えないといけませんね。

私はウィンディアを慰めるように、頭をよしよしと撫でながら眠りに落ちました

……

次回『波に備えて～土下座～』
お楽しみに

波に備えて～土下座～

波に備えるために頑張ります。

ベキン！

「あ!?」

ナイフが折れたのに動揺したキールが態勢を崩したのを見て、卵のような魔物『エッググ』が飛び掛かり……私の投擲したナイフを受けて消し飛びました。

「姉ちゃん、兄ちゃん……ごめん」

「別にいい。どんな物にも寿命があるし……ろくに研磨もしていなかったからな」

キールがしょんぼりとした顔で私達に謝りますが……尚文さんの言ったとおり、研磨等の整備をしていなかった事や生き物系の魔物を倒した際の血もろくに拭き取りませんでしたからね。寿命が減るのも早かったのでしょうね。

「はぁ……今回はこれまでだ。城下町に帰って別のナイフを買うぞ」

「……うん、わかった！」

私達は帰り道で遭遇した魔物を蹴散らしながら城下町に帰還しました。

因みに現在の尚文さんのレベルは14、キールのレベルも14、私のレベルは20、ウィンディアのレベルは14です。

「さて……と、これからどうするんですか？」

私は道中で得た素材や、採取した薬草から作成した薬を売って得た銀貨70枚と節約に、節約を重ねた結果の出立金の残りである銀貨１００枚を入れた袋を見ながら尚文さんに尋ねます。

「そうだな……先ずはキールの新しいナイフだな」

「はぐはぐ……もふちゃん、あふちゃんあにあなしてんだ？」

「口に食べ物を入れながら話さないの！」

キールがお行儀の悪いことをやって、それにウィンディアが怒りながらキールの口に付いている食べ滓を拭きます。

……最早、私達の恒例行事となりそうですね。

「それじゃあ、行きますか」

「だな」
そう言って私達は歩こうとして……
ぐうう……
「香、お腹すいた」
「兄ちゃん、姉ちゃん……腹減った！」
「またですか!?」
「これで四回目だぞ!?」
成長期なんでしょうけど、私達のエンゲル係数はこれからどうなるんですか!?
私達は二人にご飯を買いながらどうしたもんかと頭を抱えました。

「と言うわけで、親父。銀貨１３０枚の範囲でキールに良い武器と防具を寄越せ。作業用のナイフも込みでな」
尚文さんの発言に親父さんが額に手を当てて唸ります。
「まあ……安物を渡した俺も俺だが、ちゃんと手入れをしろよ」
「すいません……ウィンディアのナイフみたいにブラッドコーティング前提で扱っ

ていました」
　これは私達全員のミスですね。これからは反省をする必要がありそうです。
「しかし……一週間くらいしかたってないのに随分血色が良くなったなぁ。少しふっくらしてきたんじゃないのか？」
「おう！」
「……ここ最近、矢鱈と腹が減るのも原因かもな」
　まあ、食べまくると太るのも早いでしょうしね。
「お！　良い笑顔だな！」
　……このまま値切り役に据えるのもありですね。
「あ、じゃあ武器をメインにお願いします。私達には基本的に必要ないので……」
　なんせ尚文さんは今やこの近辺の敵は群れのど真ん中にいてもノーダメですし、私も攻撃に対する見切りが出来るようになりましたしね。
「「……」」
　二人が不満そうに見ていますが、私と尚文さんは露骨に無視をします。
「まあ、これも何かの縁だ。少しだけオマケしてやる」

「高いなら値切るまでだ」
「アンタらには原価ギリギリにしてるよ。下手に吊り上げたらバルーンを押し付けられるんだろ？」
……完全に悪評が出回ってますね。まあ、尚文さんが意図的に流したのもあるでしょうけど。
「理不尽には理不尽で返しているだけだ」
「いやまあ、それはそうなんですけど……」
だからって魔物を押し付けるのはやり過ぎだと思うんですけど？
「……俺は困らんが、対策を取っても別の手段に訴えそうだよな。アンタは」
「良く分かってるじゃないか」
「まあ、見りゃわかりますよね」
実際、私達が寝ている間に案を考えているっぽいですしね。
「嬢ちゃんの言うとおりだ。勇者の中で一番商魂たくましいからな、アンタ」
「褒め言葉として受け取っておく」
若干皮肉も混じってると思いますけどね。

私達がそんな話をしていると……

「店主さん、この間頼んだ……ごめんなさいいい

「ああ、『元康』だったら女の子と買い物。私は『マルティナ』さんの依頼をこなした際に手に入れた剣を店主さんに研いでてもらっててさ」

……ん？

「何故、呼び捨てなんですか？」

「ん？　ああ、元康がさ『理奈ちゃんの口調で『君』付けはなんかこそば痒い』って言ってたからね」

あ、そうなんですか。

「そう言えば理奈さん。効率の良い狩場を知りませんか？」

「え？　いきなりどうしたの？」

「いえ、私達は王様や王女様の依頼を受けていないからレベル上げも難しくて……効率の良い狩場があれば良いんですけど……」

「お前も意外と図々しいな……」

自覚はありますよ。

「う～ん……ああ、狩場は知らないけど王都近くの森で見たことのない昆虫型のモンスターが現れたんだって。そのモンスターなら経験値も良いんじゃないかな？」

ふむ……未確認のモンスター、ですか。
「わかりました、ありがとうございます」
「ううん、お役にたてたなら光栄よ」
そう言って剣のレクチャーが終わったキールとウィンディアを連れだって私達は言われた森を目指すために歩き出しました。

「それにしても……見たことのない昆虫型ってどんなモンスターでしょうか？」
「蟻型かもな」
「複数の昆虫を混ぜた合成昆虫（キメラ）かも知れませんよ？」
あれから一時間くらいたった後、私達は言われた森を探索していました。
「結構広いですねぇ～……一体、何処にいるんでしょうか？」
「兄ちゃん、姉ちゃん！何かスゴいの見つけた！」
私達は顔を見合わせるとキールの声のする方向に向かって……ある程度広い所に出ると、そこにはデカイ蜘蛛の巣が張られていました。
「蜘蛛の巣……って事は見たことのないモンスターって蜘蛛か？」

「!? 尚文さん、上から来ます！」
「ち、いきなりか！『エアストシールド』！」
尚文さんが前に覚えた空間に盾を作るスキルを使うのと同時に上から丸太が何本も降り注いで来ました。
「大歓迎だな、おい！」
「多分、アイツです！」
丸太が降ってきた所をよーく見ると、ド派手な柄の蜘蛛が木々の木の葉の隙間から見えました。
「見たことのないモンスターってのはアイツか！」
「また、ド派手な蜘蛛ですねぇ……」
名前は『@#%&*/+-=』……あり？
「……思いっきり文字化けしてて読めません!?」
「ド派手な柄だし『ピエロ蜘蛛』で良いだろ！ 来るぞ！」
ピエロ蜘蛛はお尻から出した糸でバンジージャンプのごとく私達に飛び掛かります。

「エアストスロー！」
私がエアストスローを使うとピエロ蜘蛛は器用に足でナイフを弾き飛ばし、回避した私達を嘲笑うように巣に戻って行きます。
「ち！　先ずは巣をどうにかしねえとじり貧だぞ、これ！」
「どうにかすると言っても私達は全員魔法が使えませんし……あぶな!?」
尚文さんの言葉に私は言い返しますが、ピエロ蜘蛛が投げてきた白い糸の塊を慌てて避けます。
「……白い糸の塊は避けてください！　あれくっついて来るようです！」
「動きを止めてボコる為の飛び道具まであんのかよ!?」
私は木に引っ付いた塊を見て警告すると、尚文さんがその性能に目を剥いていると、ピエロ蜘蛛が飛び掛かってきて……
「ぐあ……!?」
「尚文さ……きゃあ!?」
尚文さんが突進を食らって吹っ飛び、私は前足で殴り飛ばされます。
……っ！　尚文さんがダメージを受けているって事は現時点の尚文さんの防

御力を越えているって事……このままじゃあ……！

ピエロ蜘蛛は歯噛みをしている私を尻目に巣に戻り……突如、尻の糸が切れて墜落しました。

「「……は？」」

「兄ちゃん、姉ちゃん！」

「香、尚文！」

木の上を見上げると、そこには巣の上に乗ったキールとウィンディアが私達に向かって手を振っていました。

此処に来てから余り姿を見ていないと思ったら……はぁ、まあ助かりましたね。

「やるぞ！　叩きのめす！」

「はい！『ラッシュエッジ』！」

私達は地面に落ちた衝撃でもがくピエロ蜘蛛に飛びかかると、尚文さんは拳で私はスキルでピエロ蜘蛛を滅多打ちにします。

「攻撃、来るぞ！　エアストシールド！」

「はい！」

ピエロ蜘蛛はやっとこさ起き上がると、前足で私達を追い払うような動きをすると糸を発射して慌てて巣に戻ろうとしますが……

「「せーの……！」」

「だぁぁぁぁぁぁ！」

「はぁぁぁぁぁぁ！」

キールとウィンディアに糸を斬られて再び墜落しました。

「追撃、行くぞ！」

「はい！『インパクトエッジ』、『ミラージュエッジ』、ラッシュエッジ！」

墜落したピエロ蜘蛛にスキルの連打を叩き込むと、ピエロ蜘蛛はもがくような動きで私から逃げると糸を出して巣に逃げ戻……

「丸太を……食らえ！」

ろうとしたところをキールが切り落とした丸太が尻に直撃し、そのまま墜落しました。

これは……ハメ技の段階でしょうか？

四回目の帰宅。キールが切り落とした変な塊が直撃し、落下。その後袋叩き。
五回目の帰宅。巣に戻った直後にウィンディアの蹴りを食らい、バランスを崩して落下。その後私の投擲したナイフを連打で食らう。
六回目の帰宅。尚文さんがエアストシールドを糸と天井の間に置いたことで糸が斬れ……落下。その後二度目の袋叩き。
七回目の帰宅。私が投げたナイフにより糸が斬れ……落下。その後三度目の袋叩き。
「……悲惨、ですね」
「……ああ。5回も叩き落とされりゃこうもなる、か」
5回も落下し、袋叩きにされたことでピエロ蜘蛛はもう満身創痍でした。足が何本か変な方向に折れ曲がり、体は若干へこみ、体液は全身から滲み出ていました。
「さてと……止めです！『ピアシングダガー』！」
私は防御を無視する短剣を投擲するスキルを使うと、それはピエロ蜘蛛の眉間に突き刺さりピエロ蜘蛛は悲鳴をあげながら倒れ伏しました。
「やれやれ……やっとこさ倒せたか……」

「はい……でも、これでわかりましたね」
「……ああ」
「「装備をけちっていたら痛い目にあう！」」
私達はけちっていた私達用の防具を買う事を決めました。

「そんな訳でこのお金で最適な防具を見繕ってくれませんか？」
１週間後、私は１週間で稼いだお金を親父さんに見せながら尋ねました。
「う～ん……その料金だとくさりかたびらを２着……は盾のアンちゃんが嫌そうな顔をしているから却下だな。後は鉄の鎧だが……これには『エアウェイク加工』が施されていないからなぁ……」
エアウェイク加工……？
「なんですかその加工？」
「エアウェイク加工は装備者の魔力を吸って重量を軽くする加工だ。効果は優秀だぞ？」
「なるほどな」

つまりエアウェイク加工が施されていない鎧は格好の的って事ですか。
「後は……素材を持って来ればオーダーメイドをしてやっても良いが……」
「良いな、そういうのは好きだぞ」
「私もです」
「アンちゃん達は好きそうな顔しているからなぁ……そうだなぁ」
親父さんは必要な材料名と完成予想図の書かれた羊皮紙を広げます。
え～と、装備の名前は……
「『蛮族の鎧』、『蛮族の衣装』……ですか」
「……読めない」
あ、尚文さんはこの世界の文字をまだ学んでいませんでしたね。
「どういう性能の装備なんですか？」
「蛮族の鎧の性能はくさりかたびらととんとん、蛮族の衣装の性能は防御力がちょい低いが防御範囲が広くて寒さに強い」
寒さに強いって事は標高が高い場所でも戦えるって事ですね。これは便利です。
「蛮族……嫌な予感がするが、背に腹は変えられんか。必要な素材はなんだ？」

「そうだなぁ……そこの工房で安物の銅と鉄を購入、後はウサピルとヤマアラの皮、そしてピキュピキュの羽を持って来い」
「皮と羽はあるわよ」
そう言ってウィンディアがお布団を作るために取っておいた皮と羽をバッグから取り出します。
う～ん……お布団は何時でも作れますから、今は装備優先ですね。
「追加オプションに骨をプラスすれば魔法効果も付くんだが、これは後からでも出来るから材料が集まったらまた来い」
「助かる。じゃあ鉄と銅を買って来るとするか」
「俺も行く！」
「そうですね、行きましょう」
「あたしも行くわ」
そう言って、私達は店を出て……
「尚文、すまなかった！」
「凛!?」

「凛さん、頭をあげてください！」
「……またかよ」
凛さんに土下座をされました。

次回『龍刻の砂時計～理由～』
お楽しみに

龍刻の砂時計～理由～

話が長くならない……

「親父さん、材料を持ってきましたよ」
私はそう言いながらドアを開けます。
凛さんの土下座を止めさせた後、私達は蛮族の鎧と蛮族の衣装を完成させる為に銅と鉄を買い……その際に新たに判明した尚文さんの後遺症に頭を抱える羽目に為りました。
「あっさりと材料が集まったな」
「そうですね」
「アンちゃん達が頑張ったお陰だろ」
「まあな。ただ、それよりも親父の知り合いにロリコンとショタコンが多いことに付いて二、三個指摘したいのだが」

「尚文さん、尚文さん。その事については後回しに……」
「ロリコンとショタコン？　アンタ、何を言っているんだ？」
親父さん！　今は聴かないでください！
「ロリコンとショタコンの意味が伝わっていないのか？　盾には翻訳機能があるはずだが」
「いや、少女趣味と幼児趣味の知り合いは居ないと思ったが……」
「そりゃそうでしょうねぇ……」
私は頭を抱えながら溜め息を吐きます。
「いや、まあ……ウィンディアとキールを可愛がっていたからそう思ったんだろうが……本当にわかんないのか？」
「は？　何がだ……？」
銅と鉄を一緒に持ってくれた凛さんがおそるおそる尚文さんに聞きますが……こりゃ完全に認識障害を起こしてますね……
現在のキールは私と同年代の背丈になった事に加えて元からのボーイッシュな見た目も相まってそれなりの年齢の女性から男性と勘違いされてひそひそ話をされて

ます。
　現在のウィンディアは私と同年代の美少女になった事で男性に声をかけられるのは日常茶飯事です。
　それを見た尚文さんは「この国にはショタコンとロリコンしかいないのか……まあ、キールは男じゃなくて女だからどっち道ロリコンばっかりか」と呆れたような顔で言っていたので嫌な予感はしてたんですが……的中してほしくなかったです。
　因みに現在のキールとウィンディアのレベルはキールは27、ウィンディアは26です。
　……尚文さんのレベルは22、私は25です。
「そ、その話は置いといて……親父さん、装備の代金はいくらでしょうか？」
「ああ、それは銅と鉄……それから拡張オプション込みで銀貨２００枚だ」
「骨……だったか？　それを持ってくれば良いんだな？」
「それって鎧と衣装の両方の代金の合計ですか？」
「ああ、その代金込みでその値段だ。これ以上は安くできねえよ」
　それもそうですね。親父さんにも生活はありますし。

「そう言えば尚文に香、『龍刻の砂時計』は見たか？」
「……なんですか、それ？」
「なんだそりゃ？」
「……やはり知らないか」
凛さんが溜め息を吐くと、龍刻の砂時計について説明してくれました。
「龍刻の砂時計と言うのは『波』が発生するまでの猶予を記した道具だ……外見はデカイ砂時計で、触れると波までの残り時間が表示される。それから時間になると波の発生した地点に飛ばされる機能がある」
凛さんの言葉に尚文さんが不愉快そうな顔に為りました。
「あんの屑王が、やっぱり隠し事がありやがったな……！」
「アンちゃん達、装備は明日できるから龍刻の砂時計に行った方が良いんじゃねえか？」
「親父さん、ありがとうございます！」
「とっとと行くぞ」
「ああ、龍刻の砂時計がある場所は中央の教会の中だ！」

私は情報をくれた凛さんに手をあげつつ、教会に向かって走り出しました。

「はぁ、何を考えているんだあの王様は……」

武器屋から出た私は溜め息を吐きながら腕を組む。

……本当にあの王様にはわからないことが多い。尚文に対する情報の隠蔽などの極端な冷遇に亜人の差別、更には教会との癒着など国を治める人間として恥ずかしいとしか言えない事を何故するのか。

「そう言えばフォウル、私が尚文に土下座する前になにか言いたそうだったが……どうしたんだ？」

「ああ、アトラが気になることを言っていたんだ」

「気になること？」

私がフォウルの話を聞くと、それは確かにとても気になることだった。

「王様の雰囲気がフォウルに似ていた……か」

何でも王様が入ってきた時に雰囲気がフォウルに似ていたのでフォウルの名を呼び掛けてみたら王様だったので、それで今度は王様の名を呼んだらフォウルだった

らしい。

「(だとしたらフォウルとアトラの母親は……いや、まさかな)」

私は心の中で考えていたことを頭を降って追い出す。その隣でフォウルは難しそうな顔で考え事をしていた。

「フォウル、どうしたんだ難しそうな顔で？」

「……いや、考え事だ」

考え事……か。まあ、私も困り事は王様の事以外に樹の事もあるんだけどな……

「本当にどうしてあんな独善気味な正義感を身に付けたんだ……？　しかもその後のフォローを考えていなかったし……」

行く先々で悪とされた他者の話を聞かずに一方的に「正義の断罪です」なんて言って倒そうとするし、その正義をなした後の事を全く考えてないしなぁ……

2日前に立ち寄った食料不足により革命が起きて内乱状態になっていた国を助けた時もそもそもの原因(食料不足)を何一つフォローをしようとせずに帰ろうとしたために私が慌てて止めてこの国からの食料品の提供などの条約を決めさせたからなぁ……

正義感を持つのは良い。それは人間として好感が持てるし、なにより他者を助けることで言い方は悪いが自分を誉めてもらえる事で承認欲求等を満たせるからだ。

ただ、それはその行動のフォロー等を考えていた場合だ。樹の行動は後先を考えていない上に、一方の話しか聞いていないからどうしてそうなったのかが解らないために騒動が更に悪化したり、しなくてもいい苦労をする羽目になるんだ。

「……強力な力を手に入れたのと、やはり勇者の供か」

この世界を救うのに必要な四聖武器は兎も角、あいつらは自分に都合が良い情報しか仕入れない上に樹を囃し立てる為に樹はそれが正しいと勘違いをしてしまうのだ。

……依頼の報酬もちょろまかそうとしてたしな。私が現場を抑えた事でばれた上に、樹に若干の不信感を持たれた事で出来なくなったけどな。

「樹の行き過ぎた正義感を抱く切っ掛けになった事を知らないとな……」

「僕がどうかしたんですか？」

「うわぁ!?」

「うお!?」

何時の間にか後ろにいた樹の声に驚いた私は思わずフォウルに抱きついてしまう。

……最近、こういうことがあった時にフォウルの近くに寄ることが多くなった気がする。

「い、樹か……すまない、急に声をかけられたから驚いてしまった」

「いえ、王様に報告が終わったので凛さんと合流しようと思って。ところで何か僕について悩んでいたようですが……」

……ある意味では好機……だな。

「樹、お前はどうして『正義』を示そうとするんだ？」

私がそう言うと、樹は少し考え込んだ後でこう言った。

「……この話は姉さんの過去と関係がある上に、僕も積極的に思い出したくないので姉さんには内密でお願いします」

「……わかった」

私が頷くと、樹は咳払いをした後で話始めた。

「僕が『正義』を為したいと思った理由は……端的に言うと姉さんが虐められてい

たからなんですよね」

私は樹の言ったことで理解した。

「（樹が過剰な正義を示そうとしたときに理奈が強く出られない理由はそれか！）そうか……理奈の性格から考えて虐める理由なんてないように思えるんだが？」

「ええ、弟という身内目線からですけど……姉さんは優しいし、気配り上手で誰からも好かれる性格なので虐められる要素は殆どなかったんですよ。……高校のクラスで良くある好きな男子が姉さんに惚れてるって言う理由がなければ」

「よりにもよって虐めた相手は女子か……」

女子の虐めって男子の虐めに比べて陰湿だからな……詩乃が中高と受け続けた虐めを思うと今でも腸が煮えくり返る。

「虐めは本当に苛烈でした。机の上に落書きをされるのはまだ序の口で靴の中に画鋲を入れたり、トイレの最中に上から水を放り込まれたり、階段から突き落とそうとしたり挙げ句の果てに異能力の的にしたり……」

……樹の世界では異能力が一般的にあるのか。

「虐めの相手は所謂上流階級の女子で教師は見て見ぬふり……しかも父さんや母さ

んに騒ぎ立てさせないように姉さんを脅すおまけ付きでした」

……本当に腹の立つ奴だな、そいつは。

「姉さんは父さん達を心配させないように気丈に振る舞ってましたけど、心は折れる寸前でした。でも……そんな時に彼女は、僕の初恋の人は姉さんを助けてくれたんです」

「……確か、神城早月だったか？」

「はい。彼女は学校帰りの時にボロボロだった姉さんとそれを支える僕を見て、それで話を聞いてくれたんです。そして、姉さんに対する虐めの状況や証拠をネットやマスコミを通じて暴露してくれたんです」

「それは……凄いな」

それだけの事をする際には相手に知られないように根回しや根回しを終えた後に一気に決行するタイミングを測らなければならない。つまり、彼女はそれらの事を出来る計画を立案できる頭脳と実行するための権力があったわけだ。

「はい、だから僕は……僕にとっての正義の味方である彼女に相応しい人間になって彼女の側に立ちたかったんです。……結果は、ふられちゃったんですけどね」

……神城が樹をふった理由は、わかるような気がするな。樹は正義を『勧善懲悪』として考えている。此方に正義があるように、悪とされた側にも向こうなりの『正義』があるのだ。それをわからないようでは企業の会長の夫としてはやっていけないだろう。

まあ、そこら辺の事は年を経るなかで学ばせようともしていたんだろうが……

「だから僕は、この世界で正義の味方になって彼女に見てほしいんです。正義の味方になった僕を」

……今でも好きなんだな、神城の事が。しょうがない、城での話の時も思ったが樹が本当の意味で正義の味方になる手助けをしてやるか。

「そうか……なら、私もお前が正義の味方になる手伝いをするよ。樹が神城と一緒になれるようにな」

「ありがとうございます」

樹が頭を下げる。さてと……手始めに戦闘で手を抜く悪癖を矯正しないとな……

「てんめぇ……！　ふざけんな！」

私達は龍刻の砂時計がある教会の前で文香の怒りの声を聞いて樹と顔を見合わせる。

「今のは、文香の声だよな？」

「ええ、何かあったのでしょうか？」

「行くか」

「ええ」

私達は頷くと、教会に向かって走り出した……

次回『龍刻の砂時計～権力者～』

お楽しみに

龍刻の砂時計～権力者～

遅れてしまい申し訳ありません！

尚兄が追い出されてからちょうど１ヶ月。そろそろ『波』の時期だと言うことで、錬達と一緒に龍刻の砂時計のところまでやって来た。

理由？　錬の仲間やメルティ……冒険者としての名前は『メルリナ・スフィア』、愛称はあたしが着けた『メル』って名前だ。の『クラスアップ』をするためだ。

クラスアップって言うのは現状のレベルキャップである40からレベルを99まであげられるようにする儀式らしい。

……たぶんだけど、レベルを99以上にあげる方法があるな。クローは『あー……言いてぇ……レベルを99以上にあげられる方法を言いてぇ……でも、それだとビビり竜帝（ガエリオン）の出番がなくなるし……』と言うし、ヴァレリアも『ふん、あの連中はとっくの昔にそんなもん（レベル99）を超えているぞ。まあ、知識にないので我も方法は知らん

のだが……』って、言ってたからな。

……そう言えば、この１ヶ月の間に仲間も二人程増えた。

そいつは「文香～！何考え事をしてんの？」ぼふぇ!?

「く、『クーフィリア』……！いきなり背中をどつくんじゃねえよ……」

「うむ。今のはクーフィリアが悪いな」

あたしが頭に猫耳を生やした女に突っ込むと、頭がまんま狼の男も呆れたように突っ込む。

猫耳の女の名前は『銀虎（ジルバティーゲル）』クーフィリア、狼頭の男の名前は『風薙ぎの牙』アルシオだ。

錬の仲間やメルは猫と狼の亜人族と思っているが、こいつらの本来の種族は『ミッドガルド』っていう『異世界』に住んでいる『リンクス』と『シリウス』という種族だ。

因みにクーフィリアがリンクス、アルシオがシリウスだ。

二人とも万色学園がミッドガルドに転移して、『ノース・アカデミー分校』と混ざりあった『漂流学園（ひょうりゅうがくえん）』の頃に知り合いになり共に巻き起こった騒動を解決した

仲だ。

……まあ、クーフィリアは姉の『クレメンス』のクローンが巻き起こした騒動を解決した時にしれっと忍び込んでいて（曰く、「森の外に出たかった！」とのこと）、アルシオはシリウスの間で巻き起こった騒動を解決した折りにあたしらに恩返しをするためっていう名目で乗ってきたんだけどな。

まあ、あたしが合同文化祭の準備で出向いていた『物部学園（ものべがくえん）』での第二次漂流学園事件にその最中に始まってしまった『神々の黄昏（大ラグナロク）』でもミッドガルドで知り合ったメンバーとかと一緒に参加したんだけどな……って、今はそんな事はどうでも良いんだよ。

問題は……あたしら全員の『神の欠片（シャード）』がうんともすんとも言わねえ事なんだよなぁ……これが起動していれば馴れない爪での戦闘なんてせずに済むし、人間を殺さなくてすんだのになぁ……

いや、爪での戦闘しか出来ないからあたしのシャードは反応しないのか？

「あれ？　文香じゃないですか？　どうかしたんですか？」

あたしがあたしのシャードを弄びながら悩んでいると、尚兄と尚兄と行動を共に

している香がウィンディアや街であった際に紹介してもらったキールと一緒にやって来た。
「ああ、錬やあたしの仲間をクラスアップさせる為に来たんだ。尚兄と香は？」
「私達は龍刻の砂時計に登録をしに来たんです。このままだと思いっきり出遅れそうなので」
「また俺らに隠し事を……！」
あー、そういや龍刻の砂時計の効果って波の残り時間を知るだけじゃなくて波の発生した地点まで連れていってくれるんだっけ？
「尚文、久しぶり～！」
「……誰だ、てめぇ？」
「え～!? 漂流学園や「余計な事を喋るんじゃねえ」もがもが!?」
「素の表情で私と話していた態勢のまま、口を塞いだー!?」
あたしは余計な事を喋ろうとしたクーフィリアの口を塞ぐと、尚兄は怪訝そうな顔になり香が目を剥いて驚いた。
「（お前な……！ 尚兄は『探究者（クエスター）』でも『永遠神剣（えいえんしんけん）』の担い手（マスター）でもねぇからどっち

も忘れてるって言っただろうが……！』）」

「（え～!? あんなに一緒に食べたのに……）」

因みにクーフィリアは尚兄に惚れている。理由としては尚兄のだしたご飯が美味かったのと……クレメンスのクローンの問題で落ち込んでいたこいつを尚兄が励ましたからだ。

「……ん？『漂流』？……文香、万色学園や物部学園って一時期空を浮いてなかったか？」

「え!? あはははは！ なーに言ってるんだよ尚兄！ 学校が空を浮かぶわけないだろう!?」

あっぶねぇ!? どれも矢鱈と死にかける事が多かったから（実際物部学園の時には１回死んだし……）尚兄が思い出すと元の世界に戻ったら確実に説教+クエスターを止めろって説得が来そうなんだよなぁ……

「尚文さん、悩んでいる暇があったら早く砂時計の登録を……」

「許可しないわよ？」

「しま、しょう……って、なんであんたが此処にいるんですか!?」

「そんなの私が教王の娘だからに決まってるでしょう？」
　あたしが声に向かって振り向くと……そこには、あたしが龍刻の砂時計を管理する神殿に入らなかった最大の原因である『フレイア＝Ｔ＝バルマス』が尚兄や香を見下すように立っていた。
「……おい、許可しないってどういう意味だ？」
「言葉通りの意味よ。犯罪者である盾の勇者……いいえ、盾の悪魔であるとその仲間であるあんた達に龍刻の砂時計を使わせるわけないでしょう？　壊されたら大変ですもの」
「てめぇ……！」
「それは可笑しくないですか!?　勇者が波に行けないなら召喚する意味が……」
「はぁ？　言ったでしょ、盾の悪魔って！　三勇教（あたし達）の敵である盾の悪魔とその仲間である投擲具の偽勇者に活躍の機会を与えるわけないでしょう？」
「なんだと!?」
「尚文さん、急いでこの国を出ましょう。尚文さんが宗教上の敵なら急がないと暗殺者が差し向けられるかもしれません！」

「ああ、それも許可しないわよ？」
……あんだと？
「だって、盾の悪魔が勇者様達のあること無いことを各国に吹き込むかも知れないでしょ？　だったらその前にこの国で封殺した方が良いじゃない！」
この女……！　尚兄と香を死ぬまでなぶり殺しにする気か……！
「てんめぇ……！　ふざけんな！」
「文香、よせ！」
「文香、ダメです！」
「文香、ダメ！」
「よせ！」
「止めんナ！　今、ココでこいツ、ヲおおおおおおおおお！」
あタしは尚兄達の制止を振り切っテ、ラースクローデコノクソビッチヲ……
「止めなさい、文香。（お願い）……わかったわ。『力の根源を司り、祈りを捧げる私が綴る。怒れる彼の武具を封じ、彼の者の怒りを抑えよ』……『封鎖七罪』、『封怒』」

殺そうとする前に、ラースクローが初期装備の爪になりあたしの中の底知れない怒りがいきなり弱まった。
「な、なんだ……？」
「なんの騒ぎ……ね、ねえ……じゃなくて、『マルティ』王女!?」
「今のは、一体……？」
「……まるで、和風の話に出てくる陰陽師みたいな魔法だったな今のは」
『つーか、マルティってこんな主人公みたいな真似って出来たっけ？』
あたしが神殿から出てきたメルティの声に振り向くと、そこにはお札のような物を携えたメルティの姉である『マルティ・S・メルロマルク』と凛と……弓の偽善野郎がそこに立っていた。
「全く……お父様と教王が盾の勇者様と投擲具の勇者様の龍刻の砂時計の使用を制限していると聞いて、慌てて来てみれば……予想通りで頭を抱えそうになったわ」
「ぐ……」
「まさか、本当に怒りに任せて殺そうとするとは……」
「ブラコンとはいえ、やりすぎですよ」

マルティが嘆かわしそうに溜め息を吐くと、あたしは目を反らしマルティから予想を聞いていたのか偽善野郎と凛があきれたような視線で見ていた。
「……マルティ、なんの用？」
「ああ、お母様に龍刻の砂時計の使用の許可を取り付けて来たわ。お父様にも今夜話すつもりよ」
「んな!?　なんのつもりよ！　盾の悪魔に砂時計を使わせるなんて……」
「黙りなさい、お父様を抱き込んで勇者様達を差別しようだなんてあなた達が良くても私が許さないわ」
「～～～

「ありがとうございます。尚文さん、いきましょう」
マルティが書状を渡しながらそう言うと、尚兄は不信感を露にした台詞を言いながら、香はそれをフォローしながら龍刻の砂時計に向けて歩きだした。
「……」
「……僕たちもいきましょうか」
「そう、だな。行こうか」
あたしが気まずそうに黙っていると、偽善野郎と凛も仲間を連れてクラスアップしに行った。
「……はぁ、やっちまった」
なーんか、爪をつけていると物凄い怒りに支配されちまうんだよなぁ……
「安心しなさい、文香。さっきのは１ヶ月位ならあの武器とその底なし沼みたいな怒りを封じ込められるから」
「……サンキュ」
あたしがマルティに礼を言うと、マルティは意地悪そうに微笑みながら
「まあ、メルティが許すとは言ってないけど」

「ふーみーかー……？ちょっと、お話をしようかなぁ……？」
「……これ、何時間コースだ？」
そう言ったので振り向くと、そこにはニッコリ笑顔のメルティがいたのであたしは覚悟を決めて道の端に正座をしたのであった。
結論、今回のお説教は三時間コースだった。

「あー！つっかれた！」
マルティはさっきまでとは『別人のような口調』で自室のベッドに飛び込むと溜め息を吐きながら、『独り言』を呟き始める。
「マルティ、本当にこれから先って大丈夫なのかなぁ……なんか、自信無くなってきた」
『私を変えておきながら良くもまぁそういうことを言えるわね、『久遠』』
「そりゃま、そうだけどさぁ……今日の展開を見てると私が知ってる『盾の勇者の成り上がり』と全然違ってて……」
『あれはｗｅｂ版と書籍版……だったかしら？で内容が全然違うんでしょう？』

「それでも大筋は同じなの。ここまで序盤の展開が違うのはないもん」
『そりゃ序盤の敵である私が違えばそうなんでしょうね……』
マルティ……否、久遠と呼ばれた少女はこの体の本来の持ち主にブーたれながらも、その目に陰りはない。
「でも、さ……やっぱり、変えたいよ。王様が『クズ』でマルティが『ビッチ』なんて呼ばれる未来をさ」
『……私がビッチなんて呼ばれる未来はこなさそうだけどね』
「それは言わない約束だよぉ！」
少女は笑うと、身体を持ち主に返しながらこう言った。
「それに、王様を変えるための鍵はもう見つけたからね』
『叔母様の忘れ形見ね？」
『そ、特にアトラね』
「そうなの？」
『うん、原作でも正気に戻る最後のピースだったしね』
「そうなの……では、行きましょうか」

『わかった』
マルティはそう言うと、ベッドから降りて彼女と久遠が組織した私設騎士団の詰所に向かって歩きだした。

次回『波～村防衛戦～』
お楽しみに！

波～村防衛戦～

最初の波、勃発です。

「う～ん……この溢れる山賊臭……」
「なんつーか、世紀末の雑魚敵が着てそうな鎧だよなこれ……」
「格好いいぜ、兄ちゃん！　姉ちゃん！」
「そうね、香も盾の勇者様も格好良いじゃない」
「二人とも良く似合ってるぜ、盗賊のコンビみたいで」
「俺は一応勇者なんだが……」
「私もなんですけど……」
龍刻の砂時計に登録した翌日。私達は親父さんが頑張って1日で作ってくれた蛮族の鎧と蛮族の衣装を受け取ったのですが……
一言で言うなら蛮族の衣装は『女山賊（それもエロゲーの）』が身に付けそうな

扇情さと機動力を兼ね揃えたような衣装で蛮族の鎧は首周りにファーが付いた『世紀末を舞台にした作品に出てくる乱暴な雑魚敵（ヒャッハー）』が身に纏いそうな鎧でした。
「まあでも……やっぱり出来る限りの準備はすべきですよね」
「ああ、此処はアニメでもラノベでも漫画でもねぇ……『現実（リアル）』だ。やれることをやるまでだ」
「そう、ですね」
……波の時間まで、後５分……ですか。
「……ウィンディア、リオン、緊張してませんか？」
「……ありがと。でも大丈夫、リオンやキールがいるしね」
『私も大丈夫なの！』
うん、これなら大丈夫そうですね。
次は……キールですね。
「キール……大丈夫ですか？　震えてますけど……」
「ん？　ああ……なんか、俺の村で起こった最初の波を思い出しちゃってさ……」
「……そうですか」

私はキールの故郷で起こった波についての顛末……ラフタリアさんの両親等の村の大人達が波のボスに喰われ、死んでしまった事を言ったときのキールの表情を思い出し……キールを抱き締めます。

「大丈夫です。此処には私がいます、尚文さんがいます、ウィンディアとリオンがいます。私達の手の届くところでは誰も傷付けさせませんし、誰も死なせません。貴方の村のような悲劇は、繰り返させません。だから……元気をだしてください」

「……あんがとな、姉ちゃん」

私の言葉に安心したのか、キールは私から離れると頬を叩いて気合いを入れると「ようし、魔物でもなんでもかかって来やがれ！」と気炎をあげました。

「……残り、30秒……来ますよ！」

「ああ！」

そして、カウントが0になり……

ピキン！

世界中に響くかのような音が響き、私の見ている景色が一瞬で切り替わります。

「此処は……」

「『リユート村』の付近です、投擲具の勇者様！」
私が場所を確認しようと見回していると、走りよってきたラフタリアさんがそう言いました。
「ここは農村部で、人がかなり住んでいます！」
「もう避難は済んで――」
そこまで言って、尚文さんはハッとしたような表情になります。
「不味い、波が何時、何処で発生するのかわからないんじゃ避難のしようがない！」
「急いで村を救援しませんと！」
「なので、私やリファナちゃんみたいな七星勇者のパーティメンバーと小手の勇者様と爪の勇者様は村の防御に回ることになりました！」
「私達も行きましょう！」
「わかっている！」
私達はリユート村に向かって、走り出しました。

「凛さん、フォウルさん、ラルクさん、テリスさん！」

「文香！」
「リファナちゃん！」
俺達がリユート村に駆けつけると、そこには波から這い出した魔物達を吹き飛ばす凛達と文香達のパーティがいたので駆け寄る。
「状況はどうですか!?」
「此処に駐在していた騎士達や冒険者が中心になって持ちこたえてはいるが、多勢に無勢だ。せめて住民の避難を完了させないと攻勢には移れん！」
「わかった。香、お前はキール達と一緒に村人を避難させろ」
「わかりました、尚文さんは？」
「俺は敵を惹き付ける」
「わかりました、気を付けてください」
そう言って香達は村人達を避難させる為に、俺は魔物達に向かって走り出す。
ガン！←イナゴみたいな魔物が俺に激突した音。
「ゆ、勇者様……」
「ああ、此処は俺が押さえるからお前らはさっさと後退して態勢を立て直せ！」

俺がそう言うと、これ幸いとばかりに傷を負っていない奴まで逃げようとして……
「お前らは戦え！　ナオフミの坊主にだけ戦わせようとするんじゃねえ！」
「尚文一人だけでは避難中の村人に被害が出る！　逃げずに戦うんだ！」
「逃げようとしたら……ぶっ飛ばす！」
ラルクがその不届き者達のリーダーの襟首に鎌を引っ掛けて投げ飛ばすことで無理矢理戦線に復帰させ、凛が真面目な事を言ってそいつのパーティーメンバーを自分が先駆けになることで戦わせ、文香がそれでも逃げようとした奴の顔スレスレに攻撃をすることでそいつらを前線に向かわせる。
「たく……」
俺はお人好しな連中に苦笑いをしながら逃げ遅れた村人の一人の盾になる。
「早く逃げろ！」
「あ、ありがとうございます！」
俺がそう怒鳴ると、村人は礼を言いながら避難民を警護している香の元に向かう。
「凛、村人達が全員、魔法の範囲内から避難したわ！」
「わかりました！　全員、テリスさんの魔法が来るから退避しろ！」

俺達は凛の言葉と共に後ろに下がり……

「『あまねく宝石の力よ、私の求めに応じて顕現せよ』……」

リオンの背中に乗って空中にいたテリスの言葉に応じてテリスの髪が黄色に変わる。

「『私の名はテリス＝アレキサンドライト。彼の者を討ち滅ぼす力となれ』！行くわよ……『輝石（きせき）・黄玉雷（おうぎょくらい）』！」

テリスの詠唱が終わると共に俺が採掘したトパーズから凛が作成した『トパーズロッド』から無数の雷が放たれ、視界内の大半の魔物を殲滅した。

「いよっし！一気に攻め込むぞ！」

文香が意気揚々と大きく数を減らした魔物の群れに……

「魔法隊……撃て！」

「!? 文香！」

突撃しようとした時に響いた声に気付いた俺は文香を押し倒し、その身を盾にした。

ち、痛くも痒くもないが……？この状況、何処かで……

『あたしは、『ダラバ』も『カティマ』の奴も纏めてぶっ飛ばす！　あの変な奴が言っていた『運命（原作展開）』なんざくそ食らえだ！』

『だからって、自分をダラバの盾にする!?　下手すると文香はカティマさんに刺されて死んでたんだよ!?』

『そん時はそん時だ！』

『まさかの行き当たりばったり!?』

これ、は……何時の……いや、それ以前に何の記憶……

「尚文さん、大丈夫ですか!?」

俺がいきなり沸き上がった記憶に混乱していると、香の声が俺を現実に引き戻した。

「ふん、盾の勇者か……頑丈な奴だ」

「てんめぇ……あたしもろとも尚兄を殺すつもりだったな……？」

「犯罪者の妹なんぞ、犯罪者もろとも倒して何が……「……『ツヴァイト・アクアスラッシュ』！」「『天狼拳（てんろうけん）・空徹（くうてつ）』！」「『猫神拳（ねこしんけん）・旋風（つむじ）』！」ぐべぇ!?」

騎士団の団長が文香の言葉を鼻で笑いながらふざけたことをほざこうとして……

文香の仲間に総攻撃をくらい、ノックアウトされた。
「……騎士団は以降副長の指示に従って動きなさい！『黒鉄騎士団』の内、第一大隊は私と共に村を守っている勇者様達の援護！第二大隊は波のボスの打倒に向かった勇者様達を援護に向かいなさい！」
「騎士団の内、小隊は私の元に集まれ！密集陣形を作り、盾の勇者様達を援護するんだ！本隊は隊長を叩き起こして残りの勇者様達を援護せよ！」
此方に鎧を着込んだ第一王女と同じ色の鎧を着込んだ騎士団と副長と思わしき人が率いる部隊が俺達の援護に入る。
「悪い！」
「マルティ……あんがとな」
「いえ、これは世界中にとって重要な戦いなのです……皆様への支援を惜しまないのは当然ではないですか」
「その心構えが王様にもあれば良いんですけどね……」
「(ほんとにな)」
俺は香がため息混じりで言った言葉に心の中で答えながら、魔物に押されていた

騎士をスキルで助けた。
そして……
「みてください、空が……」
俺は香の言葉に顔を上げると、そこには真っ赤に染まっていた空が青空に戻る所だった。
「どうやら終わったようだな……」
「あー……疲れた……」
凛は肩で息をしながらそう言い、文香は体を大の字に投げ出しそう呟く。
「やった……俺は、波に、皆の仇に……勝ったんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
「キール……おめでとう」
キールは波を生き残ったのがよほど嬉しいのか、ウィンディアに涙を流しながら抱きつき、ウィンディアはそんなキールの頭を撫でながらそう言う。
「体が鉛の様に重いです……」
「疲れてんだよ。ほら」
「……すいません」

俺はくたくたに疲れて立っていられない香に肩を貸してやる。
そのまま香は目を閉じると、俺の肩を枕にスースーと寝息をたてて寝始めた。
「やれやれ……俺も、寝るか……」
俺は疲れが一気に来たのか、瞼が重くなるのを感じながら眠るために目を閉じた……
「尚文、てめぇ香に手を出す気か！　俺の目が黒い内には色んな試練が襲い掛かると思え！」
「落ち着け！　色々誤解だ！」
この後、俺は誤解して狂戦士（バーサーカー）レベルの鬼の形相になった元康に小一時間ほど追い掛け回されるはめになった。
「樹、何故キョロキョロと周りを見渡しているんだ？」
「いえ、姉さんがいないので探しているんです」
「トイレとかじゃないか？」
「……それもそうですね」

同時刻、森の中……

「イ、嫌ダァァァァァァァ！　ヤット、僕ノハーレムガ完成シテタノニィィィィィィィィ！」

「うるせえよ……元の世界で生きていた頃から成長してないな、お前。お前にハーレムなんざ……勿体ねーつーの！　……そのままくたばれ！」

そのまま理奈（？）は影でギチギチに縛られながらも喚き散らす醜悪な怪物に炎を纏った大斧を叩き付け真っ二つに両断した。

「ギャアァァァァァァァ!?　ノ、呪ッテヤルゥゥゥゥ！」

「おう、じゃあそのまま魂ごと消し飛べ」

「死、死ニタクナ……」

理奈（？）は斧を禍々しい物に変貌させると、それを怪物から出た靄の様な物に叩き付けると声はそのまま掻き消えた。

「あー……下らない奴に時間を使っちまった……」

理奈（？）は溜め息を吐くと、戦いながら思っていた事を呟いた。

「……あのゴミ野郎に力を与えたのは、誰だ？　元から持ってた『催眠』の異能力

に、『オルクス』の『領域』と『ソラリス』の『薬』の併用で自分を政府から派遣された『性指導員』なんてウソっぱちの役職を利用して恋人持ちの女子を食いまくろうとした挙げ句、『革命』を目指してた理奈に散々掌の上で踊らされて、最後はUGNと理奈に討伐されたのに……しかも、限界を越えて『キュマイラ』と『ハヌマーン』の能力手にいれてたし」

理奈（？）は暫く考えていたが、彼女は頭をガリガリと掻くと開き直ったかの様な表情でこう呟いた。

「ま、誰が来ようが……アタシが、『川澄瑠奈』がぶち殺す。理奈の幸せを守るためにな」

理奈（？）……否、瑠奈は理奈の体を撫でると笑いながら彼女に変わるのだった……

次回『宴会～家族の楔～』

次回もお楽しみに！

宴会～家族の楔～

波の後の宴会です。

「いやあ！　さすが勇者だ。前回の被害とは雲泥の差にワシも驚きを隠せんぞ！」

陽も落ち、夜になってから城で開かれた大規模な宴に王様が高らかに宣言しました。

ちなみに死傷者は前回がどれ程なのかわかりませんが、今回の死傷者は一桁に収まる程度だったらしいです。

「尚文さん、これって私達全員の手柄ですね」

「……そうだな」

……騎士団の魔法攻撃から文香を庇って以来、尚文さんの生返事が多くなった様な気がします。

「尚兄、食ってるか？」

「ふ、文香……それ、全部食べるの……!?」
文香がメルちゃんを連れてお皿一杯に肉だの野菜だのを乗せてやって来ました。
「なあ、文香。……お前って向こうにいた頃、桃の花を時々『桃花染（つきそめ）』って言ってたよな？」
「ん？　そうだけど……」
「俺、それと同じ名前の人間と会ってなかったか？　……お前や『世刻（せとき）』と一緒に」
「え……寝惚けてんのかよ？　そんな事あるわけねえだろ？」
「……そうか？」
「そうだよ（あっぶねー!?『朱璃（あかり）』の事を持ち出されたからどうしようかと思ったけど……もしかして、記憶操作の魔法が解けかかってるのか？）」
尚文さんの疑問に文香は冷静に返してましたが……何か、秘密を隠してますね。顔がひきつってますし、目も泳いでいます。
文香がそそくさと去っていったのを見てから尚文さんにそれを言うと……
「……そうか」

「意外ですね、尚文さんの事だから怒るのかと思ったんですけど……」
「いや、文香は向こうにいた時から色々と隠し事をしている気配があったからな……そろそろ話させようと思ってたところだ」
「ふーん……」
私は尚文さんの言葉に頷いて……
「尚文さん！」
いたら、樹さんが詰めよって来ました。
「……なんだ？」
「何故、キールさんを奴隷にしているんですか！」
私が嫌な予感がして樹さんの後ろを見ると……予想通りそこには『地雷女（フレイア）』がにやにやと笑っていました。
……あいつが、喋ったんですね？
「此処は異世界だぞ、それに俺達の元いた世界でも奴隷はいたろうが。それと凛の仲間のフォウルとアトラも奴隷だぞ」
「それは、そうですけど……でも人は隷属させてはいけないんです！　それに、そ

れは正義の味方である僕達勇者がやっていい事ではありません！　凛さんに至っては『なんちゃって』ですし！」

……そう言えば、そうでしたね。

「お前の中じゃ許せない事なんだろうよ。お前の中ではな！」

そう言って話は終わりだと言わんばかりに背を向けた尚文さんに……

「尚文さん！　僕は貴方に……「うわー足が滑ったー（棒）」あいたぁ!?」

樹さんが何かを言おうとして文香に蹴り飛ばされました。

あ、思いっきり壁に頭をぶつけて……うわ、もの凄い痛そうです……

「ふ、文香さん……いきなり、何を……」

「悪い悪い……足が滑った。……くたばれ！」

チコーン！↑文香が樹さんの股間を思いっきり蹴った音

「！?!?!?!?」

「これも足が滑ったー（棒）」

文香……凄い棒読みでしたし、『思いっきり助走してのドロップキック』や『くたばれと言いながらの股間蹴り』を繰り出しておきながら『足が滑った』は罷り通

りませんよ……？

あーあ、樹さん股間を抑えて、白目を剥いて……完全に気絶しましたね、あれは。

「……ち、使えない勇者ね」

そう言って、地雷女は放れようとして……

「よいしょっと」

ガガブウ！↑私がこっそりと2匹のバルーンを地雷女の『お尻』に噛み付かせた音。

「イギャアァァァァァァァ!?」

「すたこらさっさのさ～♪」

私はお尻を押さえて悲鳴をあげてのたうち回る地雷女をほったらかしてそのまま尚文さんのもとまで舞い戻りました。

「香、お前……ちょっと俺に似たことしてないか？」

「そうですね。でも……周りの物は何でも使う、その考えには賛同できる部分がありますので」

「そうかよ……」
尚文さんが私の言葉に頭をボリボリと掻きながらそう言いました。
「ん？　あれって……」
王様と凛さん？　何を話しているんでしょうか？

「アトラ、どうだ……美味しいか？」
「はい、義姉様！」
私はアトラを連れて宴の料理を食べ歩いていた。
「フォウル！　負けないからな！」
「それは此方の台詞だ！」
……因みにフォウルは何故かキールと大食いの対決をしていた。
「……むぅ」
「義姉様……どうしたんですか？」
「ああ、何故かな……時折フォウルが私以外の誰か……特に女性と話しているとイラっとすることがあるんだ」

「そうですか……（義姉様、お兄様がだんだんと気になっているようですね……いい感じです。義姉様を私の本当の姉にするには、お兄様と結婚していただくのが一番ですから）」

私はアトラの疑問に時折感じる感情を言うと、アトラは私の手を握りながらそう言った。

「リン殿、楽しんでおられるようだな」

「陛下……はい、料理は美味しいのでとても楽しいですね。アトラも楽しんでいます」

「そうか、それはよかった」

王様は私に近寄るとアトラに皿を差し出したので、私はそれを受け取りアトラに食べさせる。

「あ、これって私の好きな味です」

「なんと……好きな料理まで似ているとは。これは本当にルシアの生まれ変わりなのかもしれんな……亜人に、しかもハクコ種に産まれたのが実に残念だ」

「あの、陛下……聞きたいことがあります」

私は意を決して王様に聞きたいと思ったことを聞くことにした。
「なんじゃ？」
「陛下は何故、そこまで亜人と盾の勇者を憎む事が出来るのですか？」
地雷になるかもしれないが、それでも原因を知ることで尚文の立場を少しでも改善できるかもしれないからこれは避けて通れない道だ。
「ふむ……長い話になるかもしれんぞ？」
「覚悟の上です」
私は腰を据えて話すためにアトラを隣に座らせ、水を傍らに置くと王様の話を聞くために王様に向き直った。
「うむ……あれは、わしがまだ『フォーブレイ』で王族として過ごしている頃じゃった」
「へ？」
私は予想外の国のとんでもない身分が出てきて耳を疑った。
「え、あの……フォーブレイの王族だったのですか？」
「ああ。当時は『ルージュ＝ランサーズ＝フォブレイ』じゃった」

「『ランサー』……確か元康の聖武器の勇者の血を取り込んだ家系でしたっけ？」
「うむ。勉強熱心じゃな」
「フォーブレイ出身の友人がいるもので」
「そうか、大切にした方が良いぞ。……おほん、わしはあの頃は厳しくも優しい父、おっとりしていたが心の強い母、盲目じゃったが可愛い妹、信頼できる父の家臣や気のおける友人達に囲まれて幸せな日々じゃった」
じゃが……と一呼吸置いて王様はこう言った。
「あやつらが……ハクコ種が全てを奪っていきおった」
王様はシルトヴェルトの人間に父を母を家臣達や友人を全て殺されてしまい、国も政治的な理由から罪には問えず逆に王族としての籍を外されてしまったらしい。
「それからわしは名を『ルージュ＝ランサローズ』に変え、ルシアを連れて当時シルトヴェルトと戦争をしていたこの国に将兵として移住して来たのじゃ」
「あ、オルトクレイという名は婿入りしてからですか」
「うむ、その通りじゃ」
私が素で現在とは違う名前なのを突っ込むと、王様は苦笑しながらそう言った。

「しかし……今度は、妹が……ルシアがハクコに殺されてしまった」

ある戦場から帰った所、家には致死量の血と少量のハクコ種の体毛が残されていた事から王様はハクコ種の仕業とわかったらしいが……幾らなんでも出来すぎてやしないか？　まるで、戦争を無理矢理続けさせようとするような意志があるような……？

ん、待てよ……？　以前聞いた二人の母親の名前と照らし合わせると……まさか!?

「わしは戦い続け、一先ずは溜飲を下げた。そして妻と結婚し、名を今の名に変えてシルトヴェルトを飼い慣らすことを前提としての和平に望んだのじゃが……」

マルティ姫が今はフォーブレイに留学している王子の『シゼル』の飲み物を偶然ひっくり返した際に体を魔物化させる『ウロボロス劇毒』が混入されていた事が判明したらしく、和平交渉は完全に決裂してしまったらしい。

「だからこそ、だからこそわしは幾度も家族を傷付け、あまつさえ魔物にして殺させようとした亜人を、奴等が信望している盾の勇者を許さんと決めたのじゃ！『家族』を今度こそ守るために……！」

……坊主憎けりゃ袈裟まで憎い、か。言えているな、王様は家族を守るために亜人が信じている盾の勇者も嫌っているわけか。

……だけど、

「今の貴方を見て、妹は……ルシアさんは、どう思うでしょうか？」

「む……？」

間違いを家族を守るためにと言うお題目で暴走を続ける王様を少しでも止めなければならない。

きっと、ルシアさんは今の兄を見れば悲しむだろうから。

「きっと、悲しむと思います」

「……何故じゃ？」

「陛下は、親を友人をあまつさえ家族を殺されて、その末に亜人はおろか、盾の勇者をも憎むと言っていました。ですが、ルシアさんは憎しみのままに突き進み続ける貴方など多分見たくないと思います」

「……他人であるリン殿に何がわかると」

「私も一度は憎んだからです。弟を、錬を殺した人間を」

私は一呼吸置いて、こうとも言った。
「まぁ、周りの人間に止められたのですが」
だからこそと言って私は王様に言う。
「貴方の家族であるマルティ様が貴方が三勇教と共謀して行った尚文に対する陰謀を止めさせようとするのは、きっと貴方に復讐を思い止まってほしいからじゃないですか？」
……ルシアさんに瓜二つのアトラが此処に来たのも、ルシアさんの兄を止めたい思いがあったからなのかもしれんな。
「……それでも一度振り上げた拳は、止められんよ」
そう言って王様は立ち上がると去っていった。
「……香、尚文。出てきたらどうだ」
「あ、盾の勇者様……」
「バレてたんですか……」
「……」
私がそう言うと盗み聞きをしていた香と尚文が出てきて、アトラが顔を赤らめた。

……アトラは尚文に一目（？）惚れしたらしく、今回の事態が落ち着いたら尚文に積極的にアプローチをかけるつもりらしい。
「今の話、どう思う？」
「……同情はしますけど、納得は出来ません。様は盾を信仰している亜人への憎しみのとばっちりじゃないですか」
「俺は余計にシルトヴェルトが嫌いになったな」
……文香はシルトヴェルトに痛め付けられたからな。
「……でも、ルシアさんの事を考えるとなんとか変えたいって思う気持ちはありますね」
「……俺もだな。文香がもしも同じ目にあったら俺もそいつの人生をぶっ壊す為に行動する自信があるからな」
香と尚文がそう言ったのを聞いて、私はこう言った。
「いや、多分だけど……もうその為のピースは揃ってる。後は、タイミングだと思う」
「え？　ピースって？」

「アトラとフォウルだ」
「どういうことだ？」
私は完全に確信に変わった仮説を二人の前で……
「恐らくだが……」
「文香！　良くも樹をぶっ飛ばしてくれたわね！」
「それは此方の台詞だバカ野郎！　姉ならキチンと手綱を握りやがれ！」
言おうとして、文香と理奈の取っ組み合いで間を潰されてしまった。
「文香……何をやってんだ」
「理奈さんまで……さっきの事、バレたみたいですね」
……ああ、樹が教王の娘に唆されて尚文に決闘を挑もうとして文香にぶっ飛ばされたときのか。
あの時は止めようとしたタイミングであいつの取り巻きが壁になるように話しかけて来たことで止められなかったが……後で何が悪かったのかを言わんとな。
そして私は胸の中で答えを言った。
「（恐らくだが……フォウルとアトラの母親は、ルシアさんだ）」

次回『番外～錬と凛のゲームの話～』
お楽しみに

剣と爪の第2章～復活の探索者～

論功式～たまごガチャ～

卵ガチャの話です

朝の10時頃、私達は謁見の間に通されました。
「たく……なんで翌日に援助金を渡すんだよ……」
「まあまあ……」
尚文さんがそう毒づきますが、私はそれを苦笑いをしながら宥めます。
「では今回の波までに対する報奨金と援助金を渡すとしよう」
……報償金、ですか？　そういえば、理奈さんとかから王女様や王様から依頼を受けていたって言ってましたね。
そして重そうな金貨袋を持った王様の側近達がやって来ます。

「ではそれぞれの勇者達に」
私達の視線が金袋の方に向います。
確か、月々の援助金は最低でも銀貨５００枚は確定しているはずです。
支度金だけの合計銀貨１０００枚……では本気で今後の生活などに困ります。
「（ぼそ）良かったですね」
「（ぼそ）ああ」
私達は小声で頷き合いながら金袋を受け取ります。
さて、このお金で何を買いましょうか……投擲具の強化法である『オーバーカスタム』は矢鱈と金を使いますし、薬や料理に使う機材の新調も良いですね……
いやいや、キールやウィンディアの装備の新調も考えなければ……
金袋の中のお金は……銀貨で１５００枚でしょうか？
「（ぼそ）尚文さん、幾らでしたか？」
「（ぼそ）銀貨で１５００枚だ。そっちは？」
「（ぼそ）此方も同じです」
合計で３０００枚……まあまあの金額ですね。

「モトヤス殿とリナ殿には活躍と依頼達成による期待にあわせて銀貨３５００枚ずつ」

んな!?　合計で７０００枚ですか!?

私と尚文さんの視線が兄さん達に手渡された重そうな金袋に注がれます。

「次にレン殿とフミカ殿、やはり波に対する活躍と我が依頼を達成してくれた報酬をプラスして銀貨３５００枚ずつ」

錬さんと文香もですか!?

私が目を見張ると、物凄く不満そうな顔で金袋を受け取る文香と兄さんと同じ金額で満足そうな錬さんがいました。

あ、文香が小声で「け、尚兄と香には端金しか渡さねえくせに……」と言っています。

「そしてイツキ殿とリン殿……貴殿達の活躍は国に響いている。よくあの困難な仕事を達成してくれた。銀貨３５００枚ずつだ」

樹さんと凛さんにも同じ枚数が渡され、樹さんは「まあ妥当でしょうね」という顔で凛さんは私達に「すまない」と言いたそうな顔で金袋を受け取ります。

「盾の勇者とカオル殿には波の戦いにおいてリユート村の防衛に活躍した功績をプラスして銀貨１５００枚ずつとする」

……王様の渋々といった反応や、王女様の疲れたような表情や何故かいる教王からの苦々しそうな反応から本来は支援金だけだったようですね。

「……ご恩情、感謝致します」

「……おい！」

私が恭しく頭を下げると、尚文さんが私の反応にキレそうだったので私は「それでは仲間を待たせているので失礼します」と言って謁見の間から出ました。

「なんであんな屑に頭を下げた！」

王城から出ると、尚文さんが怒りに任せて私に怒鳴りました。

「落ち着いてください。訳を言いますから」

「……俺が納得出来る答えだろうな？」

私の言葉に尚文さんが訝しげに睨みます。

「理由としては彼処で文句を言ったら援助金もこれ幸いとばかりに打ちきりにされ

そうな雰囲気だったからなんですよね。それをされるくらいなら頭でもなんでも下げて最低限の支援は続けてもらいましょうよ……後で溜飲を下げる為にも、彼処は耐えるべき場面でした」

「……そうかよ」

私が理由を述べると、尚文さんは不満そうな顔つきでしたが渋々と言った感じで納得したようでした。

「取り合えず、戦力強化の為に親父さんの所にでも……「もし、盾の勇者様に投擲具の勇者様」うひゃらっほい!?」

「「ぶふ!?」」

「……すっげぇ声を出したな」

ううう……とんだ大恥を掻いてしまいました……誰ですか、急に話しかけてきたのは！

「お久々でございます」

「げ……奴隷商さん……」

「ああ、あんたか。こんな表で何をやってるんだ？」

「今は表の方の商売をしていまして」
「『表の方』？」
私が奴隷商さんの言葉に疑問を感じて聞くと、奴隷商さんは勿体ぶったような身ぶりでこう言いました。
「『魔物商』ですよ」
「この世界じゃ魔物使いもいるのか？」
「物わかりが良いようで何よりでございます。勇者様はご存知ないですかな？」
「あったことはないが……」
「確か、凛さんと理奈さんの仲間のフィロリアルがそうだって話を聞きましたけど……」
「……ああ、あのチョコボみたいな魔物達か」
凛さんのルージュは気品の溢れるお嬢様気質の性格で、理奈さんのフィオはクールな性格、リコは荒んだ尚文さんを気遣うように髪に毛繕いをする気配り上手な子なんですよね。
……ところでチョコボってなんですか？

「で、あの卵は？」
「魔物は卵からじゃないと人には懐きませんからねぇ。こうして卵を取引してるのですよ」
「そうなのか」
「既に育てられた魔物の方の檻は見ますか？」
うわぁ、商魂逞しい……
「いや、今回は別にいい」
「それに育ちきったのは高いでしょうしね」
私達がそう告げると、奴隷商さんは「残念ですねぇ」と肩を竦めながらそう言いました。
「で、あの卵のある木箱の上に立てかけてある看板は何だ？」
え～と……『一回：銀貨１００枚』で商品の名前は『魔物の卵くじ』、ですか。
「銀貨１００枚で一回挑戦、魔物の卵くじだそうです」
「１００枚とは高いな」
今の私達の資金は銀貨３１０１枚。一、二回程度なら問題ないでしょうが、それ

でも慎重になるべきですね。
「高価な魔物ですゆえ」
「一応参考に聞くが、フィロリアルだっけ？　それはお前の所じゃ平均幾らだ？」
「……成体で２００枚からですかね。羽毛や品種などで左右されます。ハイ」
「結構高いんですね」
「成体という事はヒナはもっと安いのか。更に卵の値段だけで、育成費は除外だとすると……得なのか？」
「いえいえ、あそこにあるのは他の卵も一緒でございます」
「なるほど……くじと言っていたからな」
　中には最高級な卵もあるということでしょうか？
「で、あの中には当たりが無いって所か」
「なんと！　私達がそんな非道な商売をしていると勇者様達は御思いで!?」
「人身売買をやっておいて良く平然とそれを言えますね……」
「私、商売にはプライドを持っております。虚言でお客様を騙すのは好きでありますが、売るものを詐称するのは嫌でございます」

「騙すのは好きだけど、詐称は嫌いって……」
「とんでもない商人ですね……」
私達が呆れながらそう言うと、奴隷商さんは続けてこう言いました。
「大当たりは騎竜でございます」
「ああ、リオンの仲間ですか」
私がそう言うと奴隷商さんは意外に思ったのか「おや、既に竜のお仲間がおいでで？」と言いました。
「お売り頂くなら金貨20枚で買い取りますが……」
「殺すわよ」
「ウィンディア！」
そんなことを言った奴隷商さんにウィンディアが怒りと殺意を込めた目で剣を突き付けるのを慌てて止めました。
「おおっと、冗談、冗談ですよ。……で、如何ですかな？」
「……因みに確率は？　大当たりが出るやつで良い」
「卵は２５０個ございます。その中で１個ございます」

確率は２５０分の１……ですか。
「見た目や重さで分からないよう強い魔法を掛けております。ハズレを引く可能性を先に了承してもらってからの購入です」
「良い商売をしてますね……」
「ええ、当たった方にはちゃんと名前を教えてもらい。宣伝にも参加していただいております」
「ふむ、確率がな……」
「十個お買い上げになると、必ず当たりの入っている、こちらの箱から一つ選べます。ハイ」
「さすがに騎竜とやらは入っていないのだろう？」
「ハイ。ですが、銀貨３００枚相当の物は必ず当たります」
「あ、そうなんです……って、それってコンプガチャ商法じゃないですか!?」
「そういやそうだ!?」
「「？？？」」
あっぶな、危うく罠に嵌められる所でしたよ！

……でも、同時に面白そうな感じではあるんですよね。
「……私達四人でやります？」
「ふむ、なら俺達四人分を一個ずつ売って貰おうかな」
「ありがとうございます！」
「やった！」
「……良いの？」
キールは純粋に喜びますが、ウィンディアは心配そうに覗き込みます。
「最悪ウサピルでも育てた後で売ればトントンです」
「あ、そうなんだ……」
アニマルセラピーだのの効果はありますが……お金が無くなったときに売れば生活費の足しにもなりますしね。
「それにしても……ふむ」
奴隷商さんはキールを値踏みするかの様な視線で見ます。
「……なんだよ」
「もっと私共のような方かと思っていたのですが期待はずれでしたな」

「……その口を閉じないとぶち殺しますよ？」
私はナイフを持って奴隷商さんに詰め寄ると、奴隷商さんは慌てたように「失敬！失言でしたな」と言いました。
「それじゃあ、卵ガチャをしてこの胸糞の悪い人から遠ざかりましょう」
「賛成！」
私がそう言うと、ウィンディアも怒り混じりの言葉でそう言いました。
「あ、ああ……」
「姉ちゃん、スッゲー怖い……」
私の雰囲気に恐れをなしたのか、尚文さんとキールが半歩ほど後ろに下がっていました。
「……じゃあ、私はこれで」
「あたしはこれ」
「俺はこれだな」
「俺はこれ！」
私達はそれぞれ適当に選んだ卵を手に取ります。

「では、その卵の記されている印に血を落としてくださいませ」
言われるまま、卵に塗られている紋様に血を塗りたくるとカッと赤く輝き、私の視界に魔物使役のアイコンが現れます。
……奴隷と同じく禁止事項を設定できるようですね。
指示を無視したら軽い痛みが入るようにしましょう。……心は痛みますけど、躾の意味も込めてですね。
私が設定を終えると、奴隷商さんはニヤリと笑いながら孵化器らしき道具を開きます。
私達はその卵を孵化器に入れました。
「もしも孵化しなかったら違約金とかを請求しに来るからな」
「ハズレを掴まされたとしてもタダでは転ばない勇者様に脱帽です！」
「当たり前、です！」
私がそう言うと、奴隷商さんの興奮が最高潮になりました。
……もしかしてこの人って、潜在的に被虐体質（マゾヒズム）なんじゃないでしょうか？
「口約束でも、本当に来るからな。白を切ったら乱暴な俺の奴隷が暴れだすぞ」

「がおー！」
「……キール、迫力あんまり無いからやめなさい」
「え～!?」
元気っ子なキールがそれをやると確かに迫力無いんですよね……
「何時頃孵るんだこれ？」
尚文さんが銀貨４００枚を奴隷商さんに渡してから尋ねました。
「孵化器に書いております」
「ふーん……香」
「え～と……明日位に孵化しますね」
「早いな」
「早めに孵化しそうなのをガチャ用に置いてるんじゃないんですか？」
……何が出てくるのか、ちょっと楽しみですね。
「勇者様のご来場、何時でもお待ちしております」
「出来ることなら、永遠に来たくありませんね」
「香に同じく」

私達はそう言いながら奴隷商さんのテントから孵化器を持って出ました。
「……何時までも香に頼る訳にもいかないから、ウィンディア、この世界の文字について教えてくれないか？」
「別に良いわよ？　ついでに香にもより難しいの教えてあげる」
「ありがとうございます」

次回『産まれる者達〜フィーロ、サクラ、ノワール、ブラン〜』
お楽しみに！

産まれる者〜フィーロ、サクラ、ノワール、ブラン〜

フィーロ達の生誕＋αです。

卵ガチャをしてから私達は魔法屋で店主さんから魔法の適正をみてくれた上に初級の魔法書を貰い、薬屋では前に貰ったレシピ本よりも高い薬を作れるレシピ本を貰い、リユート村に行けば村人から感謝されてキメラの素材をわけて貰ったり……と、以前に比べたら格段と周囲の人達からの扱いが良くなっていました。

因みに魔法の適正は……

私↓水と炎

尚文さん↓回復と援護

キール↓光と風

ウィンディア↓闇と土

……尚文さんって、幾らなんでも攻撃に縁が無さすぎじゃないですか？
因みに魔法の適正まで攻撃に縁が無かった事に尚文さんはｏｒｚの姿勢になり「どんだけ攻撃力に縁がねえんだよ!?」と叫びました。
……本当に悲惨、ですね。
この後で尚文さんはウィンディアから文字を教わりながら頭を抱え、私は文法に頭を抱えました。
そんなこんなで１日たって……
「香！　香！　香！」
私は慌てて入ってきたウィンディアに叩き起こされました。
「むにゃ……どうしたんですか……？」
「卵が孵る！」
「……あ!?　それは大変ですね！」
私は慌てて起きると、孵卵器に入った卵を見ます。
卵が割れて……
「ピイ！」「あいた!?」

「ギャオ！」「よいしょっと」

卵の殻を乗せた桜色の毛並みのフィロリアルと黒い鱗の竜が勢い良く出てきてフィロリアルは私にぶつかり、竜はウィンディアが優しく抱き止めました。

「フィロリアルと騎竜……大当たりも大当たりですね」

育って銀貨２００枚のフィロリアルと金貨20枚の騎竜……完全に収支はプラスですね。

「ピィィィ……」

「キュアァァァ……！」

あれ？　なんか2匹から険悪な雰囲気が……

「ギュア！」

「ピィ！」

「はい、ストップ！」

「ピ!?」

「キュア!?」「あいだぁ!?」

竜とフィロリアルが互いに突撃して……フィロリアルがウィンディアに抱き

上げられた事で竜が私の鼻に噛み付きました。
「ごめん、ドラゴンとフィロリアルが種族レベルで仲が悪いって事を忘れてたわ」
「忘れないでくださいよ！『ノワール』が鼻に噛みついて痛いです！」
「え、もう名前を付けたの!?」
私が鼻を抑えながらそう言うと、ウィンディアは名前をつけたことに驚いていました。
「いや、まあ名前をつけないと不便ですし……」
「……それもそうね。ノワールが竜の名前だとして……この子の名前はなんなの？」
「その子の名前は『サクラ』ですよ。名前の由来はノワールは鱗の色が黒いからで、サクラは羽毛の色が桜色だからですね」
黒と桜……あの人達、元気ですかねぇ……
私は此処にはいないそれぞれの色がパーソナルカラーである人達とその仲間の人達を思い出しながら、抱き上げたノワールを撫でるのでした。

「尚文さ〜ん。卵から産まれ……ありゃ」
「痛い痛い痛い！　俺の尻尾は食べ物じゃねえよ!?」
「だぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?　落ち着け、お前ら！」
そこには部屋中をドタバタと走り回る白い毛並みの狼の様な魔物を捕まえようとしている尚文さんと尻尾をつついているサクラの羽の色をちょうど反対にしたような羽毛の色のフィロリアルを引きはなそうと奮闘しているキールがいました。
「香、サクラは任せたわ」
「あ、はい」
ウィンディアはそう言ってサクラを私の頭の上に乗せると、狼をあっさりと捕まえ、フィロリアルは体をこちょこちょと擽って、フィロリアルが「ピヨヨ！」と笑った隙をついて引き剥がしました。
「ぜぇ、ぜぇ……すまん。助かった」
「別に、どうって事ないわよ」
う〜ん……狼は元気っ子で、フィロリアルの方はやんちゃだからキールの尻尾を玩具か何かだと勘違いしたんでしょうか？

「えっと、結果はフィロリアルが2、竜が1、名前のわからない魔物が1……収支的には大幅にプラスでしょうか？」

「名前がわからないという意味ではマイナスだがな」

そう言って尚文さんはすりすりとよっているサクラとフィロリアル……尚文さんの命名の『フィーロ』を撫でます。

「……尚文さんって、動物に好かれやすいんですか？」

「まあ、そうだな。元々動物は好きだから、世話してたら何時の間にか好かれてたな」

「……ちょっと羨ましいです」

「ん？　何か言ったか？」

「あれ？　いえ、何も」

何か変なことを口走った様な気がしますが……気のせいですよね。

「あ、盾の勇者様、投擲具の勇者様。おはようございます」

「おはよう」

「おはようございます」
「ヴォウ！」
「「ピイ！」」
「ギャウ！」
私達が宿から出ると村人に挨拶をされたので挨拶を返しました。その村人の目はウィンディアが腕に抱えているノワール、頭の上に乗っているフィーロとサクラ、キールの足元にいる『ブラン』に向きました。
「おや、その魔物達は？」
「魔物商から卵を買いまして……」
「ああ、なるほど」
「ただ、中身が何か分からないって触れ込みのくじ引きだった。この魔物が何か知らないか？」
「フィロリアルと竜はわかったんですけど、この子はわからなくて……」
私がそう言うと、村人はブランをマジマジと見つめます。
「そいつは……『ハウンドウルフ』の雄ですね」

「どういう魔物なんですか？」
「基本的には群れで生活する魔物なんですが、人間が飼い慣らしたのは優秀な猟犬になったり牧羊犬の代わりになったりするんですよ。魔物使いが飼うのは基本的に魔物ですから普通の牧羊犬だと歯が立たないんですよね」
あ～……確かに、普通の牧羊犬だと蹴散らされるか最悪の場合は魔物に噛み殺されるのがオチですね。
「ありがとうございます。参考になりました」
「そう言えばフィロリアルは何を食べるんだ？　竜と狼の方は肉を食わせたら良いというのはわかるんだが……」
「基本的に雑食ですから何でも食うんですけど……最初は煮豆とかの柔らかいものを食べさせた方が良いですよ」
私達はそうアドバイスしてくれた村人にお礼を言いながら狩りをしに行きました。

……で

「明らかにおかしいですよね？」

「ああ」

武器や防具を新調したお陰で倒しやすくなって……いるのは良いんですけど、フィーロとサクラの成長速度が明らかにおかしいです。

因みにレベルは……

私↓28

尚文さん↓23

キール↓29

ウィンディア↓29

リオン↓20

サクラ↓12

フィーロ↓12

ブラン↓10

ノワール↓9です。

ブランとノワールのレベルがフィーロ達より低いのはドラゴンは普通の魔物よりもレベルアップに多くの経験値を必要とする事、ブランがフィーロ達が倒しやすいようにアシストしたのが要因です。

で、フィーロとサクラですけど……さっきまでヒヨコみたいだったのに、今は両手で持っても重いほどの大きさに育っていました。

羽根も抜け落ちてフィーロはピンクから桃色に、サクラは白から純白に変化していました。

いや、ブランとノワールの成長も早いんですけど……フィーロとサクラが異常すぎます。

「ん～……多分、香達が勇者なのが原因なのかも。詳しい人ならより詳細な事がわかるんだけどね……」

「あー……やっぱりそこにたどり着きますよね……」

私は今もメキメキと骨や肉が軋む音がするフィーロ達に目線を向けて……!?

「（殺気!?）尚文さん、構えて！　エアストスロー！」

私が殺気のした方向に向けてナイフを投げると、黒い……いえ、黒過ぎる蛇のような魔物を貫きました。
「やったか!?」
「いえ、まだです！」
私が注意すると、魔物が更に7匹程飛び出してきました。
「なんだこいつらは!? エアストシールド！」
飛び掛かってきた1匹をエアストシールドで防いで……!? エアストシールドに罅が!?
「こいつ……！ 今の俺の防御力を超えているのか!?」
「尚文さん、避けられるのは避けてください！ 避けれられない攻撃だけを防いでください！ ウィンディアとキールも回避優先で攻撃は出来る時だけで！ リオンは空から魔法で援護を、他の魔物達は攻撃を受けないようにヒット&アウェイを心がけてください！」
「わかった！」
「わかったぜ姉ちゃん！」

「わかったわ！」
『はーい！』
「「ピヨヨ！」」
「キュオン！」
「バウ！」
そう言って私達は蛇の群れと戦闘を開始しました……

「『シールドプリズン』！」
「『ファスト・ウィンドアロー』！」
「コンボ！『疾風投刃（しっぷうとうじん）』！」
あれから１時間後。各個撃破に成功した私達は最後の蛇を仕留めて漸く一息吐きました。
「や、やっと全滅しました……」
「つ、疲れた……」
私達がそんなことを言いながら蛇を武器の中に吸収します。

すると……

『ファンタズム・スネークナイフ』が解放されました。

……ファンタズム（幻想）？

私が疑問に思っていると……

「ぼさっとするんじゃねえ！」

「うわひゃ!?」

私は尚文さんに抱き締められながら、倒れました。

「な、何をして……なんですかあれ!?」

そこには蛇同様に真っ黒なドラゴンがそこにいました。

「知るか、急に現れたんだよ……ぐぅ!?」

「な、尚文さん!?」

私が慌てて尚文さんを見ると、尚文さんの背中にはくっきりと裂傷が残っていました。

「わ、私を庇って……す、すぐに倒して治療しないと！」

「バカ……俺を置いて逃げろ！　俺達で勝てる相手じゃない！　お前が死んだ

ら、元康が……悲しむだろ！」
「尚文さんが死んでも文香が悲しみます！」
私は尚文さんを背中に庇いながらドラゴンに……
「……吠えろ、我が斧。煌めけ☆『シャインブレード』！ふはははは！我が『魔眼』が巻き起こす『重力』に潰れよ！お前ら、うっせぇ！行くぜ、三種混合！」
立ち向かおうとして、一人で芝居をしているかの様な声が聞こえてきたかと思うと……
「背中借りるぜ！」
「ぎゃふん!?」
「くらえ、『烈風光重斧』！」
背中を踏まれたので慌てて起き上がると……まるでバターか何かを切り裂くかの様にドラゴンを真っ二つにする斧を持ったフードの人物がいました。
「いや、誰ですかあんた!?」
「ただの通りすがりだ……『星光』！はいはい……『光芒の疾走』☆」

「うわ!?」
フードの人の口調が変わったかと思うと、いきなりフードの人が光って何時の間にかいなくなっていました。
「……今のは、一体……って、尚文さん！」
私は考えるのは後にして慌てて尚文さんに傷薬を飲ませると、そのままリオンの背中に乗せてリユート村に向かって飛翔させました……
「(それにしても……さっき、抱き締められ……！)」
ううう……顔が熱くなりそうなので、さっきのはカットですカット！

「くそ！　なんなんだ、あいつは！」
「まぁまぁ……コージ様、盾達はまるで相手にならないんです。次を狙えば……」
香達が飛び去った後、彼らを狙っていた人間達は香達を助けたフードの人物に憤っていたがすぐに次の襲撃計画を練ろうとして……
「いや、お前達に次はない」
彼らにとっての『終焉(死)』が訪れた。

「な……誰だ、てめぇは!?」
「俺は……貴様を殺す者だ」
その人物……左手首にリボンを巻き付けた目付きの鋭い青年は柄しか無い刀から血の刀身を形成する。
「俺を殺すだぁ……？　寝言を言うんじゃねぇ！　戦力差を考えてから言え！」
そう言って男は手を地面に置くと、地面から香達を襲った蛇が合体したような黒いヤマタノオロチと黒ドラゴン、そして黒い巨人が現れた。
「ははは！　どうだ、これが俺の……」
「俺も……」
男は勝ちを確信して……
「『マザーズ・ロマリオ』！」
「『破邪剣征・桜花放神』！」
「『破神秘奥』！」
「ちか、ら……？」
「一人で来たとは、言ってはいない」

ヤマタノオロチが十一連続の突きで絶命し、ドラゴンが両断され、巨人が消滅した事でその笑みが消滅した。
「ひぃ!? そ、そいつは煮ても焼いても良いですから、殺さないでください！」
「わ、私達はそいつに脅されて一緒にいただけなんです！」
「な!? お前ら……」
彼に靡いていた少女達はあっさりと彼を裏切ろうとして……
「悪いけど……僕は『裏切り』を許せないんだ」「あがぺ!?」
「尻馬に乗ろうとして、死にそうになったら命乞い……醜いったらありゃしないわね」「!? アギャァぁぁぁぁぁぁぁ!?」
一人は後ろから現れた少年に首を握り潰され、もう一人は影から現れた牙に噛み殺された。
「!? ひ、ひぃぃぃぃぃ……た、助けてくれ！ 金はやる！」
「金はいらん」
「お、女か!? 女はあの二人以外にも……「女もいらん」じゃ、じゃあ何なら……」
「お前の……命だ」

「い、嫌だ……」

そして男は血の刃で首を断ち切られ、その後現れた魂を消滅させられたことでこの世から完全に消滅した……

次回『激闘〜村防衛レース〜』

お楽しみに

激闘～村防衛レース～

フィーロ達の疾走です

「ぜぇ、ぜぇ……あ～、疲れた」

アタシは岩谷兄と北村妹を救出した後、ハヌマーンの保有者である『猿白永久（ましらとわ）』と『エンジェルハイロゥ』の保有者である『星光悠那（ゆうな）』の能力を併用して逃げてきた。

『おい、我（われ）の紹介がないぞ』

「うるせえぞ、中二病（理華）」

『ルビで我の名前を説明するな！　読者に失礼だろう！』

「誰だよ読者って……」

アタシに妙なことを言いながら怒ったのは『重音理華（かさねりか）』。『バロール』の保有者であり、現役の中二病でもある。

「あ、瑠奈。帰ってきたで御座るか」
「『血花』、誰が聞いてるのかわからねえからな……普段はその口調で話すなよ」
「む。それは心得ている」
そう言って古風な口調で話すのは『染宮血花』。『ブラム＝ストーカー』の保有者であり、今のアタシ達の体を構成しているのは血花の血液で構成された『従者』だ。
「それでは斧に意識を戻すで御座るよ」
「オーケー、終わったら従者を解除しろよ」
「それは言われんでもするで御座るよ」
アタシ達は意識を集中して斧の中に戻る。
アタシが眼を覚ますと、そこには13脚の椅子が周りを囲んだ円卓とそこに座る意識の無い理奈を中心とした顔も性格も違う理奈と『融合』したアタシも含む12人の『レネゲイドビーイング』達だ。
尚、血花の席は現在は空いている。
「ふむ……どうやら無事に戻ってきたようだね」
そう言ったのはアタシ達の頭脳担当である『野々宮千恵』。『ノイマン』の保有者

でもある。

「……当たり前、３人も出てて負けたらそれこそ恥」

「永久。エフェクトを使ってないとはいえ、アタシも含めると４人だぞ」

本来は３つのシンドロームを組み合わせた『トライブリード』は器用貧乏なのだが……アタシ達は特殊な融合を果たした為かブリードの影響で制限をかけられるエフェクトも何の制限もなくぶん回せるんだ。

「ところでさ～あの王女様、なーんか悠那達の秘密に気がつき始めてるみたいだよ？」

「……どういうことだ？」

そう言ったのは永久の姉の『猿白刹那（せつな）』。キュマイラの保有者だ。

「ん～感覚の鋭い悠那と永久だからかな、あの王女様が『もしかして樹の世界って、ダブルクロスも混じってたの……？　理奈って、もしかしてキャンペーンシナリオ限定のＤロイス持ち？』って言ってたんだ。言ってる事はあんまりわかんなかったんだけど、何かを知ってるのは確かだよ」

「ふむ……現時点では何も言えないが、いざという時には『薬湯（くすゆ）』に一服盛ら

せるのもありだな」
「うぃーっす」
気だるげにそう言ったのは、『黒袖薬湯』。『ソラリス』の保有者だ。
因みにレネゲイドビーイングなのに人間みたいな名前なのは、人間として暮らしていた奴等がマッドサイエンティスト野郎のカスみたいな目標で集められたからだ。
「ま、今は何もしないでおこう。みんな、そろそろ理奈に体を返すぞ」
アタシ達は円卓から放れると、理奈の幸せそうな寝顔をみながら斧の中に帰って行った。

「……むにゃ」
私はゆっくりと目を覚まして……
「尚文いいいいいいいいいいいい！香に看病してもらうなんて……羨ましいぞこの野郎！」↑槍を押し込もうとしている。
「妙な嫉妬を燃やすんじゃねぇ！」↑槍を白羽取りしている。
「元康！ストップ、ストップ！」↑兄さんを必死に止めようとしている。

「……はい？」

そこには槍を構えた兄さんが一応は重傷者である尚文さんを突き殺そうとしている場面でした。

「「ピヨヨ！」」

ドゲシ！↑フィーロとサクラのダブルキックが兄さんに炸裂した音。

「ぶがぺ!?」

「え～と……何がどうしてこうなったんですか？」

兄さんがフィーロとサクラのキックでひっくり返ったのを見ながら私は尚文さんに何故こうなったのかを聞きました。

「ああ、俺が怪我をした後でお前が傷の手当てや看病をしてくれただろ？　元康が村人からそれを聞いてすっ飛んできて……」

「で、さっきの状況になったわけ」

「兄さん……」

シスコンも度が過ぎるでしょうに……

「って、フィーロとサクラ……また大きくなっていませんか!?」
　昨日までは頭に乗せられる大きさだったのに今は私達が乗れる大きさになっていますよ!?
「あー……これ、フィロリアルの王様……二人とも雌だからフィロリアルクイーンになり始めているみたいね」
「……詳しいな」
「フィオとリコ……私が一緒にいるフィロリアルもクイーンとキングだしね。それから此方に来て１ヶ月は凄く詳しい人の所にいたから」
　なるほど……
「そういえば……兄さんに理奈さん、どうしてここに？」
「ああ。マルティさんがリユート村の被害状況を確認するために私達に護衛を頼まれてね、それで此処に来たの。……来て早々に元康が村人から尚文が怪我をして香が看病をしているって話を聞いてすっ飛んでいったんだけどね」
「……護衛の仕事をほっぽりだしちゃダメでしょう」
「……面目ねぇ」

兄さんがバツの悪そうな顔になりながらそう呟きました。
「もう……それじゃあ、さっさと下に降りましょう」
「へいへい……」
私達が宿屋の下に降りると……
「あ、勇者様方！　助けてください！」
「どうしたんですか？」
慌てた様子の村人が私達に話しかけてきました。
「きょ、教会の人達がやって来て……」
「……話をうかがいましょう」
もの凄く嫌な予感がしますが、行きましょう。

「ラフタリア、リファナ！　状況は!?」
「あ、理奈さん！　その、とんでもない状況になっていまして……」
「どういう状況なんですか？」
その後、ラフタリアさんとリファナさんの話によると……

兄さんが宿屋に突撃後に溜め息を吐きながらもマルティ王女が被害状況を確認→その被害の額が予想以上に大きかった→その復興予算の捻出に頭を悩ませていたら地雷女率いる教会の人間が到着→３年で金１００枚（返せなかったら教会の直轄地になるという契約）という太っ腹な復興予算を出してくれた→しかし、文面を良く見ると３『年』ではなく３『日』という絶対に不可能な返済期間だった→マルティ王女が抗議をするも、既に契約が成立した後だったのでリユート村が絶体絶命になる→が、フォーブレイにて外交中の女王が直々にマルティ王女を村の領主に任命→それに地雷女がいちゃもんをつけて今は拮抗しているそうです。

「なんともまぁ、姑息な手段を使いますねぇ……」

「本当にそうだな」

私が呆れ気味にそう言うと、尚文さんも大きく頷きながらそう言いました。

「盾の悪魔……そうだわ！　マルティ……１つ、この村を賭けて勝負をしない？」

「勝負？　何を？」

「この村を私の連れてきた騎竜にのる騎士達と、盾の悪魔と投擲具の偽勇者と元康

様と斧の勇者様の乗る魔物で競争させるのよ。ルールは村を一周で、４人の内の誰かがゴールすれば良いとするのよ」

「……こちらが勝負を受けるメリットは？」

「そうね……此方が勝てば村は私の物よ！　そっちが勝てば……返済はチャラ、金貨は好きに使えば良いわ。それから……盾の悪魔の妹の危機について教えてあげようかしら？」

「「!?」」

文香の危機……ですって!?

「それはどういうことだ!?」

「文香になんの危機が!?」

「勝負に勝ったら教えてあげるわ」

この女は……！

「良いでしょう……負けて吠え面をかかないでくださいね！」

「上等だ！　かかってこい！」

私達は高らかに勝負を引き受けました。

『……ふむ、私の出番か』

ここからは私『野々宮千恵』の視点でお送りさせて頂こう。

私達は現在、村の入り口付近に引かれたスタートライン兼ゴールラインに集まっていた。

因みに私は最近仲間になったフィロリアルの『ユキ』、北村兄はなんやかんやあって私が譲り受け、北村兄に預けた卵から産まれたフィロリアルの『フレオン』に北村妹はサクラ、岩谷兄はフィーロに乗っている。

ん？　教王の娘が何やら指示をしているが……

「永久」

『……色々と妨害をしようとしているみたい』

私は『モルフェウス』の保有者である『造谷紡（つくりやつむぐ）』の作った通信機で通信する。

……奴等にスポーツマンシップの文字はないらしいな。

「それでは、位置について……」

『……最初に４人のスタート地点に土が盛られてるから気をつけて』

「3人とも、スタートするときは小さく飛んで」
「「？」」
私が注意をすると、3人は首を傾げ……
「始め！」
私はユキを小さく飛ばせて盛り土を回避するも、3人は見事に足を取られて転んでしまう。
「ち……注意が足りなかったか」
私は正々堂々の四文字がない姑息な罠に呆れながらもスタートダッシュを決めた4人を追いかける。
「お前らの神は姑息な手段で勝つのを教義にしているのか？　だとしたらとんでもない小者の神だな！」
「貴様……！　斧の眷属器の勇者だからとて……」
「は！　だったらあんな小細工をせずに正々堂々と勝てば良いものを……ああ、あんなビッチに仕えているから無理か！　あはははは！」
「言わせておけば！」

私は罵詈雑言をぶちまけることで手近な騎士を思いっきり怒らせ、剣を抜かせる。
……隙あり！
「悪いが正当防衛だ！」
「ぐばぁ!?」
私は騎竜から騎士を叩き落とし、騎士の仲間を妨害しつつリタイアさせる。
『どっちが姑息なんだか……』
「先にやったのはあっちだ！」
私は『エグザイル』の保有者である『骨無柔（ほねなしやわら）』の呆れたような口調に突っ込みを入れながら……
「サクラ！　卑怯な連中には絶対に負けたくないですよね！」
「気張れ、フィーロ！」
「フレオン、あんな連中に負けるわけにはいかねぇぜ！」
って、早いな!?
態勢を立て直した３人の乗るフィロリアル達が騎士達をごぼう抜きにする。
『次はスピードダウンとスピードアップをかけるみたいだけど……』

「皆が対処してくれたんだな？」
『もっちろーん☆』
『如何にも！』
通信から聴こえてくる仲間達の言葉に笑みを浮かべる。
「さあ、一気に差をつけるぞ！」
「「おう！」」
「（……理奈さんって、実は多重人格？）」
私がそう言うと、男性陣は勢い良く、北村妹は息吹かしみながらも速度をあげる。
『……もう、形振り構わずみたいだな。次は落とし穴らしい』
おいおい……随分と直接的だな。
『……ただ』
「んな!? 落とし穴!?」
「形振り構わずか！」
「不味い、間に合わ……!?」
『もう掘られてる』

って、速くないか!?　幾らなんでも……って、言ってる場合じゃ……
私達が焦っていると、フィロリアル達は最高速度のまま……跳躍した。
「嘘だろ!?」
「す、凄い跳躍力です！」
「フレオン、凄いな！」
「3人とも、ゴールは目の前だ！　一気に駆け抜けるぞ！」
私達はその勢いのままにゴールを駆け抜ける。
なお、後ろでは落とし穴に騎士達が無様に落ちていた。
「ゴール！　……勝利は勇者様達の手にあったみたいね、フレイア？」
「い、イカサマよ！　あんなデブ鳥どもに……」
「「「ピヨヨヨヨ！」」」
ゲシ！↑フィーロが蹴り上げた音
ガス！↑サクラが横に蹴り飛ばした音
ベキ！　メキメキ……ズシン！↑吹っ飛んできた所にユキとフレオンがダブルキックで木に折れるレベルで蹴り込んだ音

……うわぁ。

「……ついガッツポーズしてしまいましたけど、地雷女に急いで文香の危機……を？」

香が慌てて駆け寄ろうとして、空を見上げる。

すると空から……リオンと小さいドラゴン、そして巨大な体躯ドラゴンが舞い降りてきた。

「ちょ、なんで此処にお父さんが!?」

「ガエリオン!? なんで此処に……って、文香!?」

そのドラゴンから岩谷妹が降りてきたのを見て、慌てて私達は駆け寄る。

「文香、何があった！」

「何がどうで、どうしたら此処にガエリオンに乗って来るんですか!? それから錬さんはどうしたんですか!?」

「ああ、ちょっと命を狙われたからお礼参りに行く途中。んで、錬とか仲間は巻き込まない為にガエリオンがいた村でこっそりと別れた」

そうか……って、大問題じゃないか!?

次回『ぐだぐだ行進曲、そして……』
お楽しみに！

ぐだぐだ行進曲、そして……

今回の文香関係のお話は『ちびだいず』様の『波の尖兵の意趣返し』から借りてきたキャラクター達が登場します。
ちびだいず様のお話とは大分放れているかもしれないので気分を害した方はブラウザバックをお願いします

「……行ってきます」
「文香、お弁当！」
これは、夢……なのかな？　文香の格好が違うし、文香のお兄さんの尚文さんの口調も違うもんね。
「尚兄、何時までもあたしのお弁当なんて……」
「俺がやりたいだけだから」
「……あんがと」

文香は柔らかく笑いながら尚文さんからお弁当を受け取る。
……場面が急速に変わる。
「なんだよ、これ……なんなんだよ！」
大きな口に飲み込まれる人達、そんな人達を救うべく立ち向かうも倒れ伏す男の人、そして……
「残念ね、岩谷さん。私達……良い関係だったのに」
「あ……」
文香のお腹が貫かれて……光が巻き起こる。
「これは……『ブレイク』!?『カリュブディス』！」
文香から巻き起こった光を大きな口が取り込んで……
また変わる……
「取り戻そうぜ、先輩達。みんなも、『綾野瀬（あやのせ）』先輩も……全部！それが出来るのは……あたし達だけなんだろう!?」
文香がそう言うと、倒れていた男の人、両手に鎌を持った女の人、杖を持った女の人、両手にフォーブレイで開発された銃を持った女の人、金色の鎧を身に纏った

男の人の全員が顔を見合わせてから苦笑いをする。
「……ああ！」
男の人がそう言って、ドアを開けて……
「……ん」
私……『メルティ・メルロマルク』はゆっくりと目を開ける。
何時も隣で寝ていた文香はいない。
「……文香」
私は文香がいないことに寂しく思いながら文香の名前を呟いた……

「……で、なんで今すぐにでも殴り込みに行きたいのにこうして足止めされてるんだよ？」
「妹を死に急がせるか、バカ」
「そうですよ、幾らなんでも急ぎすぎですよ。ひょっとしたら厳戒態勢で迎え撃つ気満々かもしれませんよ？」
私達は文香の衝撃的な発言からすぐにガエリオンに乗って飛び立とうとした文香

を全員で縛り上げて椅子に拘束していました。
「……いわた……んん！　文香、誰が文香の暗殺を企んだか知ってるか？　それから何が起きたかを話してくれると助かるのだが」
何時の間にか眼鏡をかけた理奈（？）さんが文香にお茶を差し出しました。
……理奈さんの今の人格って、名前呼びはあんまりしない性格なんでしょうか？
「……本当は言いたくなかったんだけど、黙っててついてこられても嫌だから言うよ。あたしの暗殺の首謀者はミリティナ、『ミリティナ・アールシュタッド』っていう嫌な女だよ。例えて言うなら糞ビッチ（フレイヤ）」
「oh……」
「まんまかよ」
「ミリティナ……懲りてなかったのね」
『……やっぱり記憶にない。ミリティナなんて敵役居たっけ？』
「（流石は薬湯（ソラリス）の薬、良く効く）何か因縁があるのか？」
「あたしが爪の勇者として１ヶ月間戦ってる時にあいつの親父がパトロンになろう

としたんだけどさ、マルティからは娘について良い噂を聞かされてなかったし一匹狼の方が性に合ってたから断ったんだよ。そしたら1回目の波を静めた時のパーティーでミリティナの方から因縁つけられてさ……メルをバカにするわ、仲間を虚仮にするわ、尚兄の悪口を言うわであたしの地雷の上でタップダンスをやられたもんだから、あいつの服を爪で切り刻んで裸にしてやったんだわ」

「……そう言えば、パーティーの時に男の人達の黄色い歓声と女の人の悲鳴が聞こえましたね」

「完全に……とは言えなくても逆恨みだな」

まあ、確かに。恥をかかせた文香も文香ですが、仲間や肉親である尚文さんの悪口を言われて怒らない文香ではありません。寧ろ良く耐えた方だと思います。

「んで、何が起こったかって言うと……」

「錬、次はどんな魔物が相手なんだ？」

あたしは一緒にいると確実におっさんに対して険悪な雰囲気になるので、席を外していたんだ。

「ああ、次の依頼は『ミルソ村』でのドラゴン退治だ。本来はギルドの依頼などでレベリングをする必要があるんだが……文香のパーティーを含めて全員で掛かれば勝てるだろう」
「ミルソ村？　そこって確か……あ」
「なにかあるの？」
あたしが思い出したことに反応したメルが声をかける。
「錬、たぶんそのドラゴンとはあたしと錬の２対１で戦った方が良いと思う」
「どうしたんだ急に？」
「うん、そのドラゴンさ……香の仲間のウィンディアの親代わりのドラゴンだと思う。前に話を聞いたときにミルソ村で時折買い物をしてたって言ってたし、確かな情報だと思う」
「だからと言って勇者達が真っ向勝負をせずとも良いではないか」
そう言ったのは鎧野郎の『マルド』。一言で言うと、『力無き正義は無力』を履き違えた糞野郎で歪んだ正義感に酔いしれる偽善者野郎だ。
……尚兄が追い出された時に「正義は果たされた！」だのとほざいた為に

あたしのジャーマンスープレックスで地面に叩き付けられ、犬神家状態で一晩放置されてからは犬猿の仲だ。（元々こいつがメルロマルクの騎士だった頃から反りは合わなかったけど）

「だからって、作業的に倒したらあたしらを恨んでアンデッドになって復活して村に余計な被害が出るかもしれないだろ」

「あー……あり得るね」

「誇り高きドラゴン故に倒されるのはしょうがないとも考えているのだろうが……誇りもへったくれもない機械的な倒され方をしたら成仏出来んかもしれん……」

あたしがそう言うと、クーフィリアとアルシオがそれを想像したのかそう言いながら頷く。

「なるほど、文香様の提案って今後の事も考えての事だったんですね」

「錬様や文香様がドラゴンを倒しても、ミルソ村に悪影響が出たら意味がありませんものね」

「流石は勇者様の慧眼です！」

そう言ったのは錬の仲間である『ウェルト』、『テルシア』、『ファリー』の３人だ。
ちょっとばかり錬とあたしを盲信しすぎる傾向があるけど……尚兄が追い出されて怒り狂ったあたしがおっさんに飛び掛かった時も必死に押さえ込もうとするガッツがあるし、なによりおっさんや教王の命令とはいえ盾の勇者である尚兄を庇えなかった事を謝ってくれたからマルドよりも信頼度は高い。
「ま、最終的にはパーティーリーダーである錬次第だけどな。で、どうする？」
「……わかった、ドラゴンとの戦闘では俺と文香が戦う。他のメンバーは援護と周囲の警戒だ。ドラゴンが倒れた後でそれを知ってやって来た魔物に襲われたら大変だからな」
「うっし、そうと決まればさっそく行こうぜ！『ポータルクロー』！」
「ちょっと、文香!?」
あたしはドラゴンを恐れてミルソ村の周囲に逃げ込んだ魔物を討伐した際に登録しておいたポータルに全員で飛ぶ。
「よっと！　とっとドラゴン退治に……「えい！」あだ!?」
あたしが歩き出そうとすると、メルに頭をぶん殴られた。

「幾らなんでも急ぎすぎだよ！　みんなの準備が整ってないんだよ!?」
「あ……」
あたしが周囲を見ると、何故かまた犬神家状態になってもがいているマルド（鎧野郎）にお尻を撫でているウェルト、テルシア、ファリーの3人、呆れたような顔であたしをみるクーフィリアとアルシオの2人に溜め息を吐く錬だった。
「……ごめん」
「文香、他の人が苦しむのを減らす為に頑張ってるのはわかるけど……他の人の事も考えないとダメだよ」
「うん……ごめんな」
あたしがそう言うと、メルは微笑みながら「さ、買い物や情報を集めようよ」と言ってあたしの手を引いた。
「おのれ、盾の悪魔の妹の偽勇者が……！」
後ろから来る悪意に気付かないまま……

「まさかウィンディアの親父さんの縄張りを獲るために別のドラゴンが来るとは

な……」

「魔物も結局は動物だからな、そういうのは必要なのだろう」

あたし達は現在、森の中を突っ走っていた。

理由は村人からもう 1 頭ドラゴンがドラゴンの住処かに向かっていったという情報を聞いたからだ。

「……文香！」

「おわ!?」

あたしが錬に抱き抱えられると……

「錬を殺るか」

「尚文さん、落ち着いてください！」

「シスコンも大概にしろ！」

「元康も大概だろ」

あたしは殺気を纏う尚兄に苦笑いをしながら話を続ける。

「いでで……あいつらか!?」

あたしが起き上がると、そこには今しがた墜落したと思わしきドラゴンを押さえ

付ける迷彩色の鱗を持つドラゴンだった。
「ゆ、『簒奪者の竜（ユザーパー・ドラゴン）』!?」
「え、傍聴者（オブザーバー）？」
「ユザーパーだ！　姉さんのやってたシャンフロのボスモンスターの1体だ。ただ……面倒臭いんだよなぁ……」
「つっても助けるしかねえだろ……メルとファリーの2人はドラゴンの治療。前衛メンバーはユザーパーを牽制、後は遠距離で攻撃だ。……行くぜ！」
あたし達は各々の武器を構えて飛び出した。

「だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！　降りて来い、この野郎！」
「ええい、喧しいわ！」
「てめぇの方が……げ!?　退避ー！」
「へ……？　ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
あたしが横っ飛びに回避すると、鎧野郎はユザーパーから飛んできた火炎弾を諸に受けて吹っ飛ばされた。

「だから面倒臭いんだ、あいつは！」
「あんまり地面に降りてこないからなんですね!?」
「なるほど、これは面倒臭いな！」
近くにはユザーパーから撒き散らされる火炎弾を必死に避ける錬、ウェルト、アルシオの 3 人がいる。
「動き回るから弓の狙いが……！」
「狙いづらい……！」
後衛組のテルシアとクーフィリアも空中を飛び回るユザーパーを狙いにくいのか苦虫を噛み潰したような表情で呻く。
「くそ、面倒臭い……」
『爪の勇者、あの竜帝の力を借りろ』
「って、どうしたんだよ急に」
『空を飛ぶ相手には此方も空を飛ぶのが最適解だろう？ 最初の『戦乙女』のデータが組み込まれたナノマシンで救われたが故に『その武装（W・A・R・S）』を身に付けられ、『龍』になれるお前が感じていた事ではないか』

「……それもそうか。錬、あのドラゴンと交渉してみてくれ！」
「なんで俺が……そういうのは文香がするもんじゃないのか？」
「四聖勇者が交渉した方が通りやすそうだし……なにより竜騎士には『爪』よか『剣』だろ？」
あたしがそう言うと、錬はふっと笑って「それもそうだな」と言ってドラゴンの下に向かった。
「ガエリオン……ヘタレ竜帝の癖に良く戦うのを承知しましたね」
「お義父さんもドラゴンだもの、縄張りを荒らされて黙ってる訳にはいかなかったんでしょ？」
「あー、あり得ますね」
あたしは香とウィンディアにガエリオンがヘタレだのなんだの言われる度に爆笑しているヴァレリアに溜め息を吐いていると、続きを話す。

（注）ぐだぐだな為にちょっとダイジェストでお送りします。
「いやー！　文香助けて！」

「メル!? この、首を攻撃して……だあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!? 飛ぶな、揺れる！」
「ガエリオン、突っ込むぞ！」
『おお！』
「錬、今のタイミングで突っ込まれると……おうわ!?」
「うわっと!? すまない文香、大丈夫か？」
「あ、ああ……って、メルを助けねぇと!?」
「ぐはははは！ くらいやがれ……ああ、我輩の斧を返せ！」
「落ち着け！ 地上に降りてきた時に取り返せる！」
「そんなことは良いから早く助け……ほえ？」
「げ……」
「いやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
「め、メルぅぅぅぅぅぅぅぅ!?」
「あぶなーい!?」
「しゃあ、翼を斬った！」
「もうこれで奴は飛べない！ 一気に畳み掛けろ！」

「ガハハハ！　我輩が最後の一撃を……」
「いや、止めを指したのは錬と文香だぞ……」

「つ、疲れた……」
あたしはユザーパーの焼かれた肉を頬張りながらそう呟いた。
なんせあの後ガエリオンに騎乗した錬が奴を地面に叩き落としたから袋叩きに出来る様になったものの、奴が大回転をかましたお陰でウェルト達がぶっ飛ばされて戦闘不能になるわ、口にくわえられたメルが落下死しかけるわ、鎧野郎が手柄を横取り仕掛けるわで大変だったからな……
後、錬が突っ込んだ時に落下しかけたあたしをお姫様抱っこで……だあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！　それは、なし！
因みにユザーパーの肉で焼肉パーティーをしているのはユザーパーの素材を手に入れた後で、村がユザーパーの死体を管理することになったんだけど……確実に肉の方は腐らせそうだったので、勿体ないからドラゴンの肉を食って村の活性化に役立てようとあたしが錬に提案したからだ。

「旨い旨い」
若干固くて噛み千切りにくいけど弾力はあるし、味も濃い……うん、十二分に商品として使え……!?
「……文香？」
「あ～……錬、あたしちょっとトイレ」
「そうか、早めに戻って来いよ」
「ん」
あたしは感じた気配を刺激しないようにそう言うと、そそくさと錬達から離れる。

「……さて、と」
あたしはトイレ……ではなく、殺気を駄々漏れにしている気配に告げる。
「出てこい、入るのはわかっているぞ」
「ふむ、気付いていたか。ならば……ミリティナを辱しめた罪を悔いながら、美しき僕の手にかかって死ぬと良い！」
答えは……あたしに向かって飛んできた五本の剣と……

「ルハバート様の仇！　覚悟！」
「爪の偽勇者に死を！」
「「「「原作の為に異分子（イレギュラー）に死を！」」」」
四方八方から襲い掛かってきた黒衣に身を包んだ亜人達と人間達、それから訳の解らないことを吠える純白の衣装に身を包んだ人間達だった。
……いや、これは予想外過ぎるだろ!?

次回『死闘の果て、神速と黄金』
お楽しみに！
……遅れてすいませんでした！

死闘の果て、神速と黄金

文香の話の続きです。
お待たせして申し訳ありませんでした！

「（久遠、どう思う？）」
マルティは自分の中にいる自分を決定的に変化させ、今までの交遊関係を粉砕し自身を文字通り生まれ変わらせた人間に問う。
『始めに襲った奴は確実に波の尖兵（原作の転生者）ね。黒装束は片方はシルトヴェルトの『影』でもう片方は……教会派の『影』じゃないかしら？　白装束は……ちょっとわかんないかな』
「（やっぱり）」
彼女の言葉にマルティは溜め息を吐く。
波の尖兵……彼女の本体とも言える存在が世界を引っ掻き回す為に送り込んだ外

道どもの総称である。
　彼らは何れも勇者武器を奪う能力を身に付けているため、勇者にとって天敵とも言える存在である。
　因みに『影』とは我々で言うところの諜報機関と暗殺組織の合の子の事である。
「（って、事は……）」
『ん、ミリティナは女神の分体（あんたの元同類）でしょうね』
「（やっぱり、そうなのね……）」
　マルティは頭を抱えながら文香の話に耳を傾ける……

「おぉおおお

「てめぇがな！」
「へ……ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
あたしは斬りかかってきた白装束を蹴り飛ばして飛んできた剣の盾にすると、白装束を越えてやって来た剣を横っ飛びに回避する。
「くらえ！」
「ぐ……まだだ！」
「ぐあ……!?」
「くたばれぇぇぇぇ！」
「くたばるかよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」
「美しく散りたまえ！　『従剣劇（ソーヴァント）・三重奏（トリオ）』……『影絵三役（シンクロニント）』！」
「ぎゃばら!?」
あたしは肩に刺さった短剣の痛みに耐えながら短剣を投げた亜人をぶっ飛ばし、その隙に斬りかかってきた白装束の攻撃を回避すると、後ろからナルシスト野郎の剣の動きに合わせて斬りかかってきた剣に三枚下ろしにされた。
「はぁ、はぁ……くそ、数が多い……！」

あたしは昔……物部学園が異世界に流された第二次漂流学園の際にかち合って以来、矢鱈と絡んでくる白装束どもと黒装束……十中八九シルトヴェルトとこの国の教会派の影が多数いるせいでナルシスト野郎に近付けねぇ……！

あと、何だよあの空飛ぶ剣は!? 反則だろうが！

「エアストクロー！」

「『従剣劇・四重奏（カルテット）』……『四面三角の錐（クアテッド・デルタ）』！」

「くそ！」

あたしは正三角形状に整列した剣の中心部分から飛んできた四角錐型の攻撃を転がりながら回避する。

「さぁーて、こっからどうするか……」

あたしは今ある手札で何が出来るかを考え……

「文香～？　何処～？」

ようとして聞こえた声に顔が急速に青ざめていくのが解った。

何でメルが……!? いや、幾らなんでも帰りが遅すぎたか！

「くそ、無理でも何でも行くしかねぇ！」

あたしは隠れていた木から飛び出し、ナルシスト野郎に突っ込む。
「醜い特攻だね……美しく死にたまえ！」
「今だ、殺れ！」
「死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」
「悪いが死ぬ気はねぇんだよ！」
あたしは直撃する剣や攻撃だけを捌き、防ぎながら進撃する。
「貰っ……たぁ！『ダッシュクロー』！」
あたしは加速力を威力に変換するスキルでナルシスト野郎を……
「湖面に映る僕でもみたのかい？」
「え……」
すり抜け……いや、幻、影……!?
「『従剣劇・独奏（ソロ）』……『至高の一閃（プライマルスラッシュ）』！」
「エアストクロー！　ぐ……あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
あたしはエアストクローを放つことでどうにか直撃を避けたが、その余波で大きく切り裂かれながら吹き飛ばされる。

「今の音は……文香!?」
あたしが吹き飛ばされたのはよりにもよってメルのすぐ側だった。
「メル……逃げ、ろ……あいつらの狙いは、あたし、だ……」
あたしは痛みでろくに動かない体にむち打ちながら立ち上がり、メルの盾になる。
「やだよ！　文香が死んだら、盾の勇者様や文香の仲間が悲しむんだよ!?　文香も逃げようよ！」
「良いから、逃げろ……こいつ、は……あたしの、蒔いた、種……だから、な……」
あたしは泣きながらすがってくるメルの頭を撫でながら近付いてくるナルシスト野郎や影、白装束に立ち向かおうと……？　なんか上から声が……
「……に」
「『ダンスマカブル』！」
「……？　なんだ、声が……？」
「……香に」
「『マナストライク』！」

「……上か!?」

ナルシスト野郎が上を向くと、全員が上を向き……

「文香に、僕の友達に……何をしてるんだお前らぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「『ブレイブスパーク』！」

上から降ってきた人影の踵落としの衝撃波と拳に纏わせた雷の一撃で間一髪回避したナルシスト野郎や一部の影を除いた全員が吹き飛ばされた。

「文香、大丈夫!?」

「岩谷、生きているか」

あたしは駆け寄ってきた二人を見て思わず苦笑してしまう。

「『ルプトナ』、これが大丈夫に見えるか？　『鋼山（はがねやま）』先輩、そこはまあ……なんとか」

そこには第二次漂流学園の際に『精霊の世界』で知り合って以来、ずっとあたしと喧嘩友達のルプトナとあたしがクエスターになって以来ずっと頼もしい先輩である『ルーンナイト』の『鋼山龍牙（りょうが）』先輩だった。

「そっかそっか……よくも文香を痛め付けてくれたな!? 全員まとめて叩きのめす！」
「それについては同感だ！」
「それは俺達も混ぜろ！」
って、錬達も来たのか!?
「じっちゃん、お願い！」
ルプトナは自分の『永遠神剣』の『揺籃（ゆりかご）』から守護神獣であるリヴァイアサンの『海神（わだつみ）』を呼び出して……って、おいこら待て!?
「全員、木の上に逃げろ！ 巻き込まれるぞぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!?」
あたしはメルを抱えるとそのまま最後の力を振り絞って飛び上がり、木の上に逃げ延びる。
「リヴァイアサンだから……津波か!? 全員逃げろ！」
「『タイダルティアー』！」
錬がリヴァイアサンであることに気付いて慌てて指示すると、全員が木の上に登った（なお、アルシオとクーフィリア、鋼山先輩は既に逃げている）。

そして、敵は……あ!? ナルシスト野郎がいねぇ、逃げやがったな!?
ナルシスト野郎以外の敵は大半が海神から放たれた津波に押し流されたが、間一髪で木の上に逃げ延びていた。
「どんなもんだ「この大馬鹿野郎！」ふぎゃ!?」
あたしは速効性のポーションを飲むと、そのまま木から飛び降りてルプトナに飛び蹴りを食らわせた。
「何すんだよ!?」
「それは此方の台詞だ！ いきなり周囲も巻き込みそうな大技を使うな！」
「何を!? あんな奴等にやられそうになってたくせに！」
「ああ!? ちゃんとクエスターの力が使えりゃ速攻で倒してたわ、大ボケ！」
「言ったな！」
「やるか！」
あたしとルプトナは互いの服の襟首を掴み合い、言い争う。
「今のうちにルハバート様の仇を……！」
「いまだ！ 偽勇者に……」

「「うるさい！」」
「げび!?」
「ぐは!?」
あたしとルプトナは襲いかかってきた相手に蹴りを見舞うと影や白装束達に向き直る。
「おい、ルプトナ」
「……何？」
「どっちが多く倒せるかで勝負といこうじゃねぇか……喧嘩はその後だ！」
「乗った！」
ルプトナは拳を、あたしは爪を構えて影や白装束達に笑いかける。
「つーわけで……」
「ぶっ飛ばす！」
あたし達は同時に走り出した。
「「「「……ええ～」」」」
「はぁ……あの二人は……」

「結局……何時でも何処でも」
「あの調子……か」

「それで蹴散らした後でガエリオンに尻尾に縛り付けて空中で曲芸飛行をさせる拷も……じゃなかった、尋問したら快く答えてくれたから御礼参りに行く途中なんだよ。因みにガエリオンが力を貸してくれたのは下手すりゃウィンディアにも被害が及ぶかもしれないからだとよ」
「おい、今不穏な言葉があったぞ」
今思いっきり拷問って言いそうでしたよね？
「そんな訳であたしはさっさっと……行かせてもらう！」
んえ!? 何時の間に縄を解いたん……って、爪で縄を切ったんですね!?
「させない！」
「えい！」
「ふぎゃん!?」
『え、もう!?』

文香が出ていくと思われた矢先に現れた女の子達……にぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ!?

「取り合えず兄さんと尚文さんは後ろを向いてください！　文香も一緒にこの子達を隠してください！」

「あ、ああ……」

私達は何故か素っ裸の女の子達を毛布で包みます。

「ごしゅじんさまたちをこまらせないで！」

「そうだよ！　かおるさまもなおふみさまもあなたのことをほんきで……」

「え、なんで私の名前を知って……」

「理奈様ー！」

「フィーロとサクラが人間形態に……あ」

「フィオ、リコ……タイミングが悪すぎる……」

「え、この子達、フィオとリコなんですか？」

見た目が全然違う……って、もしかして……

「この子達は……」

「フィーロだよ！」
「サクラだよ！」
マジですか!?

夢を見ている。文香にとって、辛くて悲しい夢。
「なんでだよ、なんで戦わないといけないんだよ!?『アマラ』ぁ！」
文香がそう泣き叫びながら右手に剣を左手に変な光る剣を持って、姉様が持っているのと同じような御札を構えている女の子と戦っている。
「……私も、文香と戦いたくはありませんでした」
「だったら……「ですが」!?」
文香が説得しようとしたら、女の子は悲しそうな顔でそれを妨げた。
「この身は、もう死んでいる。文香もわかっている筈です」
「ふ、ぐぅ……！」
「そしてお兄様は私を救うために『奈落』に染まり、時の流れを止め、今日を繰り返している。止めるには……」

「わかってる、わかってるんだ……だけ、ど……だけどぉ！」

文香は泣きながら幼い頃に文香が偶然女の子のいる『リーフワールド』に飛んで、一緒に遊んだ文香にとって初めての親友の『空閑(くが)アマラ』さんと斬り結ぶ。

「……『空蝉(うつせみ)』」

「!?」

文香はアマラさんがいきなり丸太になったことで戸惑うけど、咄嗟にその方向を向きながら右手の剣を振るって……

「あ……」

「……これで、良いのです。文香……ごめん、な、さい……」

剣がアマラさんを切り裂き、アマラさんは文香に微笑みながら倒れ伏す。

「アマラ!?」

「……此処だ！」

「ぐ!? しま……」

白髪の男の人が持っている刀が戦っていた黒髪の男の人が持っていた刀を弾き飛ばした。

「っ……うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！『アラヤ』ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

アマラさんから離れた文香は泣きながら刀を手放した男の人を……アマラさんのお兄さんであり、文香の初恋の人である『空閑アラヤ』さんを両手の剣で斬り倒した。

「あ……ぐ……まさか、君に……倒されるとは、な」

「あ……う、ぐ……ぅ……ううう」

「だが、止めてくれて……ありがとう……」

「アラ、ヤ……」

「そして……すまなかった」

アラヤさんは苦笑いをしながら文香にお礼と謝罪を言ってアマラさんの側によろよろと歩み寄る。

「『ナナシ』、行くぞ」

「はい、マスター」

「やっと結界を壊せた！」

「岩谷！　無事……では、なさそうだな」

白髪の男の人は何時の間にかいなくなってたけど、文香の仲間の人達が走り寄ってきて……文香の様子を見て全てが終わった事を悟り、悲しそうな顔になる。

アマラさんが消えアラヤさんは文香のいる街にとって重要な事を言うけど……文香の心は完全に折れていた。

場面が変わる。

「が……げ、えべ……」

「ぶげ、べぇ……」

「はぁー、はぁー……！」

色々な感情が要り混ざった表情で佇む文香の周りには顔も体もボロボロの如何にも悪そうな男の人達と女の人、その人達に襲われそうになっていた男の人と女の人が怯えていた。

「おい……」

「ひ!?」

「失せろ。それから……この時間にあんまり人気がないところに行くんじゃねぇよ。だから横恋慕した糞女やその取り巻きが襲って来るんだろうが」

「は、はい！　い、行こう！」
「う、うん！」
文香の暗そうな言葉で正気に戻ったのか二人は慌てて出ていく。
文香はふんと鼻で笑うと、変な箱を開いて見ると溜め息を吐いた。
「はぁ……尚兄ってば、過保護すぎだろ……でも、まだ……あたしは……」
そこには文香を心配する文の言葉が大量に書かれていて、本当に心配している事が良くわかる様な……手紙？だった。
それでも、初めての親友と初恋の人。二人を悲しい形で失って荒んだ文香の心を癒すには足りなくて……
「……アラヤ、アマラ……あたしは、あた、し……は……」
文香はそんな事を呟きながらよろよろと歩き出す。
「……なんだ、桃の……香り？」
文香は何かを感じたのか、路地に入ると、そこは何処かの街だった。
「……何処だ、此処？」

そこが文香にとっての転換期を迎える場所だっていうのを、文香はまだ……

「……文香」

私は文香にとって悲しい過去を夢で見て悲しくなる。

アルシオさんやクーフィリアさんと合流したときに聞いた文香の昔話で聞いた時も悲しかった。けど……

「実際に見たら、悲しいよ……悲し、すぎるよ」

私は目に涙を浮かべながらそう呟く。

「だから……私は絶対に文香の側にいるもん」

私達を巻き込まない為に一人で行ったことやみんなを心配させた事、襲われたときに一人で戦おうとしたことへのお説教……絶対に聞いてもらうからね！

私は気付いていなかったんだけど……

「文香の奴、愛されているわねぇ」

「ああ……そんな文香だからこそ、敵対的な関係にあったクエスターと永遠神剣使い達の縁を繋ぎ大ラグナロクを乗り越えられたのだろうな」

「私にとって、自慢の親友です」

宿の外で、私の暗殺を目論んでいた三勇教派の影を件の二人と文香のミッドガルドと大ラグナロクでの宿敵とも言える人が倒していた事を後で知ることを……

次回『行商と陰謀と大立ち回り』

お楽しみに！

行商と陰謀と大立ち回り

お待たせして申し訳ありません……

「で、なんであたしが尚兄の『行商』の手伝いをしないといけないんだよ？　あたしはさっさと……」

「『旅は道連れ世は情け』……っと、諺は言っています。お金を稼ぎながら情報もしれっと入手できる……行商も立派な手段なんですよ」

「屁理屈だろ……つーか、世界が違っても諺が同じ場合もあるんだな」

「……日本だからでしょうか？」

あれから数日後。私達は文香の御礼参りの旅に同行していました。

あの後、フィーロとサクラが人間になったことで混乱をしていましたが……

理奈さんが溜め息と共に「フィロリアルはクイーンに育つと人間に変身することが出来る」と説明された事で納得はしましたが……その前に魔物紋が無効にされると

いう問題とフィーロとサクラの人化の際の服が普通の服では戻った際に破壊されてコストが嵩むという大問題が発生したために王都に戻って……と、相談していた所にいきなり魔物商さんが来たので一晩預けて特殊な魔物紋を付けて貰い、服の方も理奈さんが『お試しセット』と称して一ヶ月間程本人の魔力で維持できる特殊な服を用意してくれました。

……でも、理奈さんの口調が職人気質の姉御肌みたいな感じだったんですよね。

「一体、幾つ人格があるのやら……」

「まー、お陰で旅に同行出来たんだから良いんじゃねえの？」

そりゃまぁ、そうですが……

ああ、サクラとフィーロですが……姉妹かと思うほど仲が良いんですけど性格の違いは結構あります。

サクラは大人しく一人称が『私』なのに対して、フィーロは明るく元気で一人称は『フィーロ』です。

後、フィーロが我が儘に駄々を捏ねるとサクラが大人しくやんわりとそれを注意

します。

……なんか、『元気でヤンチャな姉』と『真面目で大人しい妹』みたいな構図ですね。

「にしても……結構売れるもんだな」

「盾の能力で薬の効果がブーストされてますからね、口コミが広がれば売り歩きでも売れますよ」

一昨日のおばあさんの息子さんとか、昨日のアクセサリー商人さんとかにも情報を広げてもらってますしね。

「ついでに情報も……ね」

現在、ミリティナは様々な冒険者の他に勇者にも召集をかけているそうなのですが……兄さんと理奈さん、樹さんと凛さんには王様から任せられた依頼等をしていて忙しいと断られ、錬さんには行方不明の仲間……文香を探しているので無理と断られたそうです。

「あーくそ、どうするかな……」

私達の横をそう言いながら唸っている男の人が通り過ぎました。

「どうかしたんですか？」
「ん？　顔は、良い……な」
私が呼び掛けると、男の人は私に失礼な事を小声で言いました。
「聞こえてますよ」
「おっと、すまねぇ……嬢ちゃん達、劇に出てみないか？」
「詳しく聞きましょうか？」
「香ぅー!?」
さぁて……『帝国歌劇団』で鍛えた演技の腕を……あっと、先ずは話を聞いてからですね。

「……で、香はその男の劇に今出てんのか？」
「うん。今日だけだけどな」
あたしは尚兄に香がまさかの即答をして劇の舞台に出ることを伝えると、尚兄は溜め息を吐いた。
「あいつ、そういうのにはあんまり乗らないと思ってたんだけどなぁ……」

「なんか劇に思い入れがあるみたいなんだよ」
「ふーん……」
尚兄は心底どーでもよさそうな感じでそう言う。
「そう言えば、香の出る劇ってどんな内容なの？」
ウィンディアが聞いてきたから、あたしは借りパクした台本に書かれている題名を読む。
「え～と……『怪盗紳士』だってよ。内容は……まあ、ルパンだな」
「よーするに、宝物を盗むついでにヒロインの心も盗んじゃうんだな？」
「まぁ、その通りなんだけど……ただ、香がやるヒロイン役のキャラが濃いんだよな……」
錬金術で作られた人造人間（ホムンクルス）で体が猛毒を出すんで触れられないって、どういうヒロインだよ……何故かこれを見た瞬間に香が凍り付いたけど。
「あれ？　なんか姉ちゃんと元康の兄ちゃんみたいな役があるぞ？」
「「へ？」」
キールの言葉にあたしと尚兄とウィンディアが台本を覗き込むと、ヒロインと主

人公の怪盗の仲間（医者兼錬金術師、お調子者の技術者、ニヒルな戦闘要員、謎の貴族、恋敵的な薬師）の他に狂言回し的な女好きの兄とその男の異母妹で冷静な突っ込み役の女の役があった。……確かに役割が元康と香に似ているな。もしかして二人って、本当に異母兄妹か？

「……ん？　キール、外で誰か話してるから聴いてきてくれないか？」

「わかった！」

「相変わらずの地獄耳だな……」

「まあな～」

あたしが香と元康の関係で少しばかり悩んでいると、外からぼそぼそと話し声が聞こえたのでキールに偵察に行かせた。

「尚兄、香が帰ってきたら……」

「文香姉ちゃん、兄ちゃん、ウィンディア！　大変だ！　香姉ちゃんが狙われてる」

「「……はい？」」

あたし達が慌てて駆け込んできたキールに混乱していると、キールは慌てて白装束連中が「元康側のイレギュラーであるあの女は今は尚文達から離れている。殺る

なら今だ」と通信機っぽい物で連絡をとっていたらしいんだ。

……そーいや、大ラグナロクでも『ベルバザード』や『エヴォリア』、『ダラバ』や『ショウ』そして……『ジルオル』を助けようとしてたら矢鱈と「原作を曲げようとすんじゃねぇ！」だのなんだの言いながら襲い掛かってきやがったな。

……全部返り討ちにしたけど。どいつもこいつも能力は凄くて驚いたけど、能力頼みの鍛練不足に数頼みの連携不足、挙げ句の果てに連携不足を突かれての同士討ちだので大ラグナロクの後半からは足止めにもならないかませ犬だったんだよな。

「って、言ってる場合じゃねえ！　早く香を助けに行くぞ！」

「おうよ！」

「ええ！」

「わかってる！」

「フィーロも行く～！」

「サクラも！」

あたし達は慌てて香が行った男の劇団の元に向かう。

おっさんは……いた！
「おっさん、香は!?」
「ん？ ああ、香の嬢ちゃんだったら劇団にいてほしかったんで交渉したんだが……断られちまってな」
「どっちの方向に歩いて行った!?」
「あん？ え～と……なんかに気付いたかの様な表情で向こうの路地裏に行ったが……」
「あんがとよ！」
あたしがおっさんに礼を言うのと同時にあたし達はおっさんが指し示した路地に突っ走る。
「ん……？ 向こうの方からなんか音が聴こえる！」
って、事は……!?
「もう既に戦闘中かよ!?」
「香！」
あたし達が慌てて駆け付けるとそこには……香が白装束連中を一方的に叩きのめ

しているところだった。

「いやぁ、大盛況だったぜ！　あんがとな、嬢ちゃん！」

「いえいえ、困った時は助け合いですから」

私は劇が終わった後、劇団の団長さんにお礼を言われていました。

「にしても……嬢ちゃんの演技って、図抜けてたな」

「ええ、まあ……」

何せ演技と殺陣の動き、今回は披露できませんでしたが何らかの芸の動きに関しては最高の指導者（各国の華劇団の団員）がいましたので。

「嬢ちゃんが望むのなら、俺の劇団で働かないか？」

「あ～……申し訳ありませんが、私は旅をしていまして。１つの所で働くわけにはいかないんですよ」

「そうか……まあ、無理強いするのも悪いしな。旅の目的を終えたら考えてくれないか」

「はい、ありがとうございます」

私は報酬代わりに劇で使った衣装を貰い受けると、それを身に付けたまま……さっきから私に向かって殺気を放っている人達を引き付ける為に近くの路地裏に向かいます。

「にしても……何故に『カルディア』さん達と私のご先祖様、私達の事が劇になってるんでしょうか？」

恋の結末は私のご先祖様ではなく、ルパンさんの勝利になってましたけど。

……思えば、カルディアさんと『えれな』さんの血の影響で金と青のオッドアイになってて（向こうではカラコン、今は魔法で黒目にしています）気味悪がられた事と父親が誰かわからない（既に結婚していた兄さん以上に女にだらしない人を思って母が身を引いた為です）で母が死んだ後に父さんに引き取られるまでは本家の人に虐められた事で自分に対する肯定が出来ずに兄さんの事も自分の事も認められず、兄さんもいきなり同居することになった妹にどう接したら良いかわからずにギクシャクしていた所で初めて巻き起こったタイムスリップでしたね。

「まあ、だからこそ私達は本音を話せたんですけど」

タイムスリップ先での大騒動の際に互いの思いの丈をぶつけたお陰で私は自分を

兄さんは私を認められたんですけどね。

「その後が大変でしたけど」

6年生の頃の撫子ちゃん（クロックゼロ）の騒動、中学1年の時のえれなさんの事件（蝶々事件ラプソディック）、同時期からの長期休みの度に太正へのタイムスリップ果ては高二の時のテロリストとの大立回り（サクラ大戦シリーズ）に合間合間の邪神騒動（神我狩）にその他諸々……あれ？　私も兄さんも良く死にませんでしたね!?

「まあ、そういう訳で……！」

「げ!?」

私は襲い掛かってきた白装束の人間の攻撃を避けると、顎に掌底を打ち込みノックアウトしました。

「あんた達を全員ぶっ倒します。エアストスロー！」

私は文香を襲った連中の仲間にそう言いながら短剣を投擲します。

「「「「投影開始（トレース・オン）！」」」」

白装束達は同じようなかけ声と共に、同じような武器を持って襲い掛かってきますが……遅い！

「『ダブルアリア』！切り裂け、『幻影閃（げんえいせん）』！」

私は何時の間にか戻っていた能力を使いそこから逃れると、複数の幻影の斬撃を放ち切り裂きます。

「くそが！王（ゲートオブ）の……」

「『クロノブラスト』！」

どう考えてもこんな人がいる場所に近い所で使う攻撃ではない攻撃を行おうとしたバカな人に空間を擬似的に破壊する魔法を使ってぶっ飛ばします。

「このイレギュラーめ……！元康（スケコマシ）に妹なんていらない……「いらねえのはてめぇらの方だぁ！」ぎゃあ!?」

そう悪態をついた人の顔面に文香が蹴りを叩き込みました。

「香……似合ってるな」

「ありがとうございます」

そりゃ私の先祖が着てた服ですしね。

文香が暴れまわった事と騒ぎを聞き付けた人達が来た事で白装束達は逃げ出し、私達も慌ててこの街を出ることになりました。

「さようなら。この世界の私（愚かな）」

「……あ」

「文、香……？　文香、文香ぁぁぁぁぁ!?」

文香は女の子……『鴇田奏海（ときたかなみ）』さんを髪が長い文香……『空閑フミカ』の攻撃から庇って、倒れ伏して目から光が消えて奏海さんの悲鳴が響くのが略同時だった。

……文香が桃の花の香りに惹かれてたどり着いた場所……『豊葦原瑞籬内皇国《とよあしはらのみずがきのうちのすめらみことのくに》』（文香は「いや、国名が長すぎだろうが!?」と突っ込んでいた）で義理のお兄さんを捜していた奏海さんと出会った文香は奏海さんを何処かに連れて行こうとしていた人達を薙ぎ倒して助けて……その後で来た人達にこの国の一番偉い人である『翡翠帝（ひすいてい）』ご本人であると知らされてそのまま仕える事になったんだよね（なお、文香はその事実を知った際に「不敬罪で死刑は勘弁してください！」と土下座して奏海さんから苦笑いされた）。

その後で奏海さんの通っている学校に行って行方不明だった奏海さんのお兄さん

である『鴇田宗仁』さんと会ったんだけど……彼は記憶喪失になっていて、文香はそんな彼に対して「ふざけんなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！　奏海は必死にお前を捜してたんだぞ！　なりたくもない翡翠帝の影武者になったのも、全部お前の為だったんだぞ！　それが記憶喪失だ!?　この糞野郎が！」って言って掴みかかって奏海さんに止められたんだけど、「奏海の事を思い出すまでてめぇを追い回してやる！」って言って本当につけ回したんだよね……

その結果、二人の幼馴染みである『稲生澄』さんがアイドルをやってるのを見て唖然としたり、自称本当の前皇帝の娘である『宮国朱璃』さんを煽って喧嘩したり、『エルザ・ヴァレンタイン』さんと考え方の違いで言い争ったりしながらも仲を深め、心の傷を癒していって……その時は来たんだ。

「てめえは……何者だ！」

「私の名は……空閑。空閑フミカ……アラヤとアマラの名字を継ぐものですわ。愚かな私」

もう一人の文香は初恋の人と親友を殺した事実に耐えきれず文香達が敵対していた『奈落』に身を染めて様々な世界を壊しながら、二人が生きている世界をもう一

度創ろうとしていたんだ。
「ふざけんな！　アマラがそんな事を認めるかよ！　自分が死ぬことをわかっても、アラヤを止めようとしたアイツが……」
「あら？　それは……貴方の都合の良い解釈でしょう？」
「っ……それは……」
文香はフミカの奈落を纏った力と精神的に安定していなかったせいで惨敗して、宮国さん、鴇田さんと落ち延びていって……二人にアマラさんとアラヤさんを殺してしまった事、そしてその絶望でフミカと同じようになってしまうんじゃないかっていう心配を言ったの。
けど……二人はそれを聞いて文香を慰めて、励ましたの。
その励ましや自分がしている事を自分で拭おうと決意して……最後の最後で文香は誰かを犠牲に出来ずに負けた。
場面が変わる。
『行ってこい。文香』
『私達は、貴方のそばにずっといるから……』

「アラヤ、アマラ……ありがと」

文香は死の淵の中でアラヤさんとアマラさんの霊に再開した文香は二人から許され、そして自分を許す事ができた。

そして……

「そっか。それで……良かったんだよな。何処までも、まっすぐにあたしは、突き進むだけだ！……『継承（サクセション）』！」

文香の持っていた宝石が光に包まれ、そして……

「よう、大馬鹿野郎（空閑（フミカ））」

「そんな、どう……して」

文香は闇に落ちた自分の剣を確りと受け止め、向かい合っていた。

『やっと、文香とのパスが繋がったわ！　続きは文香に聞くことね！』

あ、漸く思い出せた。文香の夢を見る切っ掛けは……『ナルカナ』さんだ……

……

私はゆっくりと目を覚ます。

「……文香、もうすぐシャードは力を取り戻せるから。そしたら、文香の今までの

事全部話してほしいな」
私はそんな事を思いながら起き上がった。

因みに香の事件のルビは香と元康の遭遇したゲームの題名です。
次回『合流及び偵察』
次回もお楽しみに！

合流及び偵察

錬達との合流です。

「尚兄、香。そろそろアールシュタッド領だから、あたしは荷台に隠れてる」
「おう」
「わかりました」
あたしは尚兄と香にそう言うと、尚兄が作ってくれたマントのフードを被り荷台の奥まった場所に潜り込んで身を隠す。
調べられると思ったけど……あっさり通れた。
「……街の警戒は厳重なのに尚兄や香を警戒しねぇとか、ありえね〜」
「ドラゴンを連れた文香が一番警戒されてるみたいですね」
「俺と香は……全く警戒されてないな。守衛に聞いてみたが、俺達と文香は別行動を取ってると思っているらしい」

あ～……確かに。復讐の為に尚兄や香と別行動をとろうと思ってたからな……
因みにガエリオンはリオンやノワールと一緒に空を飛んで警戒されない様にしている。
「さ～て……こっからどうするかな？」
「一先ずは宿屋を探して、馬車を停めませんか？　流石に馬車ごと動かしながらの移動は目立ち過ぎますし」
「確かに……」
あたし達がこれからの予定を考えていると……
「見つけたぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
「げ!?　こ、この声は……!?」
あたしが聞き覚えのある声に周りを見渡すと、近くにある宿屋から見覚えのある人影が飛び降りて来て……
「やっぱり此処に来たなぁ！」
「ぐべぇ!?」
「「文香!?」」

あたしはその人影……ルプトナにドロップキックを叩き込まれた。

文香達が来る数分前……

「……で、本当に文香は此処に来るのか？」

「うん。来るね」

錬様が文香の友達であるルプトナさんにそう尋ねると、ルプトナさんは頷きながらそう言った。

「文香は僕たちを巻き込まない為にこっそり出たんだろうけど……そもそも僕たちがいる時点で既にその考えは成立しないんだよ」

「ああ、アイツの思考回路は知り尽くしているからな。アイツはやられたらやり返す性格だから、必ず此処に来るはずだ」

ルプトナさんの言葉を鋼山さんが補足する様にそう言った。

「まあ、錬には複数の依頼が来ていたからそれを優先すると考えたんだろうが……」

「私達が分散して解決するっていう手段を取るとは予想していなかっただろうね」

アルシオさんが錬様の状況から文香が予想した事を言うけど……クーフィリアさ

んが錬様の取った手段を言ってニヤリと笑う。

　因みに依頼の方は森に出現した肉食の魔物と平原の盗賊団の捕縛だったんだけど……森の方はクーフィリアさんとルプトナさんに同行したファリーさんとテルシアさん曰く「まるで庭の様に森の中を飛び回って魔物を近付けさせなかったわ」と「……全然目で追えなかったわ」、盗賊団の方はアルシオさんと鋼山さんに同行した錬様とウェルトさん曰く「……凄かった」と「あっという間に取り押さえてしまいました」らしい。

　私の方は王都に行って文香がいなくなった事と、それを捜す為に依頼は受けられない事をお父様とお姉様に話に行ったんだ。

　……そこで護衛として来ていたマルドさんが樹様のパーティーに（多少強引に）合流するっていうハプニングもあったけど、偶々近くにいた冒険者である『バクター』さんが加入してくれたからトントン……いや、寧ろ文香と連携を取れそうな点ではプラスかな？

　それで私達は元凶であるミリティナのいるアールシュタッド領に来たんだけど……

「まさか、文香がミリティナのお父さんの命を狙ってる偽勇者扱いされてるなんて……」
「しかも錬様に取り入った盾の悪魔の仲間扱いされてましたしね……」
そんな事をミリティナが自分の名前で言い触らして冒険者を募っていたんだ。
……領民や以前の依頼で文香を知ってる兵士や冒険者には全然信じられていなかったんだけどね。
文香は１ヶ月で色んな領土を寝る間も惜しんで回って、その領土が困ってる事を最速で解決してきたから、民達や兵士達にはかなり信頼されてるんだ。
「文香……何処にいるんだろ」
私がポツリと呟くと……
「見つけたぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
「え……る、ルプトナさん!?」
何かをみつけたのか、ルプトナさんが窓から飛び降りると……
「やっぱり此処に来たなぁ！」
「ぐべぇ!?」

「「文香!?」」
フードを被った人にドロップキックを叩き込んだ……って、文香ぁ!?

「けほ……の、喉がいてぇ……」
「文香、お水」
「サンキュ……」
あの後あたし達は慌てて駆け寄ってきたメルに錬達がいる宿屋に引き入れられ、なし崩し的に合流することになった。
「にしても……」
「あたしがアールシュタッドのおっさんの命を狙うとか……ありえねぇだろ」
「ひょっとしたら文香の命を奪えなかったらそうやって迎撃をするのが狙いだったのかもしれませんね」
「……かもな」
あたしはメルや錬達が聞いてきた話に尚兄や香達と共に溜め息を吐いていた。
「ただ……良識のある冒険者は全く集まってなくて、メルロマルクで問題視されて

いる冒険者しか集まってないんです」
「どういう連中なんだ？」
キールがそんな事を言ったウェルトに尋ねる。
「え～と……他人の依頼を横取りしたり、他人の恋人を奪ったり……そんな悪い噂しか聞かない奴よ」
「……正直、仲間の女性もそんな人ばっかですね」
「……正直、装備は一流、実力は二流、仲間は三流、人間性は三流以下と言われているな」
「最ッ低……！」
ファリーとテルシア……鎧野郎の後釜であるバクターの言葉にウィンディアが顔を嫌悪に歪めながらそう言い捨てた。
「……つまり、再起不能にしてもあんまり心が痛まねぇ連中って訳だな？」
「……文香？」
あたしがそう呟くと、メルは心配した様に寄り添う。
「……尚兄、錬。あたしが囮をするからその隙に偵察をしてくれ」

「文香!?　お前、何を……」
「確かにそれは必要ではあるが……」
あたしがそう言うと、尚兄も錬も心配するかの様な表情でそう言う。
「大丈夫さ、ルプトナ達と一緒に囮をするからな」
「おい」
「さらっと道連れにした!?」
「いや、まぁ……俺達も警戒されてるからだろうが……」
「まあ、正直腹立つような連中だから僕も良いんだけどね」
あたしの言葉にルプトナ達が目を向くが、すぐに居直って全員が頷く。
「……わかった。でも、無理はするなよ」
「ああ、あたしも死にたくはねぇしな」
あたしは心配する錬の言葉に微笑みながら頷く。所で……
「尚兄、もの凄く怖い表情なんだが……どうした？」
「いやぁ……なんでもないよ？」
いや、望先輩やアラヤを睨んでいた時と同じ表情なんだけど……？

あたし達は堂々と進軍しながらアールシュタッド領の領主の館の正門に立つ。
「あ、アイツは!?」
「お尋ね者の女だな！」
「意外と良い女じゃねぇか……連れてる女も良い女だし、捕まえたら俺のハーレムに……」
「くたばれ！」
あたしは開戦を告げる先触れとしてそいつの股間を思いっきり蹴り上げると、浮いた所を爪で手足をぐちゃぐちゃにした。
「あぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
そいつは小便と血を撒き散らしながら宙を舞った。
「な、野郎……!?」
「開戦だぁ！　出来るだけ殺すなよ！」
あたしの方向と共にルプトナ達は一斉に戦闘を開始する。
「天狼拳『氷爪』！」

「ひ……さ、寒い……」
　アルシオが冷気を拳に溜めて殴り飛ばすと、そいつは凍り付きながら吹き飛ばされる。
「『流星弓』！」
「「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」」
　クーフィリアが魔力で出来た矢を雨霰と撃ち込み撃ち込まれた奴等を叩き伏せる。
「ブレイブスパーク！」
　鋼山先輩が自分の十八番を叩き込んで周囲を囲んでいた連中を吹っ飛ばす。
　圧巻なのはルプトナだ。
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
　先ずは回転しながらの回し蹴りで周囲の敵を吹き飛ばすと、後ろから斬りかかってきた敵にノールックで肘鉄、勢いそのままにその敵の首を足で挟み込んで敵を巻き込んで投げ飛ばすとまさにちぎっては投げちぎっては投げだ。
「負けらんえねぇな……と！」

あたしは爪で冒険者を囲んでた女の一人の顔をズタズタにすると斬りかかってきた敵を女の体を足場に回避し、その勢いのままに踵落としを叩き込みその体を更なる足場にして敵の肩を爪で抉り抜く様に貫く。

さぁて……尚兄達が来るまでに何人再起不能にしなるのかな……っとぉ！

「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ……」

「文香姉ちゃん、派手に暴れてるな……」

「……ですね」

私達が偵察の為に屋敷に侵入する隙を探していたら、遠くで悲鳴が聞こえてきたのでキールがボソッと呟きます。

「岩谷様が正門に来たらしいぞ！」

「ほ、本当に戦うのかよ!?」

「しょうがないだろ！　俺達は衛兵だぞ！」

そう口々に言って衛兵達は正門に向かって走り出し、私達はその隙に潜入に成功しました。

「調べるべきはなんでしょうか？」
「先ずは構造、次が親玉の場所だ」
「親玉の場所はわかるぞ」
「なんでよ？」
ウィンディアの疑問を聴いた錬さんが指を指すと、そこにはフレイアに似た雰囲気の女性が窓際にいました。
「あ～……アイツがミリティナですね？」
「うん。あの人がミリティナだよ」
何故かメルちゃんが容姿を知っていたので面通しの為に連れて来たんですが……何で知ってるんでしょうか？
因みに他のメンバーは退路の確保の為にフィーロやサクラと一緒に待機をしています。
「む……？　盾と剣と投擲具か……何故此処にいる？」
私達が声に振り向くと、そこには黒い鎧と剣を持った男の人でした。
「ち……行くぞ！」

尚文さんは舌打ちをしながら戦闘態勢を取ります。
「俺は何人も殺してきた。お前達も俺の剣で切り刻んでやろう！」
「最低……！」
男の人は狂気を孕んだ目で楽しそうに言います。
「ちぇえええい!!」
「ぐ……!?」
ガイン！　と大きな音が鳴り、尚文さんが痛がります。
「気を付けろ！　こいつ、俺の防御力を越えてきやがったぞ！」
「俺達が食らったら一溜まりもないな……！」
尚文さんの言葉に錬さんは冷や汗を流しながらそう呟きます。
「まあ、盾なら防御力無いと困るよな。試させてもらおう」
男の人はそう言いながら剣を構えて……今！
「クロノブラスト！」
「うお!?」
私はクロノブラストを撃ち込んで男の人の態勢を崩します。

「この……邪魔を、するなあああ！」
「邪魔させてもらうぜ！」
男の人は私に向けて突進してきますが、キールに足払いを食らってゴロゴロと転がります。
「くそが！」
「ウィンディア！」
「わかったわ！」
私は男の人をエアストローで迎撃すると、ウィンディアが男の人の肩を抉ります。
「ぎゃあ!? くそっ！」
「隙ありだ！」
男の人はウィンディアを蹴り飛ばして態勢を立て直そうとしますが……そこに錬さんが走りより、思いっきり頭を剣の腹で殴り飛ばしました。
「ぐばべ!?」
物凄い音がして男の人はぶっ倒れました。

「……脳震盪でしょうか？」
「そりゃあんだけでかい音が出るほど殴られればな……」
私は男の人をツンツンと爪先で突きながら呟くと、尚文さんが苦笑いをしながらそう言いました。
「これからどうします？」
「一先ずは文香達と合流だ。今の騒ぎで他にも来ないとは限らないからな」
「だな」
私達は男の人の身ぐるみを剥ぎ、縄でぐるぐる巻きにした後で文香と合流すべく合流場所を目指して走り出しました。

如何でしたか？
次回『戦闘開始～錬の怒り～』
お楽しみに！ そして良いお年を！

戦闘開始～錬の怒り～

いざ、戦闘開始です！

「ほいほいっと」

あたしは戦闘不能にした冒険者の身体を次々と積み重ねて行く。え～と……5人合わせて１００人位かな？かなりの数の屑どもを潰せたと見て良いな、うん。

「……ちょっと、やり過ぎたか？」

「何が『やり過ぎたか？』、だ。完全にやり過ぎだ。見ろ、衛兵達は完全に腰がひけてるぞ」

「え～……真帝国軍なんてどんなにぶっ飛ばしても攻め込んで来たぜ？」

「あれは狂信者が多かったからだと思うが……」

「うんうん」

「僕もそう思う」

あたしの言葉に全員が頷きながら話して……おっと、合図の『ファスト・ライト』か。

「合図が来た、ずらかるぜ！ ガエリオン！」

『任された！』

あたしはガエリオンを呼ぶと、全員でその背に乗っかり空へと舞い上がる。

「ミリティナに伝えとけ！ あたしは地獄からお前を殺すために舞い戻ったってな！ あと、嘘は長くは続かないってなぁ！」

あたしはミリティナに対する殺し文句を言うと、尚兄達との合流場所に向かってガエリオンを飛翔させた。

「って、ミリティナの居場所は何処だよ？」

「落ち着け。先ず、ミリティナ……いや、糞ビッチの居場所はわかった。館の詳細はわからなかったが……」

「メルちゃんが『何故か』詳細な図面を持ってたのでこれを使います」

あたしはガエリオンが完全に街の外に出る寸前で魔法で姿を消して飛び降り、尚

兄達との合流場所にやって来た。

……メル、お前さ確かに「もしもの時は正体を明かして助ける」って言ってたけど……だからってなんで図面を持ってるんだよ？

「私がアールシュタッド伯のお屋敷を設計した設計士の友人から譲り受けたからだよ。その人はミリティナ様の癇癪のせいで殺されちゃったみたいで……その敵討ちの意味も込めて渡してくれたみたい」

「……ある意味あのバカのお陰か」

あたしはバカの気の短さに呆れながらもその短気さに助けられた部分をありがたく活用させてもらう。

「屋敷の図面からしてミリティナのいた場所は此処だ」

尚兄が図面で窓に面した見晴らしの良い場所を指差す。

「屋敷の正面は……絶対に冒険者が待ち伏せているでしょうから、通らずに裏口に回り込みましょう。そこからは各自が別れて行動してください」

「何故別れて行動する必要があるんだ？」

香の作戦に錬が疑問を述べると、香は「敵に捕捉された際に全員が敵に手間取ら

ない様にするためです」と言うと「そうか」と頷きながら姿勢を正す。
「ミリティナを発見したらすぐに攻撃しようとはしないでください。ひょっとしたら魔法で隠れた敵がいるかも知れないので」
「あ～……確かにアイツならそんなこすっからい真似をしそうだな」
あたしが香の懸念にウンウンとうなずく。
「護衛を担当している冒険者は叩きのめして再起不能にする。で、ミリティナは……まあ、文香の自由にしろ」
「ただ、腕のたつ冒険者が護衛についてるでしょうから油断は大敵です」
あたし達は尚兄の言葉と香の注意に頷きながら行動を開始した。
一応屋敷の正面を観察ついでに見たんだけど……うん、冒険者がわんさかといるな。
「誰が馬鹿正直に突っ込むかよ……予定通り、迂回するぞ」
あたしが呆れながら迂回を宣言すると、全員が頷きながら動き始めた。

「なんで裏門に鍵が無いんだよ……」

「それと警備員もな」
「いや、南京錠はあったんだが……ウィンディアの剣であっさり切れるほど脆くなってる物だった」
「警備員も普段は使わない門だから最小限の人員で、しかも夜の間にしかいないらしい」
「よーするに、文香の事を馬鹿にしてるって事だよね……」
あたし達はあっさりと裏門から侵入に成功すると、そのまま屋敷の中に……
「ん？　なんだ、あの氷の棘……」
「!?　文香！」
あたしは見つけたそれを見て、錬がいきなりあたしを押し倒した。
「れ、錬……いきなり何を……!?」
「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
あたしはいきなり押し倒された気恥ずかしさで顔を赤くしていると、近くから悲鳴が聞こえたから振り向くと……そこには剣を振り上げた状態で氷の薔薇が咲いた彫像の状態で凍り付いた冒険者……ひ!?

「な、なんで急激にミイラに……!?」
「嘘、だろ……？『青薔薇の剣』の『武装完全支配術』に『記憶解放術』だと……？」
「あれ……？ なんか、空気中の魔力が……」
「っ！『夜空の剣』の『記憶解放術』か……！」
あたしが戦慄した状態とルプトナが呟いた状況に心当たりがあるのか、錬が混乱しながら呟く。
「今ので死んでおけばいいものを」
あたし達が声に振り向くと、そこには柄の部分に薔薇の花をあしらった薄青の剣を左手に黒い木で出来た剣を右手に持ち、他に 5 本の剣を浮遊させたナルシスト野郎がミリティナや他の冒険者を引き連れてそこにいた。
「ミリティナにナルシスト野郎……！」
「お前達が盾と剣、投擲具か。よくもまあノコノコとこんなところまで犯罪者と一緒に殺されに来たものだ」
「は！ 誰が殺されてやるかよ、逆に此方がてめぇをぶっ殺してやらあ！」

あたしがナルシスト野郎の言葉に挑発で返すと、ミリティナがそれを嘲笑いながらこう言った。

「ふん、偽勇者が吠えるものですわね……私の好意を無下にし、辱しめたばかりかそもそもの目的が剣の勇者様に取り入り、盾と共謀して国を自分の思うがままにするためだったなんて……。マルド様に聞かなければ、私は間違えてしまうところでしたわ。……剣の勇者様は手遅れだったみたいですが」

「やっぱ、鎧野郎も一枚噛んでたか……」

あの野郎、次会ったらただじゃおかねぇ……！

「まあ、所詮は犯罪者。犯罪者は犯罪者同士消えて仕舞えばいいのですわ！」

「消えるのは、てめぇだ……へ？」

これ以上の問答は無用とばかりにあたしはミリティナに飛び掛かろうとして……あたしの横を錬が通りすぎて、ナルシスト野郎に斬りかかった。

「なんで……なんで、その2本をお前が持っている！　それは、『ユージオ』とキリトの剣だ！」

「ふ……何を言っているのかわからないが、これは僕が女神様から授けられた剣の

コレクションの内の2本に過ぎない。まあ、何処の馬の骨が持っているよりも、美しいこの僕が……」

「馬の骨はお前の方だぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

錬は憤怒で顔を歪めながらナルシスト野郎に連続で斬りかかるが、ナルシスト野郎は涼しげな顔で受け流し続ける。

「くそ……『エアストバッシュ』！」

錬は受け流し続けるナルシスト野郎に余計に苛立ったのかスキルを使用して攻撃するが……

「ふ……『空斬（からぎり）』！」

「な、ぐあぁぁぁぁぁ!?」

ナルシスト野郎が技の名前を言うと、ナルシスト野郎の回りを浮かんでいた剣の一本が錬の周りを斬ると、錬と錬のスキルが無数の斬撃に切り刻まれた。

「錬！」

「こ、今度は、『ベルクーリ』、さん……の……『時穿剣（じせんけん）』！ふざ、けるなぁ！」

あたしが錬を抱き起こすと、錬はボロボロの状態で立ち上がる。

っち……とんだ死闘になりそうだな……！

あたしは錬にポーションをぶっかけると、冷や汗を流しながら戦闘を開始した……

「錬!? あの馬鹿……！」

私達は錬さんが怒り心頭の状態で突進したのを見て慌てながら向かおうとして……

……すぐに他の冒険者が私達の前を塞ぎます。

「しかし、あの亜人と女の子達……可愛くね？」

「盾と狼と犬を殺してＧＥＴだな！」

「じゃあ、誰が最初にあいつらを殺せるか勝負だな！」

そんな事を言いながら剣、槍、弓を手に持った男の冒険者達が好色な目を私達に向けながらそう言います。

「……腹立つなぁ」

「はい」

「と、言うか……手練れそうでもそんな感じなのね……」

「しかも、キールに至っては女の子扱いされてなかったし……」

「……だね」
「???」
私達が苛立ちながらそう言うと、キールは何が何だかわからなそうな顔で首を傾げました。
「亜人ちゃん達を寄越しな！　盾えぇ！」
そう言って兄さんと同じように槍を持った人が尚文さんに飛び掛かりますが、すぐに『キメラヴァイパーシールド』に迎撃されます。
「ち、毒か「隙あり！」ぐべば!?」
慌てて槍の冒険者は解毒薬を使おうとしますが、容赦なくルプトナさんに回し蹴りをくらってぶっ飛ばされました。
「猫魔法『きりさき（スラッシュ）』！」
「『ツヴァイト・アクアアロー』、『ツヴァイト・アクアスラッシュ』！」
「ぐ……こ、この……！」
メルちゃんとクーフィリアさんは樹さんと同じように弓を持った冒険者に魔法を連射して攻撃に集中させないようにしています。

「くそ、だったら……」
「ここ！」
「くらえ！」
「げびあ!?」
弓の冒険者は苦戦している事を理解したのか、モーニングスターを取り出しますが……武器を持ち変えようとする瞬間にキールとウィンディアが同時に攻撃して吹き飛ばしました。
「隙あり！」
「隙はありません！　エアストスロー！　クロノブラスト！」
「あがば!?」
私は復帰した槍の冒険者を蹴り飛ばすと、もう一度ぶっ飛ばしました。
「ふっ、し、はっ！」
「ちぃ！」
一方、尚文さんは錬さんと同じように剣を持った冒険者の連続攻撃に苦労はしているようですが、どうにか捌けているようです。

「くそ、くらえ！」
「ぬん！」
　焦ったのか剣を持った冒険者は大振りの一撃を与えようとしますが、アルシオさんは手に持った棍でそれを受け止めると、すぐに棍で滑らせるように剣を受け流し弾きました。
「な、てめぇ……」
「剣を握り込んで手放さないようにしないとは……鍛練がたりん！『魔狼拳（まろうけん）』！」
「ぐばあ!?」
　そのまま棍で関節を固めて回すように投げ飛ばし、地面に叩き付け棍を鳩尾に打ち込みました。
「さあ、雑魚は片付けました！　次はあの男です！」
「いや、まだだ！」
　私達が文香さんの所に向かおうとすると、私達がぶっ飛ばした冒険者達のハーレムメンバーが道を塞ぎます。
「良くも『ギイン！』をぶっ飛ばしてくれたわね！」

「『ガイン！』様もですわ！」
「『ギギイン！』もよ！」
「『ガギィィン！』様の邪魔はさせませんわ！」
……あり？　錬さんと文香さんの戦闘音が邪魔で冒険者達の名前が聞き取れません。
「ふかあああああつ！」
「ゾンビかお前は！」
またも突っ掛かってきた槍の冒険者の攻撃を尚文さんが受け止めると、ハーレムメンバーが突っ込んできて乱戦になります。
ああ、もう！　本当に邪魔ですね！

次回『剣と探索者の目覚め』
次回もお楽しみに！

剣と探索者の目覚め

あけおめ！ そして遅れてごめんなさい！

「なろぉ……！ エアストクロー！」

あたしが飛んできた剣を防ぐ為にエアストクローを使うけど、錬をズタズタにした剣が振るわれあっさりと迎撃された。

「くそ……なんなんだよ、あれ。反則だろうが……！」

「時穿剣の武装完全支配術の空斬は少し先の未来を斬る技だ。剣を振るったタイミングで威力を保つから……まあ、強化を発揮していない状態だと難しいかもな……」

あたしのぼやきに錬が溜め息を吐きながら言う。

……やっぱ、そうなるよなぁ。

「……尚兄達と強化を共有するまでとか、そう言うの言ってる場合じゃないよな」

あたしは腹を括ると、凛から教えられた小手の強化方法、理奈から教えられた斧

の強化方法を即座に実行する。
「スキル速度及び、身体への斬撃耐性の付与……いっけぇ！　エアストクロー『Ⅴ』！」
「ふん……何!?」
斧と小手の強化方法で速度を強化されたエアストクローが剣の能力による防御を突破し、ナルシスト野郎に炸裂する。
「はあぁぁぁぁぁ！　『ハンドレッドソードⅢ』！」
錬も最大まで強化すればその名の通りになりそうなスキルを使ってナルシスト野郎に追撃を仕掛ける。
「ぐううう!?　くそ、美しい僕に攻撃を届かせるなんて……腐っても勇者、と言うことか。ならば、僕の一番美しい武器で殺してあげよう！」
そう言ってナルシスト野郎は黄金に輝く二本の剣を虚空から呼び出し、手に持った。
「……『聖剣エクスカリバー』に『エクスキャリバー』……！　本当にふざけるなよ、お前は……！」

どうやら、あの剣は錬にとって思い出のある二本らしく、憎々しげな表情でナルシスト野郎を睨み付ける。

「エクスキャリバーは、その剣はキリトが、サチさんが、アスナさんが、リーファが、リズが、クラインが、姉さんが、シノンが！　みんなで必死になって頑張って手に入れた剣だ！　お前が、遊び半分で手にして良い剣じゃないんだ！　聖剣エクスカリバーの方も、お前なんかよりもよっぽど似合う人がいるんだ……返してもらうぞ！」

「ふっ……来い、『インペリアル・ファイブ』！」

あれは……スパーダ、ファルシオン、カトラス、レイピア、マンゴーシュ？　今までに比べりゃ普通の……

「従剣劇『三重奏』！　さらに……『ダブルサーキュラー！』」

「うおわぁ!?」

「キリトの『二刀流』のスキル……！　それを三重奏とインペリアル・ファイブの装備ボーナスで強化したのか！」

あたしはナルシスト野郎の３本同時の二連続突きの攻撃を防ぐ……が、威力も

速度も急激に上昇していた為に吹き飛ばされる。
「っ、その強化の内容は!?」
「スパーダはSTR（筋力）、ファルシオンはVIT（耐久力）、カトラスはDEX（機動力）、レイピアはAGI（敏捷性）、マンゴーシュはTEC（技術力）……！」
「……怪物かよ」
あたしはその無茶苦茶さに思わず呆れてしまう。
だが、ナルシスト野郎はそれを気にも留めず、むしろ誇るように胸を張っていた。
「この世界で最高の美を持つ者が持つに相応しい武器だろう？　理解したのならば……死ぬがいい！『スターバースト・ストリーム』！」
「ぐあああ!?」
「が……!?」
ナルシスト野郎は剣を持ってまるで銀河の輝きの様なエフェクトを纏った剣を振るい、あたし達は吹き飛ばされ……あたしの意識は、闇に落ちた……

俺、天木錬が憧れと嫉妬を抱いているのは何人かいる。

一人目は『キリト』こと『桐ヶ谷和人（きりがやかずと）』。
SAOをクリアに導いた英雄であり、ゲームに関しては天才的なセンスを誇る人物。
けど、同時に……そんな才能に対して嫉妬を抱いてしまう。
二人目は『サンラク』こと『陽務楽郎（ひづとめらくろう）』。
『クソゲーハンター』を自称している変人だが、あらゆるユーザーインターフェースに対応できる対応力やあらゆる行動に反応できる反応速度は素直に尊敬できる。
三人目は実の姉である凛……天木凛だ。
姉さんは俺が思わず尻込みしてしまう状況や人物でも笑って走り出せ、話せる人だ。
実際、死銃事件後の事件の犯人の一人がキリトさんを狙った暗殺を身を挺して防いだみたいだしな。
他にもいるんだが、俺の中で特に憧れと嫉妬を抱く人物はその三人だ。
「……情けねぇな」
俺は暗闇の中で自嘲気味に笑う。

逸って飛び出したにも関わらず、岩谷を巻き込んでボロボロにやられてキリトやユージオ達の剣も取り戻せないとはな……

「……ん？　あれは……？」

俺が前を見ると、そこには台座に納められた漆黒の剣とそこに佇む二人のって……

嘘だろ!?

「ＡＬＯとＧＧＯの……俺？」

そこにいたのはＡＬＯにおいて火妖精族（サラマンダー）で作成した俺のキャラクターとＧＧＯでシノンや姉さんとの連携を重視したスタイルの俺のキャラクターだった。

「これは……『黒蓮の剣（ソードオブブラックロータス）』……？」

台座に刺さっていたのは姉さんがアンダーワールドでの死闘で使用し、俺もまた使った装備の片割れだった。

「……俺に使えって言ってるのか？」

二人の俺がふっと笑い、剣を指差す。

……こりゃ、肯定ってことだな。

「……やられっぱなしは性に合わないしな」

俺は黒蓮の剣を掴み……『黒蓮の剣が登録されました』……ウィンドウが現れたって事は使える様になったって事だな。
「……使わせて貰うぜ、『ブラックロータス』」
俺はこの剣の能力の元になっていた人に力を使うことを言いながら、目を覚まし……

「……此処、『ヘルヘイム』か？」
あたしはナルシスト野郎にやられ、意識を失って目を覚ますとそこは奈落が渦巻きつつも、光に包まれて空へと昇る妙な世界だった。
こんな奇妙な世界、危険な形で混ざりつつあった『世界樹（ユグラシドル）』と『時間樹』を平和な形で混ぜ合わせる事であたしが作り出した『時間世界樹（イグラシドル）』のヘルヘイムしかねえんだよなぁ……
「誰が呼び出したんだ……「漸く来たわね、この大馬鹿！」ぐべあ!?」
あたしが誰が呼び出したのかを悩んでいると、いきなり後ろから蹴り飛ばされた。
「て、てめえ……『ナルカナ』ぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！　いきなり、何しやがる！」

「うっさい！この私が折角『地球（ブルースフィア）』からマナを供給してやったっていうのに……！一々、傷だらけになってマナを消費するもんだからあのメルって子経由で供給してやらなきゃいけなかったのよ!?」
「だからって蹴りを入れる奴がいるかこの堕神剣がぁ！」
「言ったわね!? 言ってはいけないことを言ったわね!?」
「何故、お前達は顔を見合わせる度に大喧嘩をするんだ……」
「相変わらず仲が悪いですね……いや、前世の私が言うのもなんですけど……」
あたしは蹴りを入れてきた人物……ルプトナのオリジナルとも言える人物であり永遠神剣『叢雲（むらくも）』のアバターである『ナルカナ』と殴りあいの喧嘩をしていると、その使い手であり望先輩の前世である『ジルオル』とあたしの前世であるアインヘリアルの『御神風花（みかみふうか）』が呆れながらやって来た。
ナルカナ以外の二人はなんやかんやあって死んでたんだが……まあ、色々あって蘇ったんだよ。
「……んで？あたしを呼び出したって事は、なんか用事があったんだろ？」
「……うん。あなたの……ううん。貴方達3人のシャードが使える様になったわ」

……ああ、あたしだけじゃなくてアルシオやクーフィリアのシャードも使える様になったのか。

「それから、はい」

そう言って、風花が手渡したのは柄が樹で出来た永遠神剣『黒影』……の特性を吸収した神殺しの宿り木の枝『ミストルティン』を核にした疑似永遠神剣『神殺』だ。

「……直ったんだ。あんな無茶な使い方をしたのに」

「この子の心の傷を癒したのは文香だからね」

あたしは神殺を受けとると、風花は茶化すように言う。……うっせえよ。

「それから、『アイツら』も待ってるぞ」

ジルオルがそう言って向こうを顎で示すと、そこには大正時代の男子学生の服を着た中学生『空閑フミカ』、巫女服を着て眼に眼帯を着けた高校生『来栖川文香』、ボロボロの服に黒いマントを羽織った幼女『フミカ』がそこにいた。

……全員、平行世界のあたしでありあたしのシャードに宿った特異な力で実体化出来るようになったんだ。

「……行ってこい」
「……ああ」
あたしはジルオルの言葉を背に受けながら歩き出す。
……あたしに宿ってるヴァルキリー『ブリュンヒルデ』も準備万端みてぇだしな。
「参りましょうか」
「行くぞ」
「あのナルシスト野郎やその仲間達をぶっ飛ばそう！」
「……ああ！」
あたしは、身体が浮遊する感じを受けながら目を覚まし……

「こんのぉ！」
私は槍の冒険者の攻撃をナイフで防ぎながら、ナルシストを攻撃しようとしたのですが……
「うっひゃあ!?」
「余計な真似はせずにこの私が勇者となる場面を見ているが良い！」

ナルシストから飛んできた剣を転がって避けます。このままじゃあ、錬さんと文香さんが……！

「尚文さん！　なんとかしないと！」

「なんとかって、どう、やって……？」

私が尚文さんに打開策を求めると、尚文さんは何かを思い出したかの様な表情で立ち尽くしました。

「尚文さん!?　どうしたんですか!?」

「……いや、ちょっと思い出した事があってな。あの馬鹿……！　最終決戦後に色んな事の記憶を消したな……！」

な、なんか滅茶苦茶怒ってませんか……？

「貰った……「飛んでけ、お空の向こうへ――――――――！」あばがぁ!?」

そんなぼうっとしていた尚文さんに槍の冒険者が攻撃を……しようとして、文香をダウンサイジングした様な女の子に飛び蹴りを食らい空に吹っ飛ばされました。

「え!?」

「……フミカか」

「え？　文香なんですか、この子？」
「まあ、文香であって文香でないって言った所だな」
？？？　良く解りませんね……
「遅いですわね」
「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
「『ライトニードル』」
「眼が、眼がぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
残る二人の冒険者も文香に似た女の子達に倒されており、二人はそのまま冒険者達のハーレムに襲いかかります。
……あれ？　ということは……？
「やれやれ……まだ抵抗をするのかい？　地力の差は……」
「剣の勇者、天木錬が命じる！　理不尽に扱われし剣達よ、我が元へ来たれ！」
錬さんがそう言うと、ナルシストの使っていた剣や持っていたと思われる剣が全て錬さんの下へと集っていきます。
「な!?　ぼ、僕の剣が……貴様！　なにを……「『剣王の城』、隙ありだぁ！」な、

ぐあ!?」

驚愕しているナルシストに文香が持っている剣と爪の……へ!?

「き、貴様……何故爪以外の武器を……!?」

「これでも、世界を救った英雄様なんでな……！『W・A・R・S（ウォーズ）』……『ヴァルキリアアーマー』！」

文香がそう言うと、何処か神々しくメカニカルな鎧兜を身に纏います。

「さぁ……決着（ケリ）をつけようぜ！」

文香はそう言って獰猛に笑いました。

いや、去年は祖父が亡くなったり、祖母が入院したり気が滅入るニュースや出来事がたくさんあったので更新する気がなくなってしまいまして……

こんな作者ですが、これからもよろしくお願いします！

四聖姉妹の奮闘記

著者　愛川蓮

発行日　2022 年 2 月 5 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
https://syosetu.org/novel/204034/

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。